
水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。7
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。７

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。7
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


メガ・ネプチューン=Mk.Ⅱ
イースナ
トゥアール
津辺愛香
観束総二
神堂慧理那


初めてエレメリアンが現れたあの日。
ツインテールを奪われる君を
見たからなんだ――

目次

水沢夢
[イラスト]春日歩

俺、ツインテールになります。7

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを愛する高校一年生。
テイルレッドに変身。

トゥアール
異世界から来た美少女。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。
テイルブルーに変身。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。

イースナ
善沙闇子の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
神堂家のメイド兼
ボディーガード。

プロローグ　ポニーテールな俺様たち。

一八六兆 三四六二億 四七九六万 八二三一。

見ただけで居眠りしちまいそうな数だが……これが、プログラムコードの行数らしい。

実際はそのさらに何十倍もの文字を画面に行進させてるわけだから、たまんねえ。

涼しい顔で引いん率そつを務めてるセンセイの名前は、ペガサスギルディ。

アルティメギル史上最高の頭脳と謳うたわれた天才にして、科学技術長。

そして俺様と同じく、ポニーテールという熱き属性こころを分かち合った──無二の親友だ。

「やあ、フェニックスギルディ。よく来てくれたね」

欠伸あくび交じりにコンピュータの画面を覗き込んで、俺様は尋ねた。

「お前、こんな似たり寄ったりの文字繫つなげて、いったい何こしらえる気だよ？」

属性力エレメーラを奪うリングや精度の高い空間転送装置みてえな大層な発明だけ作ってるかと思えば、戦闘員アルテイロイドのマスクに美少女の顔を転写してみたり、たまによくわからねえことをする奴やつだが……こいつが今やってんのは、その両極端ひっくるめたとんでもねえことみてえだ。

呆あきれる俺様に、ペガサスギルディは笑って答えた。

「ポニーテールを作りたいんだ」

いやあ、まいったぜ。頭のいい奴ってのは、どうも馬鹿でいけねえ。もちろん、好きな類たぐいの馬鹿だがな!!

「この文字がもっと増えりゃ、ポニーテール属性になるってのか!?　一から属性力エレメーラが作れるなんてお前、アルティメギルがひっくり返っぞ!?　よし、俺様にもくれ!!」

「君の手の平返しはいつも気持ちいいな。どうせできっこないって思ってたんだろ？」

天才は小難しい計算で相手の思考まで読んじまうってのか、怖こええ怖え。

「正確には、ポニーテールになりたいと言うべきかな。この私自身が」

さすがの俺様も、言葉を失った。

「……お勉強のしすぎで、熱でも出たか!?　そりゃつまり、人間になりてえってことだろ!?」

「ちょっと知恵熱が出たぐらいでは君の暑苦しさには負けるが……幸い、平熱だよ」

口調は変わらず軽いが……大真ま面じ目めらしい。

「考えてもみたまえ。人間なら、私たちのように属性力エレメーラを奪わずとも生きられるじゃないか」

ペガサスギルディは興奮気味に捲まくし立てた。

「それだけじゃない。自分自身でポニーテールになれる。決して奪うことなく、他の人間のポニーテールを愛めでることができる。それは、本当に素晴らしいことだ」

めちゃめちゃ当たり前の話だが……俺様たちエレメリアンには、常そ識れが何より難しい。

科学者なんてみんな現リ実ア主リ義ス者トだと思っていたけどよ、こいつは違う。

天駆ける白馬のように優雅な純白の容貌は、組織でも指折りの美しさ

だ。

　その美貌をガキみたいに色気のねえ可イ愛カいす笑顔で彩って、ペガサスギルディは言った。

「おかしいかい？　エレメリアンが人間に憧あこがれるのは」

　危うかろうが何だろうが……俺様は、こいつの度を超えたひたむきさは尊敬するぜ。

　どんな馬鹿げたことでも、真マ剣ジにやりゃあいつか辿たどり着く。それが俺様の持論だからな。

「……いいや。お前が真マ剣ジなら応援するさ。んで、完成はするのか？」

　俺様が茶化し気味に問い質ただすと、ペガサスギルディは芝居っぽく肩を竦すくめてみせた。

「これを続けるだけでは無理だろうね。まだまだ先は長そうだ」

「ふうん。でもよ、どうして人間になりてえなんて思った？　……もしかしてあれか。少し前に立ち寄った世界で会った女の子。何だっけ、難しい字の……」

「結いわ翼ばね唯ゆ乃の」

「そうそう。その子のポニーテールに、随分ご執しゆう心しんだったみてえじゃねえか。あんまりにも綺き麗れいすぎて、自分もそうなってみてえって思ったのか？」

　弱小部隊が投入されて、侵攻が停滞した世界を、ペガサスギルディは物資補給の名目で視察に行った。俺様もそれについていったわけだが──その世界で何よりの収穫だったのは、ツインテールの戦士じゃない。何のマークもされていなかった、偶然見かけただけの、ポニーテールの女の子だった。

　ユノか、あの子のポニーテールは確かに美しかったな……！

「お察しの通り、私は今、彼女のポニーテールに夢中でね。まさしく、

あれが私の目標さ」
　最優先のツインテール属性と双そう壁へきを成すポニーテール属性は、存在自体が組織の障害みてえな扱いだ。当然、奪うのも最後の最後。それ目当てで出撃する奴やつは一体もいねえ。今もちまちまと侵攻が続いていれば、あの子のポニーテール属性もまだ当分は無事だろうが……。
「お前ぐらい組織に貢献してる奴やつなら、お気に入りのポニーテールの女の子の一人ぐらい、目こぼしもあるんじゃねえのか？」
　ペガサスギルディは、どこか遠い世界を見るように視線を彷徨さまよわせた。
「言っただろう？　人間になれば、他人のポニーテールを愛でることもできる。エレメリアンの私じゃ、彼女のポニーテールを想えば想うほどに、その属性力エレメーラを手にしたいという衝動に抗あらがえなくなっていく………。見ていたいんだ、唯乃のポニーテールを……これからもずっと」
　珍しく、感傷に引きずられてるじゃねえか。
　確かに、厄介なもんだよな。俺様たち、エレメリアンの運さ命がはよ。
「割り切れねえもんかねえ。お前まるで、本当に人間そのこに恋してるみてえだぜ！」
　冗談半分で言ったってのに、まじまじと俺様の顔を見てきやがった。
「エレメリアンが人間に本気で恋をするって、あり得るのかなっ？」
「どうかな、俺様がポニーテールを見てその人間に惹ひかれても、結局恋してんのはポニーテールであって人間じゃねえだろ？　その先に行けたら、そりゃあ恋なんじゃねえのか？」
　エレメリアンが人間に本当の恋をする、か。そりゃある意味とんでもねえ〝科学〟だ。

「いずれにしても、運命に立ち向かうってんなら悪かねえ。応援してるぜ」
「君も色々お節介をして回っているようじゃないか。それも運命に抗あらがっているのかい？」
　ピアノでも弾くみてえに格好をつけたキータイプの最中、輪をかけて気取ったことまで口にしやがる。しかし、それがサマになっちまうのが、こいつのすげえとこなんだよな。
「別に大したことじゃねえ、俺様のやりたいようにやってるってだけさ！　どうにもあの作戦が気に食わなくてよ、目に余った時はつい介入しちまう」
「その世界で戦士を一人選び、技術を与えて利用し、ツインテール属性を拡散する……効率重視のあの作戦か。創造主である人間に対し、まるでこちらが神になったかのような傲ごう慢まんさだ」
　決して全部隊がそうしているわけでもねえが、最近はそれがアルティメギルの部隊の常じよう套とう作戦になっちまってるらしい。
「だが、君がそう思ってくれているのは心強い。今のままでは私の研究は手詰まりなのでね、その線から別アプローチを試みるつもりなんだ」
「人間になりてえのと、アルティメギルの作戦が、関係あんのか？」
「さっき、いいことを言ったね。その先に行けたら──って」
　いや、そりゃ恋の話が出た時のはずみだぜ⁉
「人間になるためには、強力な属性力エレメーラのデータが必要不可欠だが──それがどうにも不足している。皆、属性力エレメーラの成長値が横並びなんだ。最後の最後には簡単に勝ててしまえる、ハンデつきの技術提供──そんな作戦を続けたせいで、人間に突出した戦力がいない」
　確かに、とりあえずエレメリアンと戦えるだけ、ってレベルに意図的に留とどめてやがるな。手に負えなくなるぐらい強くなられちゃ困るって魂こん胆たんが見え透すいてて、俺様も好きじゃあねえ。

「私たちが最後に見るのは、いつだって人間の絶望だからね……人間とエレメリアンが互いに切せつ磋さ琢たく磨ましあえば、属性力エレメーラも私たちも、そして人間も……次の領域にシフトできると思うんだ」
「つまりお前さんは、人間側にもっと強くなってもらって、そのデータがほしいわけか？」
　ペガサスギルディは頷うなずき、
「アルティメギルが人間に渡す技術は、属性力エレメーラを扱うための基礎。練度を高めることができず、応用まで行けない。そこで私は考えた」
　力強くキーを叩たたくと、文字だらけだった画面が一転、ウィンドウにツインテール属性のエンブレムが映し出された。
「内なる属性力エレメーラを引き出すのみならず、もう一つ別に、同じ属性力エレメーラによるアプローチを試みるんだ。属性力エレメーラのコントロールを外部デバイスに任せれば、これは当人次第だが……自分自身の属性力エレメーラを高め続けることで、理論上は無限に進化できる」
　な、何を言ってんだ？　理論上とか言われても、その理論がまず全くわからねえ。
「簡単に言えば、二つの同じ属性力エレメーラの共鳴による相乗効果で強くなるシステムさ」
「いや、ちっとも簡単じゃねえけどよ……要するにだ。そいつを渡した人間は、すっげー強くなんだろ？　いいねえ、そんなツインテールの戦士なら、俺様も戦ってみてえ!!」
「それは君らしい」
　ペガサスギルディは立ち上がり、畳んだ白い翼を白衣のように翻ひるがえした。
「こちらの方はおおよそ技術的には確立したのでね、すぐにでも試験運

用したい。……一つだけ、保管してあったツインテール属性を拝借していたんだ。ばれたらただでは済まないね」
「やるじゃねえか！　いいんだよ、なーんかあの首領ヤロウ、大物ぶって盾たて突ついてくる奴やつほど可愛いみてえなスタンスじゃねえか。一泡吹かせてやれよ‼」
　組織に何の貢献もしてねえ、むしろ邪魔ばっかしてる俺様が無事なのが、その証拠だ。
「これを試すために、部隊に随行して、戦士の選定を引き受けたい。君、心当たりは？」
「そこで俺様かよ⁉」
「私の数少ない知り合いは、君やビートルギルディのような変わり者ばかりだからね」
　……お、なんだよこいつ、俺様以外にもダチがいやがったのか。ふーん……。
　ペガサスギルディの提案に、俺様も少ない知り合いを絞り出した。
「ん～。ドラグギルディが確か、今から侵攻するらしいな……。多少現地の戦士が強くなっても、あいつなら対処できるだろうぜ。俺様と同じで、敵が強いほど喜ぶだろうしよ」
「それなら、ドラグギルディ部隊の次の侵攻に同行しよう」
「こっそりな、こっそり。首領にこれ以上煙たがられねえようにな」
　わかってる、とのんきに返し、嬉うれしそうに作業を再開するペガサスギルディ。
「ところでフェニックスギルディ。この研究が完成したら……君も、人間になるかい？」
「そうだな……。お前の話を聞いて、俺様もポニーテールになりてえって思えてきたぜ。けどよ、なるなら俺様は自分の力でなるぜ！　俺様の胸に燃える属性力ポニーテールだけでな‼」

「本当に君を見ていると、夢も夢じゃなくなる気がするよ。じゃあ──競争だね」
　……ったく、しょうがねえ奴だ。でも何でかすげえ気になるんだよなあ、こいつは。
　人間に恋するなんて、危なっかしい真ま似ねをしてるからか？
　恋なんてもんは、同種の生物同士でしか成り立たねえもんだろうによ……。

　俺様が目を向けたコンピュータの画面にはまた、気の遠くなる数の文字が流れ始めた──。

◇

　はっとして意識が戻る。手には、ポニーテール属性のエンブレムが刻まれたレリーフ。
　あれからたった数年足らずで見る影もなく荒れ果てて、お化け屋敷みてえになっちまったが……俺様が今立つこの研究室ラボでは、そんな大層な夢を語る親や友つがいたんだ。
「ちっ……」
　結局あの首領ヤロウは、俺様たちを煙たがってるどころじゃなかったんだよな……。
　お前は夢のために殉じて……俺様も今や、勝手気ままな反逆者アウトローってわけだ！
　あれからお前は、ドラグギルディの部隊に同行したかと思ったら、すぐにトンボ帰りしてきて──それこそ、夢が叶ったみてえに興奮してたよな。
「あんな使い方をするとは想像以上だ」、「彼女は全次元の人類最高の

天才だ」、「彼女の力があれば唯ゆ乃のを救える」……なんて、いつにも増して舌滑りがよくなってたのを覚えてるぜ。

　その割りには、ドラグギルディ部隊もいつも通り侵攻した世界を墜おとしたって聞いたから、その技術は渡した人間も結局手に余したのかと思ってたが……。

　ちゃあんと、受け継がれてたってことだよな!?

　巡り巡ってその技術はダークグラスパーにも渡り、そして、ツインテイルズが生まれ──。

　なかなか、痛快なことになってるみたいだぜ!!

　親友の忘れ形見を手に、俺様は最終闘体へと変身する。

　俺様が、俺様のやり方で辿たどり着いた、俺様のポニーテールに。

　ペガサスギルディ……俺様は、お前があの日思い描いてたポニーテールになれたか？

「テイルレッドにテイルギアを託した少女───そいつが、ペガサスギルディが自分の夢を委ねたツインテールの戦士だったはずだ」

　確かめさせてもらうぜ、ツインテイルズ。

　あいつが託した力。お前らが、その手にするに相応ふさわしいのかをな。

　ああ、そういえば……俺様が自分でダークグラスパーに言ったことだっけな。

『ツインテイルズのとこに行きな。いるんだろ？　あいつらには、優秀な科学担当サポーターが』

　繋つながったぜ。俺様がテイルレッドに運命を感じたのも、勘違いじゃあなかったってわけか。

　そう……いるんだろ？　元ツインテールの戦士さんがよ。
　皮肉だよな。アルティメギルーの天才が、唯一天才と認めた頭脳の持ち主──それが、エレメリアンじゃなく、人間だったとはよ。どんな戦士か、想像しただけでわくわくしてくるぜ!!

　会えるのを楽しみにしてるぜ。
　テイルレッド───そして、最高の天才……テイルギアの製作者さんよ……!!

第一章　新たなツインテイルズ浸透作戦。

「総そう二じ様。昼休みにお話したとおり、部室に行く前におっぱいさすってくださいませんか？」
「えっ？　ああ……」
　放課後。ツインテール部の部室へ向かう道すがら、あまりにも自然にそう言われたので、俺は無意識にトゥアールの胸元に手を伸ばしていた。その手首を愛あい香かにガッチリ摑つかまれ、初めて俺は、そんな約束はしていないと思い至る。
「ホントに話術だけは達者ね、あたしも〇・三秒くらいあれっ？　て思っちゃったわよ!!」
「おっぱいって単語に反応する速度が高速すぎますよこの光ファイ蛮族！　せっかく心理学に基づいた思わずうんと言っちゃいやすい発声の抑揚を研究しましたのに!!」
　トゥアールが提示し、愛香が答え、そして響き渡る叫び。
　バーガーとポテトとドリンクの黄金トリオにも似た定番セットだ。

　陽よう月げつ学園高等部が二学期を迎え、数日が経たった。
　新学期が始まってしばらくは教室でも廊下でも、夏休み中に何があった、何をした、などの話に生徒が花を咲かせていたが、それもそろそろ落ち着いてきた頃ころ合あいだ。
　口論もそこそこに切り上げ、愛香とトゥアールがひそひそと話をしている。
「……ああ、総二様がどれだけ恥ずかしい思いをなされたか……私が不ふ甲が斐いないせいで……!!」
「まだ言ってんのあんた!?」

「だって、夏休み明けで経験済みになった人たちが自信たっぷりに武勇伝を披露している中、総二様は何も自慢できないんですよ⁉　総二様が童貞のまま夏休みを終えてしまったのは私と、それを邪魔する愛香さんの責任じゃないですかおぎゃあああああああああああああ‼」
　小声で何か話し合っていたと思ったら一転、愛香はトゥアールの肩を摑つかみ、独こ楽まのように高速回転させ始めた。また今回も、芸術点の高そうな技だ。
　一学期は愛香からトゥアールへの打撃の巻き添えで備品や校舎そのものを壊してしまうことが多かったのだが……即座に修復してくれるＤＩＹ研究会を始め、二人の人外な喧けん嘩かを日常のものとして受け入れてしまった陽月の生徒たちを見て、さすがに愛香も反省したらしく、二学期からは目標を定めたという。
　それが、今の技のような『学校に迷惑をかけないトゥアールへのお仕置き』、だ。
　根本がまだ間違っている気がするが、二人は楽しそうだし口出しすべきではないだろう。
「……いい子ぶるのはっ……やめてくださいっ……！　愛香さんも……ムラムラ……‼」
　ドップラー効果に回転運動が加わっているため、遠ざかっていく音源トウアールの声量はもはや高校物理で習う公式では算出できないほどに難解になっている。
「口に出すなって言ってんのよ‼」
「えっ……⁉　じゃあっ……愛あい香かさんはっ……顔にかけっ……」
　そんな高速回転するトゥアールをダッシュで追尾する愛香。
　壁にぶつからないよう軌道の微調整と、回転の再加速を一挙にできるからだろう、肩をベシンベシンと叩たたいている。
　異様な光景だが、すれ違う生徒は「おっ、風流だねえ」と言わんばか

りの着流しの似合いそうな粋な視線で見守ってくれている。
　いいのか、二人の高校生活は、これで。
「□□□□！」
　可愛かわいらしく宙を跳ねるツインテールの気配を感じ、俺は振り返った。やはり、歩いてきたのは慧え理り那なだ。
　用事があるのだろうか、定位置である彼女のやや後ろに桜さくら川がわ先生の姿はなく、別のメイドさんが離れた柱の陰から部室にたどり着くまでを見守っていた。
「観み束つか君、ごきげんよう！　あら、トゥアールさん、今日は独こ楽までですのね」
　児童用玩がん具ぐではしゃぐ子供を見つめる親御さんのように、二人の織り成すスーパープレイを讃える慧理那。
　俺も人のことは言えないが、やはり一般生徒よりも慧理那の方が観覧ギャラリー特性が成長著いちじるしい。
「慧理那、生徒会の仕事はもう終わったのか？」
「ええ。今日は会議も特にありませんでしたから」
　生徒会長として凜り々りしく振る舞っている時の、引き絞った弓の弦つるのようにぴんと張り詰めたツインテール。
　そして、俺たちと一緒にいる時に見せてくれる、無邪気で軽やかなツインテール。
　その違いがわかるようになり、俺はまた一段と慧理那との距離が近付いたように感じた。
「み、観束君……そんなに見つめて……わたくしの顔に何かついていまして？　あ、ツインテールがついていますわね」
　こんな冗談も言ってくれるようになったことが、嬉うれしい。
「ははっ、ついてる、だなんて……ツインテールは慧理那が努力して──」

「とぅあーる!!」
　自己紹介か掛け声か、判断に迷う叫びが響く。
　ホビーアニメの主役がライバルとの決戦回に見せる大技のような超絶軌道でトゥアール独楽が旋回し、俺と慧理那の間を疾風となって貫いていった。
「私にはっ……おっぱいがっ……ついてっ……」
　それまでスパイラルドップラーと化したトゥアールを微笑ほほえましく見守っていたはずの慧え理り那なが、何な故ぜか可愛かわいらしくぷう、と頬ほおを膨らませている。
　廊下にはトゥアールドリフトのタイヤ痕あとならぬ靴痕がついてしまっている。学校には迷惑をかけないという愛あい香かの目標が達成されるのは、まだまだ遠そうだ。

　部室の扉を開けると――黒いフリフリの衣装を身にまとった女の子が、パイプ椅い子すに腰掛けていた。
「ようやく来たか総そう二じ。待ちかねたぞ！」
　気さくに手を挙げ挨あい拶さつしてきたのは―
「……イ、イースナさんですの!?」
「何よ、その格好!?」
　遅れて入室した慧理那、愛香が、驚きで身を乗り出す。
　そして、人類の耐性限界を超える回転を味わったというのに、目め眩まいを起こした様子など微み塵じんも見せずリカバリーしたトゥアールが、慌てて部室の扉を閉めた。
「何であなたが学校にいるんです！　妙な学園ラブコメを夢見てるんじゃないでしょうね!?」
「ふふん、せっかく仲間になったのに隠し事をしておくのも何じゃ。今日は、総二以外にもわらわの正体を教えておこうと思ったのじゃ」

「正体ってあんた、まさかそれコスプレじゃなくて……」
　イースナが着ているのは、善いい沙すな闇あん子このステージ衣装だ。
　愛香が恐る恐る指を指すと、イースナはうむ、と自信満々に頷うなずいた。
　そう──今の彼女は、イースナではなく、善沙闇子。大人気アイドル・善沙闇子の正体が自分であることを、皆に明かしたのだ。
「善沙闇子おおおおお⁉」
「嘘うそ、本物⁉　あなたがですか⁉」
　愛香とトゥアールは互いの頬ほおがくっつくほどの勢いでイースナに詰め寄った。
「わあ、そうだったのですか……！」
　慧理那だけは純粋な驚きなのが対照的だ。
「そうじゃ。誇らしかろう。国民的アイドルが友人なのじゃからな‼」
　愛香とトゥアール、それに慧理那は、まだ信じられないという風に顔を見合わせている。
　認識撹乱装置イマジンチヤフによる意識のジャミングなので、言葉で説明されただけでは像が一致しない。自分でイースナと善沙闇子が同一人物であると確信し初めて、その事実を受け入れられるのだ。
「どうも～、お邪魔してます～」
　室内にはイースナの保護者ロボ、メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIの姿も。いつも桜さくら川がわ先生がしてくれていることだが、今日はメガ・ネが全員分のお茶を淹いれてくれていた。
　愛あい香かはようやく事実を受け入れることができたようだが、今度は俺に向き直り、
「ちょっと待って、そーじ以外にも、って……じゃあ、そーじは知ってたの⁉　いつから⁉」

「ケルベロスギルディと戦ったあたりかな……」
「ダークグラスパーが来てすぐの頃ころじゃない!?　何であたしたちに教えなかったのよ!!」
　当然、そう聞かれるよなあ……。
「アルティメギルの影の戦士であるわらわは、お前たちのように一般人の前で戦うわけではないゆえ、変身前の素性を隠す必要はなかった。そこで、神ゴツド眼め鏡がねの認識撹乱装置イマジンチヤフは、作戦に必要な善いい沙すな闇あん子というアイドルの正体の秘匿にだけ特化させていたのじゃ」
　イースナは何な故ぜか得意げに腕組みをし、愛香の問いに横から答えた。
「ところが、総そう二じだけは誰だれの力も借りずに善沙闇子の正体を見破ってしもうた。ふふ、やはり愛かのう。その時点でわらわたちは恋人となる運命だったのじゃ」
「……!!」
　愛香とイースナ、二人のツインテールの間に火花が散っているように見える……何故だ!?
　とにかく、ちゃんと理由を説明しないと。
「すぐに言わなかったのは……悪い。自分で色々考えてそうしたことで、隠してたわけじゃないんだ」
　初めは自分の直感が正しいって言う確証も持てなかったし、その後は——
「愛香さん、総二様のお気持ちも考えてください」
　俺の言葉を引き継ぐように、トゥアールがフォローをしてくれた。
「ダークグラスパーとツインテイルズが直接対決した後から、愛香さんは殺人ロボットみたいな顔でダークグラスパーのことを捜してたじゃないですか。あの時点でその正体が善沙闇子だと知ってしまったら、生放

送中に問題無用でとっ掴つかまえに行くのは火を見るより明らか‼」
　…………やっぱりトゥアールもすぐにその考えに行き着くのか……愛香には悪いけど……。
「しまいには、ライブの最中に善沙闇子のパンツをずり下ろしてアイドルとしての生命ライフを絶とうとするでしょう‼」
「んなことしたらあたしの社会的生命も終わるでしょ！　ちょっと表に連れ出すだけよ‼」
「テイルブルーに社会的生命なんてあると思ってたんですぎゃあああああああ」
　つい最近完成したヒーリングマシーン・トゥアヘルを引っ掴み、トゥアールに投げつけてぺしゃんこにする愛香。
　……大丈夫だよなあれ、金属とかいっぱい使って重そうに見えるけど、実際は３㎏とかそんなもんだよな。学校の机持ち上げるぐらいの気軽さで今持ち上げてたもんな、愛香。
「ぬおお⁉　トゥアールになんとひどいことを⁉　とても知的生物とは思えぬ原始蛮行じゃ！」
　椅い子すを蹴倒す勢いで立ち上がった善沙闇子……イースナが、慌ててトゥアールに駆け寄る。
　善沙闇子はダークグラスパー……──今はテイルブラックだが──に変身してアイドル衣装に着替えているだけなので、パワーはそのままだ。あっさりトゥアヘルを持ち上げ、トゥアールを救い出した。
「あれ、あんたに見せるのは初めてだっけ？　これがあたしたちの友情の形よ」
　ツインテールを掻かき上げ、素知らぬ顔で応える愛あい香か。何て世紀末な友情の形なんだ……。
「恐ろしく協調性のない奴やつじゃ。よかろう、わらわもお前にだけは思うところあった。いい機会じゃ、今ここではっきりさせておくか」

「何をよ？」
「エレメリアンどもは、やたらめったらブルーを怖がっておったが……ふふん、今まで力で周囲を従わせる暴君であったのであろうが、これからはそうはいかんぞ」
「あの、わたくしは……アルティメギルではどう思われていたのでしょう」
　自分を指差しながら、イースナにテイルイエローの評判を聞く慧え理り那な。
「……ほとんど話題に挙がらんかったからな……わからぬ。すまぬ!!」
「そんな!!」
　ブルーはさんざん暴虐を奮ってきたからアルティメギルでも要注意だろうし、そうなると相対的にイエローは影が薄くなってしまうのか。
　イースナはびしりと愛香に指を突きつけ、宣戦布告した。
「ともかく……わらわはお前よりも強いからのう。総そう二じやトゥアールをいじめるのなら、わらわが天罰を下す!!」
「わかった。あんたがそうしたいなら、一回殴り合おっか」
「えっ」
　涼しい表情でそう返した愛香が想定外だったのか、イースナは鳩はとが豆鉄砲を食らったような顔になった。
「……いや、待て。わらわと戦うのじゃぞ。何じゃ、その余裕は」
「あんたのこと、ちょっと見直したわ。そういう距離の詰め方、嫌いじゃないし」
「心なしか目が爛らん々らんとしておらぬか!?　何で率先して喧けん嘩かしたそうな顔しとるのじゃ!?」
　率先して喧嘩したいからじゃないですかね……。
「に、逃げなさいイースナ……あなたではこのくされ蛮族には勝てません……」

　トゥアールはメガ・ネに介抱されながら、息も絶え絶えにイースナに忠告した。
　自然回復力が常人離れしているトゥアールに、あえて甲か斐い甲が斐いしくぺたぺたと絆ばん創そう膏こうを貼はっていくメガ・ネ。
「な、何を言うておうるのじゃトゥアール！　どう考えてもわらわの方が力は上じゃろうが！　仇かたきは取ってみせるぞ！」
　トゥアールは重々しく頭を振った。
「確かに、戦闘力はあなたの方が上でしょう……。しかしそれを言ったら、私も愛香さんより遥はるかに上の科学力を持っていながらも今日この日まで、敗北を喫し続けてきました……」
　それは、数か月の間愛あい香かと戦い続けた歴史だけがまとわせる、確かな説得力だった。
　超科学の粋を結集したのかしていないのか判断に迷う不思議な迎撃装置・アンチアイカシステムは、そのことごとくが返り討ちに遭ってきたからな……。
「ツインテールがついてるだけで、あれは人外……たまたまヒトに見えるだけの戦闘生命体……覚悟なくして相対することなどできません……」
「おいおい、ついてるだけはないだろ、すごく努力した産物なんだから」
　友達同士の戯たわむれに口を出すのもなんだが、俺もそこだけには突っ込んでおかねばと思った。さっき慧え理り那なも同じように、「ついてる」と発言した時に言いかけたことだが。
　いや待てよ、ツインテールがついてるって、冗談っていうか駄だ洒じゃ落れか⁉　だとしたらノーリアクションで、慧理那も言い甲が斐いがなかったって思ってるかな……。くっ、俺としたことが。
　俺が自分の察しの悪さに苦悩している間に、イースナは覚悟を決めて

しまっていた。
「トゥアールもお前には随分と酷ひどい目に遭わされてきたようじゃな。ならばその覚悟、トゥアールの仇かたきを討つために決めようではないか!!」
「この流れは……！　加入イベントですわ！　わたくしの時にもありましたものね！　さすがは津つ辺べさん、あえて邪険に振る舞うことで、イースナさんをツインテイルズに迎え入れようというのですわ!!」
　慧理那が瞳ひとみを輝かせて二人の動向を見守っている。慧理那の時も、愛香はただイエローのギアで巨乳になるのが目当てで、本気で絡んでただけなんだけどな……。
　トゥアールを椅い子すに座らせ、がしょんがしょんと歩いてきたメガ・ネを見て、これ幸いとばかりに手を広げるイースナ。
「ふん、こっちにはメガ・ネがついておることを忘れるな！　三段変形する頼もしい相棒じゃぞ!!」
「ならこっちはトゥアールを使うわ。三段変形どころか盾たてとか棍こん棒ぼうとか独こ楽まとか百段変形ぐらいする面白いやつよ」
　せっかくメガ・ネに介抱されたのに、思いもよらぬ方向から招集をかけられるトゥアール。
「変形した覚えありませんけど!?　愛香さんが巨大ロボの合体で出た余剰パーツを無理に装備させるノリで私を扱ってるだけじゃないですか!!」
「はいはいはい、イースナちゃんも、せっかく初めて学校に遊びに来たんや、仲良くせんと」
「むっ……」
　のんびり紅茶を淹いれながら、喧けん嘩かもたまにはいいけどな～、と二人をなだめるおかん。
「いや～、でも愛香ちゃんって変身前でも変わらへんのやなあ。逆に、

慧理那ちゃんが全然イエローと重ならへんわ。姿形じゃなくてな？」
「そ、そうでしょうか……」
　成長を確かめてくる親しん戚せきのおばちゃんじみたメガ・ネの視線に、慧え理り那なは気恥ずかしそうにする。
「あの……イースナさん、アルティメギルでイエローがどう思われているか、もう少し詳しく教えていただけませんか？」
「何じゃ、そんなに気になるか？　一応人間扱いはされておったぞ。ブルーなんて、ツインテール以外は食べ終わったカップ麺の蓋ふた程度の価値という意見で満場一致じゃからな」
「だから基地まで案内しろっつってんのよそいつら全員砕いた乾麺みたいにしてやるから!!」
　数え切れないほどのエレメリアンたちにあれだけのことをしておいて、怖がられたらそれはそれで怒るって……アルティメギル側からしてもブルーの言い分は理不尽じゃないか。
「というか、イエローは戦闘会議でも全然話題に出んのじゃ。レッドは妄想されたりフィギュアさわさわされたり映像見て強こわ面もてどもが号泣したり毎日毎日大好評じゃが」
「えええええええええええええええええええええひどいですわ!!」
　慧理那が先手を打たなければ、俺がひどいですわと叫んで崩れ落ちる案件なんだが……。
「……テイルイエローは、そんなに弱いと……大した戦力ではないと思われていますの？」
　さすがにイースナも慧理那の落ち込み具合にはフォローの必要性を感じたらしく、
「まー、あれじゃ！　エレメリアンもしたり顔で余裕ぶってはいるが、わらわに言わせればどいつもこいつも童貞くさい奴やつばかりじゃからな、はっちゃけた女は苦手なんじゃろう!!」

　慧理那はイースナの言葉を反はん芻すうするように考え込み、
「……どうてい……？　そういえば、よくトゥアールさんが観み束つか君にそう言っている気がしますわ……」
　━━何か大陸弾道ミサイルが流れ弾で飛んできたぞ。
「おおおおおおおおおこれがコンピュータには予測できない人間の会話が辿たどる神秘の流る転てん！　思いがけずに舞い降りたチャンスに私は━━━」
　トゥアールが目を輝かせ立ち上がった、その時。

「トゥアールのおっぱい　トゥアールのおっぱ━━」

　机の上のＰＣから毎度お馴染みの俺の盗録音声アラートが響き、俺は全力でダッシュし解除した。
「くっ……皆さん、エレメリアン出現です！」
　心なしか残念そうにそう告げるトゥアール。俺にちらちらと目線を送ってくる。
　俺の反応は相当速かったはずだが、ＰＣが置かれた机まで距離があったのが痛い。イースナに聞かれてしまった……。ワンコール内に止められなかったという、プロ意識溢あふれるテレフォンオペレーターのような後悔を抱く。
「今のは総そう二じの声ではないのか!?　トゥアールのおっぱいと言うておらんかったか!?」
　そしてトゥアールは、イースナに勝ち誇ったように笑いかけていた。
「あら、聞こえてしまいましたか～。まあ、どういう経緯で総そう二じ様がトゥアールのおっぱいと言われたかはおそらくあなたの想像通りのアダルティックメモリーですが」
「復唱しないでくれえええええええええええ!!」

　逃げても逃げても、失か言こが追ってくる。苦悩する俺を余よ所そに、皆は出撃準備を整えていく。
「イースナ。メガ・ネの顔を立てて今日は預けとくけど……喧けん嘩かは後でちゃんとするわよ！」
「そこはもう有う耶や無む耶やのまま終わらせておけよ⁉」
　一応、という感じでトゥアールが尋ねる。
「で、イースナ、あなたはどうするんです？　皆さんと一緒に出撃しますか？」
「いや、テイルブラックはまだ世間に認知されておらぬ。それに、現れるのがわらわの直轄部隊の者であったら、あやつらも動揺して色々口走るであろう。一般人に、わらわが元アルティメギルであると知られるのはまずかろう。折を見て、遅れて駆けつけることにする」
「なるほど、確かに初登場のタイミングは大事ですわね！」
　慧え理り那なは可愛かわいらしく拳こぶしを握りしめ、
「わたくしももっと頑張らなければ……ツインテイルズにテイルイエローあり、と戦いで証明してみせますわ‼」
「いや、エレメリアンに愛めでられるのもそれはそれで相当つらいぞ……」
　俺が間違ってるのかな、絶対気に留められない方が精神衛生上いいと思うんだが……。
　それぞれ決意を新たにする愛あい香か、慧理那に続き、トゥアールもロッカーをくぐり、地下基地へと転送されていく。

「総二君。ちょっとええか？」
　俺が最後にロッカーを潜くぐろうとした時、メガ・ネに呼び止められた。
　イースナをちらっと見やると、ひそひそと耳打ちしてくる。

「ごめんな。イースナちゃん、みんなと仲良くしたいだけで、悪気はないんや」
「ああ……大丈夫、わかってるよ。それに、愛香だって同じさ。喧嘩腰に見えるかもしれないけど、あれでちゃんとイースナと仲良くしたいって思ってるんだ」
　むしろ、今この部室でのイースナの言動は、愛香やトゥアールのアクション映画に比べたら普通の女の子のそれに近い。別段、気にすることでもないと思うが。
「……や、今は変身しとるからまだ抑えられとるけどな……普段はもっと……」
　メガ・ネは再びイースナに視線を向けると、言いづらそうに続けた。
「ウチはあの子がアルティメギルに入ってから造られたから、それ以降のイースナちゃんのことしか知らへんけど……あの子な、家族とか友達とか、知らずに育ったと思うんや」
　それは、確かに。イースナの家族への憧どう憬けいは、愛香によく鈍いと言われる俺でさえ、はっきりと感じた。
「だからな、総そう二じ君には本当に感謝しとるんよ」
　メガ・ネはぺこりと頭を下げた。
「これからもイースナちゃん、変なこと言ったりしたりすると思う。でもな、それは今、幸せな証拠やから……笑って受け止めてあげてくれへんかな。少しずつ、普通の女の子になってくと思うから」
　幸せな証拠……か。嬉うれしいな。
「そんなこと言ったら、俺だってツインテール馬ば鹿かってよく言われるし、知らず知らず迷惑をかけるかもしれないしさ。お互い様だろ？」
「よ～し！　ホンマにええ子やな、君にならイースナちゃんを任せられるわ！　ウチも、ツインテイルズの戦いには頑張って協力するからな!!」

「ああ、よろしく頼む！」
　メガ・ネと固い握手を交わし、俺はロッカーの中へと入る。
　転送される直前、座っていたイースナがとことことメガ・ネに駆け寄っているのが見えた。

「ふふふ、ナイスアシストじゃぞメガ・ネ。普段嘘うそをつかぬお前の言葉じゃ、総二はあっさり信用し、これからわらわのやることなすこと全てを許容するに違いない‼」
「別にウチ、今も嘘は言うとらへんけどな～」
「ん？　何がじゃ？」
「何でもなーい」

　二人の会話は聞こえなかったが――メガ・ネの硬質の顔に、少女のように悪いた戯ずらっぽい笑みが見えたようだった。

◇

　トゥアールのナビに従い、都会のビル群を飛び跳ね、俺とブルー、イエローの三人は現場へと急行した。
「……駅の中か……⁉」
　エレメリアンが出現したのは、日本有数の乗降客数を誇るターミナルステーションの真まっ直ただ中なかだ。中は避難する人でごった返していたが、幸い、パニックにはなっていない。
　駅員さんが避難誘導しているが、人数が人数だ、避難は決してスムーズとはいえない。改札も上う手まく通れず赤ランプエラーが続出し、駅員さんが慌てて改札機の自動扉を開放しようとしている。
　逆に戦闘員アルティロイドたちは慌てず騒がず律儀に電子マネーカー

ドをタッチし、モケモケと改札を通って人々を追いかけ始めた。あの黒ずくめの集団は、どの駅から何線に乗って現れたんだ……。

「レッド！　あそこにエレメリアンが！」

　イエローの指さす方を確認すると、確かに獲物を狙ねらう鳥のように静かに滞空しているエレメリアンの姿があった。

「はっ!!」

　気合い一いつ閃せん、吹き抜けの天井いっぱいに滞空していたエレメリアンが急降下。

「──ふうむ、素晴らしい！　緊張でうっすらと汗が滲にじんでいるのがまた、たまらぬ!!」

　逃げ惑っているタンクトップの女性の一人の眼前で、空中に浮かんだまま俯うつぶせになる。そのまま顔だけを上げて、引きつった声を上げるその女性をじっと見始めた。

「あいつどこ見てんのよ、胸……!?　また胸関係の属性ね!?　ブチのめしましょう!!」

　疑わしきは殴る理論で戦っているブルーは、即座に殺気を解放した。

　ここまでできないとアルティメギルに注目してもらえないって、イエローには酷こくすぎるよな……。俺も、特に何もしてないのに注目されちまってるんだけど。

「やめろ!!」

　大通路を駆けながら、エレメリアンに向かって叫ぶ。こちらに気を取られた隙すきに女性は逃げていった。

「むう、現れたかツインテイルズ!!」

　距離が近付いてわかったが、このエレメリアン──かなりデカい！　これを目にしたら、野次馬になろうともせず一目散に逃げたくもなるか。

　丸太のような胴体に、丸みを帯びた四枚の羽根。そして、クレーン

アームの先端が合わさったような強きよう靭じんな口に、それ以外の顔面をほぼ覆い尽くすかのような、巨大な目。
「トンボか……じゃあこいつは、美の四心ビー・テイフル・ハートの戦士か」
　しかし、トンボにしてはとんでもないゴツさだ。さっき、仰あお向むけのような姿勢で浮いて女性を見ていたのも合点がいった。翼長どころか体長でも四メートル近くはあるんだからな。
　トンボ、という言葉に反応したのか、エレメリアンは巨大な目を一層ぎょろりとさせ、
「俺はメガネウラギルディ、誇り高き太古の支配者の末まつ裔えいよ!!」
「眼め鏡がね!?　トンボじゃないのか!?」
　聞き慣れない言葉だったので眼鏡と思ったのだが、そうではなかったらしい。
　イエローがやおら興奮気味に解説してくれた。
「違いますわレッド……メガネウラといえば、以前あなたが喫お茶み店せにいると言っていた、古代の大トンボですわ!!」
「マジかよ!?」
　自分で「虫の怪人はヒーローものの定番」と言っていただけあって、イエローはマイナーな昆虫の知識も豊富だ。あとごめん、その大トンボ実はうちの店にいねえ。
　古代生物と聞いて、俺は不意に、先日戦ったプテラギルディのことを思い出す。
「そして、この世界に遣つかわされた首領直属軍・死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの先せん鋒ぽうだ!!」
　果たして、メガネウラギルディの名乗った肩書きは予想の通りだった。けど、〝先鋒〟を名乗るってことは……プテラギルディのことはこ

いつらには知らされてないのか？
「美の四心ビー・テイフル・ハートは昆虫軍団、貴の三葉ノー・ブル・クラブは植物軍団……そしてこいつら死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは、古代生物の集まりってことか！」
　以前戦ったシーラカンスギルディとかも、強くなればこっちに昇格される可能性もあったんだろうか。こいつらの人事なんて、想像もつかないが。
「それであなた、こんなに人がたくさんの場所で、何を狙ねらっていましたの⁉　ブルーの言う通り、また胸を標的に⁉」
　イエローの詰問をメガネウラギルディは一笑に伏し、
「胸だと⁉　何を言うか……俺が求めるものは、腋わきだ！」
「わ」
「き……⁉」
　ブルーとイエローが揃そろって聞き返す。
「人体のフロンティアにして、秘匿されしワンダフルスポット！　腋こそ我わが愛！　ちょうどいい、ツインテイルズよ、貴様たちの腋の実力も見せてもらおう‼」
「腋の実力って何よ──────────っ‼」
『ほほーうこれはまずいですね愛あい香かさん、ブルーのテイルギアなんて腋丸出しですし！』
「っ……！」
　トゥアールの通信で全身を震ふるわせたブルーは、きゅっと腋を締めて後あと退ずさった。
「……けれど、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは部隊に合流したばかりだとしても、少し出現が時季外れではありませんこと⁉　夏も終わりで、そろそろ皆さん薄着ではなくなっていく頃ころ合あいですわ」
　イエローの疑問は妥当だ。ここも都心とはいえ、避難する人の中に上

着を羽織っている人もいた。だから、エアコンもさほど利かず、人が密集している駅っていう場所を選んだのか？
「違う！　今この時期こそ、腋をベストフォーカスできるのだ!!」
　イエローの言葉をまたもや否定し、メガネウラギルディは胸を張った。
「太陽照りつける真夏の下では、汗を気にかけて思う存分腋を晒さらせぬのが乙女心！　たとえノースリーブでも、つい気も腋も引き締めてしまうものであろう！　ん!?」
　メガネウラギルディは同意を求めるようにブルー、イエロー、そして俺の順に顔を向けてきたが、もちろん誰だれも反応しない。しかしめげることなく、持論を続ける。
「だが、晩夏の風涼しき今日この頃──秋服への過渡期こそが、もっとも腋へのガードが甘くなる！　それこそが、俺が長年の探求の末出した結論だ!!」
　歴史感じる太古の暴論と共に、メガネウラギルディの両目が妖あやしく発光する。
『皆さん気をつけてください、メガネウラギルディの目は昆虫よろしく複眼の特性を備えているようです！　動体視力は相当のものでしょう！』
「複眼……!?」
　俺は通信に思わず反応してしまい、それを耳ざとくメガネウラギルディは聞き取った。
「そう！　俺の眼は、腋を見るための弛たゆまぬ錬磨の末に進化した!!　いまや二万からなるこの複眼が、必ずや腋わきをとらえる!!」
　両りよう拳こぶしを握り締めて吠え猛たけり、より一層妖しく複眼を光らせるメガネウラギルディ。
「最悪────────────────っ!!」

ブルーは絶叫してイエローの背に隠れた。
「テイルブルーよ、貴様はいつでもどこでも存分に腋を見せているであろう！　今さら何を躊躇ためらうか!!」
「好きで見せてんじゃないわよ！　こういうデザインなんだから仕方ないでしょ!!」
しかし、そんな無数に目があるっていいことだけなのか？
「二万も目が独立してたら、見てて疲れないのか!?」
『未み春はる将軍、何とかレッドに単位の〝個〟まで含めて複眼の数を復唱して欲しいのですが……』
『敵がそう言ってるものねえ……知ってて照れて〝個〟抜いたのかしら、あのエレメリアン』
トゥアールと母さんが基地で密談しているのが、通信から漏れ聞こえてくる……。
とにかく、像が分散して意味が無いのでは、と思い出した俺の呟つぶやきも、やはりメガネウラギルディは否定した。
「フ、若いなテイルレッド。貴様とてツインテールを愛する身、可愛かわいいツインテールを見ればいくらでも目に焼き付けたかろう！　一万回でも、二万回でも!!」
「くっ！　確かにその通りだ……。ツインテールを見て疲れ目になるほど、俺の水晶体はヤワじゃないからな!!」
飛ひ翔しようするメガネウラギルディ。重量ゆえか、滑空に近い飛行法だ。
イエローは紙一重で回避したが、すれ違いざまに羽が装甲を掠かすめた。
「装甲が……！　あの羽、高振動刃ブレードのようになっています！　気をつけてくださいまし！」
イエローの右肩のアーマーが少し欠けている。やつの武器は、あの羽

か!!
　フォースリヴォンを叩たたき、ブレイザーブレイドを出現させる。
　無造作に振り下ろした斬ざん撃げきを躱かわし、メガネウラギルディはすれ違いざまに回転し、俺の腋の下をスライディングしていった。
「素晴らしい！　未成熟ながらも何と明めい媚びなる腋か！　すまぬテイルレッドよ、そなたの細腕では難しいかもしれぬが、俺の頭を小こ脇わきに抱えてくれぬか!!」
　メガネウラギルディが懇願しながら俺に近付いた途端、イエローからのヴォルティックブラスターの斉射で全身を強したたかに打たれたのに続き、眉み間けんにはブルーのウェイブランスの投とう擲てきが命中。たたらを踏んで後あと退ずさった。さしてダメージを受けた様子も見せず、高らかに笑ってみせる。
「ふはははは！　テイルレッドを助けるのは構わぬが、武器を構えるそれ即すなわち、俺に腋わきを晒さらすということを忘れるな!!」
　そうか、攻撃のモーション自体がこいつを喜ばせる以上、並の攻撃じゃ通用しない！
「ひいいいいいいいいいいいいいっ!!」
　ぶるぶると震ふるえて竦すくみ上がるブルー。
「イエロー、武装脱衣パージしてあいつの注意引き付けて!!」
「！　だ、駄目ですわ、避難したはずの皆さんが、こっそり戻ってきていますわ！」
　改札を越えた向こうや、出口の階段付近など、充分に距離を取った位置から、ギャラリーが戦いを見ていた。何てこった……！
「あいつ、レッドたんの腋を独り占めだと!?　許せねえ……!!」
「だが、気持ちはわかるぜ!!」
　…………戦いというか、ギャラリーも一緒になって腋を見ていやがるし……。

　イエローの判断は正しい。脱衣パージしたいのは山々かもしれないが、視線を送ってきたイエローに、俺は視線で「待て」を返した。俺が囮おとりになって、二人に遠距離から攻撃してもらおう。
「別に腋くらいどうってことないだろ。ブルーたちが恥ずかしいなら、俺が戦うから」



　女の子には、恥ずかしいことなんだろう。ここは俺が矢や面おもてに立たなくては。
　腋わきを見られるくらいなんてことは無い、と剣を構えた俺に、ブルーが慌てて忠告してきた。
「あんたはもう少し自分の身体からだに危機感持ちなさい!!」
　メガネウラギルディは羽音を響かせて俺たちの近くまで飛んでくると、
「レッドよ、お前は今こう考えているのではないか!?『嫌がるから、恥じらうから喜ばせるのだ、堂々としていれば興味を失うに違いない』と!!」
　考えを先読みされたような鋭い指摘に、思わずギクリとする。
「恥じらいがなければ愛を貫けぬなど、弱者の戯ざれ言！　恥じらおうが恥じらうまいが、腋は美しいのだ!!」
　俺たちの周囲を旋回し、複眼を光らせるメガネウラギルディ。
　おおおお……、とギャラリーが共感したように嘆息を漏もらす。何な故ぜ共感する……。
「恥じらわぬ、隠さぬと言うのなら、むしろ僥ぎよう倖こう！　思う存分貴様たちの腋を見てくれるぞ!!」
「開き直るなあああああああああああああああああ!!」
　気持ち悪すぎてブルーが戦意を失いかけた、その時。
　爆音と共に、銀色の影が俺たちの前に躍り出た。
「ぬおわ――――――――――っ!?」
　改札をウィリージャンプで乗り越え、大通路を疾走してきた大型バイクが、メガネウラギルディを吹き飛ばしたのだ。大通路を転がっていくメガネウラギルディ。
　爆走機形態メガネストライカーのメガ・ネだ！
「腋見るの大好きな割りには、腋が甘いんとちゃうか？」

人型に変形して俺を庇かばうように立ち、メガ・ネはメガネウラギルディに痛烈な一言を放った。
「ッ……!!」
一瞬動揺したものの、言葉を呑のみ込んだように見えた。
そうか、プテラギルディが倒された報告がいっていれば、少なくとも死の二菱ダー・イノ・ランヴアスはダークグラスパーがテイルブラックとなって離反したことを知っているはずだ。その上で、元上官への敬意かはわからないが……ギャラリーの前でメガ・ネを断罪するように騒ぎ立てないでくれるのは助かる。
「大丈夫か、レッドちゃん？」
敵への注意も怠おこたらず、メガ・ネは俺たちを気遣うように声をかけてきた。
「ああ、サンキュー、メガ・ネ！」
「なあに、ウチは返しきれない借りがあんたらにあるからな、サポートは任しとき！　ウチにはあいつが喜ぶ腋がないしな～！」
メガ・ネが指の銃口を向けファイティングポーズをとると、ギャラリーは大沸きした。
「かっこいい!!」
「ロボットだ！　変形ロボットだ!!」
「かっこいいのに声はかわいいわ!!」
「ついにテイルレッドたんにまともな仲間が現れたぞ――――――――っ!!」
不名誉なギャラリーの叫びに、ブルーとイエローがあんぐりとして固まっている。
「彼女こそ、テイルシルバーだ!!」
メガ・ネが大人気だ……。
当のメガ・ネも、予想だにしない声援に、照れくさそうにしている。

「ありゃりゃ、何や、やりにくいなあ。戦いの最中に、声援なんてもらっても」
　やめてあげて。ブルーが膝ひざから崩れ落ちるから、言わないであげて。
「ふふ、でも、一般人はんたちからテイルシルバーって名付けられるの、嬉うれしいわ」
　小声で漏もれ出たメガ・ネの本音に、心が温かくなる。イースナのことばかりで自分のことは何も言わないけど、メガ・ネも今、幸せだって思ってくれているといいな。
　不意に俺は無人のはずの改札横にある駅員室から、禍まが々まがしい妖よう気きが漏れ出ているのを感じた。
　視認できるほど色濃い黒の元を辿たどると──。
「ブ、ブラック……!?」
　ギャラリーの目を盗んで隠れたのだろう、駅員室にはブラックの姿があった。
　イエローの「真の初陣」の時と完全にデジャヴだ。あれは……タイミングを逃のがしたな。
「ぐ、ぎぎぎぎぎ……！　こ、これではわらわが出て行けぬではないか……!!」
　メガ・ネはトゥアールに通信し、自分の声をブラックに中継してくれるよう頼んだ。
「イース……ブラックちゃん。考えがあるんや」
『な、なんじゃ!!』
「どうも、一般人の人たちはレッドちゃんの仲間とわかれば、温かく迎え入れてくれる感じがするんや。今のウチも、多分そうやと思う」
『何な故ぜじゃ……!?』
「ブルーちゃんもイエローちゃんも、個性が強すぎて失敗しとる感じ

や。みんなレッドちゃん好き好きーやから、あまり前に出すぎるとみんな見えんわー！　ってなっちゃうんやないかな」
　正式な共闘はこれが初めてのようなものなのに、メガ・ネが鋭く分析している……。
「なるほど……個性は後から出していけばいいというわけじゃな！　よし、この戦闘、レッドのサポートに徹するとしよう‼」
「その意気や、ブラックちゃん‼」
　勢いよく駅員室の扉を開け放ったブラック。すう、と空気を吸い込み、大声で宣言しようとしたのだろう……しかし、その前にギャラリーがざわめき出してしまった。
「今度は黒だ！」
「黒いツインテイルズも出てきたぞ⁉」
「でも油断できないわ、ロボットじゃないから変態かも‼」
　……もしかしてこの世界の一般人の認識って、どんどんおかしな方に行っていないか？
「そうだ、黒ってあのモケーたちと同じ色だぞ！　すでに怪しいぜ‼」
「モケッ⁉」
「モッケケケ‼」
　しかも予想外の風評被害を受け、離れた場所で待機している戦闘員アルテイロイドたちが「いや、一緒にされても」とばかりに手を振っている。一般人には「モケー」で定着してるのかあいつら……。
「ふ、ふひ……へ……」
　大丈夫かブラック。緊張してるのか、佇たたずまいがイースナに近くなってるように見えるぞ⁉
　ブラックの全身から匂い立つ黒素は、もはや宇宙を構成するダークマターを彷ほう彿ふつとさせるまでになってしまっている。当然、ギャラリーはドン引きだ。

あれが、国民的アイドル善いい沙すな闇あん子この真の姿だと、誰だれが想像できよう。
「レ、レッド、た、たしゅける」
両腕両足を同時に出して歩きながら、ブラックが俺たちの方へと近付いてきた。
視線が自分に集まっているのを感じて、一層緊張しているに違いない。
「落ち着け！　お前、いつももっと大勢の人の前で歌ってるだろ！」
通信を介して小声で励ます。
「そうよ、あんたのグラスギアは腋わき隠れてるから大丈夫でしょ！」
「デビュー戦は大事ですわよ、ブラック！」
ブルーとイエローも続き、
『腋にピッタリ張り付いたアンダースーツに逆にエロチシズムを覚えられるかもしれませんが、とりあえず頑張りなさい!!』
トゥアールも激励を添えた。
「よ、ようし……!!」
ブラックはメガネウラギルディと対たい峙じする。
「え、ええとじゃな……！」
「……もはや言葉は持ちませぬ。ただ、腋で語るのみ!!」
戦士として戦場で向き合った今、問答は不要。腋こそが返礼。そう宣し、メガネウラギルディは羽ばたきの体勢を取る。
元部下の至誠に、腹が据わったのだろう。泳いでいた眼も身体からだの震ふるえも収まり、
「──よく言った……名前にメガネを冠する貴様じゃ、親近感は感じるが……勝負は別!!」
まとっていた暗雲ごと迷いを吹っ切るようにマントを翻ひるがえし、神ゴツド眼め鏡がねに指を添えるブラック。

「カオシックインフィニットに続く、わらわの新必殺技を見るがよい！」
　神ゴツド眼め鏡がねから放たれた二重の光輪が、メガネウラギルディの眼前で制止した。
　いつもの幻覚技なら、そのまま輪が対象を包んでいくはずだが──あれは一体!?

「セラフィックインフィニット───!!」

　まとっていた黒雲を吹き飛ばすかのような煌きらびやかな光輪に、ギャラリーも驚声を上げげる。
　しかしすぐに、俺たちを含め──言葉を失って呆ぼう然ぜんとしてしまった。
「むおわあああああああああああああああ、これはあああああああああ!!」
　メガネウラギルディの絶叫が響く。
「セラフィックインフィニットは──本来幻覚として見せる恐怖や幸福を、現実に具現化させるのじゃ！　さあ、刮かつ目もくせよ!!」
　もっさりとした脇わき毛げを積載限界まで搭載したマッチョなお兄さんたちが、現実世界に具現化してしまった。
　新必殺技らしいが、この地獄のどこが神々しいセラフイツクというのか……。
　マッチョたちは腕をくの字に曲げて手を後頭部に添え、脇毛を全開にしたマッスルポーズで三六〇度死角無くメガネウラギルディを取り囲んだ。
　てっかてかの筋肉の中にあって自己主張を恐れぬ脇毛は、まさしく燃え盛る太陽の只ただ中なかで不気味に揺らぐ黒点サンスポツト。

その終末の光景が今、一斉にメガネウラギルディの複眼へと飛び込んでゆく――!!
「ぐわああああああああああああああああ！　目がああああああああああああああ!!」
虫眼鏡で直じかに太陽を見たに等しき痛ましい傷を負ったかのように、目を押さえて悶もだえ転げるメガネウラギルディ。マッチョたちは光の粒子となって消えていく。……嫌すぎる……。
ブラックは、狙ねらいばっちりとばかりに腕組みをして高笑いした。
しかし、幻覚の具現化は決してメリットだけではない。大きなデメリットをも伴う。
ギャラリーまでもゾンビのように生気を失った顔で膝ひざをつき始め、通信越しにトゥアールたちが椅い子すごとぶっ倒れたような音も聞こえる。ハイリスクローリターンのお手本のような技だ。
「極限まで鍛え上げた複眼が、徒あだとなったようじゃな！　二万倍に増幅された腋毛に蹂じゆう躙りんされ、もはや貴様の視覚はズタズタ!!　今じゃ、テイルレッド!!」
「わ、わかった!!」
すげー釈然としないアシストだが、仕方ない……。
俺は強化アイテム・プログレスバレッターを取り出し、フォースリヴォンに装着した。
「チェンジ─ライザー!!」
上結びの強攻形態─ライザーチェインへとチェンジし、両のフォースリヴォンから炎の二刀・ブレイザーブレイドツインを抜き放つ。
「み、みんなあれを見ろー！　すげー!!」
「テイルレッドたんが……パワーアップしてるううううううう!!」
「ツインテールも形が変わってるぞ！　ああ、腋わき毛げが出てきて目が潰れそうだったが、癒いやされていくのを感じるぜ!!」

　一様に倒れ呻うめいていたギャラリーたちが、再び立ち上がって俺に声援を送ってきた。
「そっか。一般人の前で形態変化チエインカスタムを披露するのは、初めてだったな」
『中継可能な幻覚ってタチ悪いですよ……！　皆さん、目に入った刺激物をレッドたんの清らかなツインテールで癒しているんです！　私もお義か母あ様も大画面で大ダメージでした!!』
『きっついわー！　お父さん腋わきツルッツルだったから耐性ないわー!!』
　一方、やはりトゥアールたちもマッチョを直視してダメージを受けていたらしい。あと、父さんのいらない情報をまた一つ知ってしまった。
「テイルブルーは……パワーアップしてないな」
「テイルブルーだしな」
「テイルイエローも……そのまんまだな」
「パワーアップしたら露出度も増えて、ＴＶ中継でレッドたんの隣にモザイクがかかるだろ」
　ブルーやイエローを交互にチラ見し、溜ため息いきをつくギャラリーたち。
　ブルーは肩を震ふるわせ、イエローはギャラリーを振り仰いで難しい顔になった。
『言われっぱなしでいいんですか愛あい香かさん!?　ここは未披露の属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを発動し、ド肝を抜いてやりましょう！　さあ、涎属性スロバーと唇属性リツプを!!』
「何で使う属性玉エレメーラオーブを限定してんのよ！　それ怪獣みたいだから封印するって言ったでしょ!!」
『元から怪獣なのに何遠慮してるんです!?　駅で怪獣が暴れるのは定番じゃないですか!!』

「あ……あたし、モケーの方に行くから！　そっちはお願い！　レッド!!」
　ウェイブランスを頭上で一いつ旋せんし、モケー狩りに出発するブルー。
　モケーが逃げ惑い、改札でエラーが出たところを捕まってブチのめされていた。同じ駅で間違って入退場が連続する時は、駅員さんにカード情報を書き換えてもらわないといけないもんな……。律儀なばかりに……。
　ちらっとイエローを見ると、なにやら段取りを立てるようにうんうん頷うなずいたりしていた。
　頭を押さえてよろよろと立ち上がるメガネウラギルディ。
「み、見事だ、テイルレッド！　装甲をパワーアップさせても腕は隠さぬその心意気、深く感じ入った！　今こそ勝負だ────っ!!」
　変身持続時間はあと数秒……一旦下結びに切り替えようかと思った瞬間、メガネウラギルディが羽を最大に羽ばたかせて突っ込んできた。セラフィックインフィニット……っていうか脇毛で視神経を冒されたためか、その動きは直線。
　ならば俺も、真っ向から迎え撃つ!!
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　プログレスバレッターがフォースリヴォンから分離し、ブレイザーブレイドの柄つかへと合体。
　フォーラーチェインにチェンジし、荷重パーツを展開して最大加速。ツインテールの粒子を迸ほとばしらせながら、メガネウラギルディの周囲を旋回する。加速の軌跡がオーラピラーを完成させ、メガネウラギルディを強固に束縛した。
「うぐう!!」
　ライザーチェインへとチェンジし、バックパックをスライドさせて最

大噴射。渾身の力でブレイザーブレイドツインを振り下ろす！
「ライジングブレイザ――――――――――――――――――――ッ!!」
「おおお……大上段の斬ざん撃げき！　腋わきが！　腋がマックスビューイング!!」
　メガネウラギルディは避けもせずに必殺技を受け止め、その背後から――
「ここで！　ヴォルティックジャッジメント・クレセント――――――――――ッ!!」
　周囲に人が多い時用の簡易必殺キックを、背後から命中させるイエロー。さっき何か綿密にシミュレーションしているようだったが、同時攻撃をしたかったのか……。
　しかし、もはや最初の斬撃でメガネウラギルディは致命のダメージを負っていた。スパークしながらも、後ろの脚は気にせず、俺の腋にだけ謝儀を叫ぶ。
「テイルレッドよ……腋をありがとう――――――――っ!!」
　メガネウラギルディは満足げな言葉と共に爆散した。
「やりましたわね、レッド……！　はあはあ」
「あ、ああ」
　基本形態に戻った俺に、多少口くち端はに涎よだれをにじませはあはあして全脱衣パージしたイエローが駆け寄ってくる。すると、駅構内がブーイングに包まれた。
「レッドたんの必殺技がちゃんと見えなかったぞ―――っ!!」
「イエローが怖くて目を逸そらしたら全てが終わってたぜ！　俺にあと少しの勇気があれば!!」
　その全てが自分に向けられていると悟り、イエローが俺をぬいぐるみのように抱きかかえる。
「ちょ、ちょっとイエロー、背中に……！」

「ひどいですわ、仲間と必殺技を同時に放つのは、ヒーローものでは一番燃えるシチュエーションの一つですのに!!」
　しかし、ギャラリーの一人が鋭い指摘を放った。
「そりゃ何度も必殺技を見た後の話だろ、俺たちは今のレッドたんの技は初見だああああ!!」
　まさかのヒーロー理論で真っ向から切って捨てられ、イエローは愕がく然ぜんとする。
　背中に弾む柔らかな感触から、震ふるえが伝わる。またはあはあしているのだろうか……？
　モケーをパーフェクトスコアで完封したブルーも戻ってきた。
「ううっ……変態相手には、あたしがレッドを守らなくちゃいけないのに……」
「わたくしも、またやってしまったようですわ……」
　腋属性アームピットの属性玉エレメーラオーブを回収した俺を余よ所そに、ブルーとイエローはげんなりとしている。
「ようし、前に出すぎぬ奥ゆかしきわらわのナイスアシストで、見事テイルレッドが勝利を収めたぞ！　これで、世間の人気も不動のものじゃ!!」
　一方、満天下に腋わき毛げマッチョ軍隊アーミーを出現させた張本人は、会心の手て応ごたえに歓喜していた。
「……お疲れ」
　ブルーが、ブラックの肩を優しく叩たたく。
「これから頑張りましょう……」
　イエローが、慈愛に満ちた瞳ひとみでブラックの手を握る。
　二人は髪紐属性リボンを使うこともなく、ギャラリーのいない改札口からとぼとぼと帰還した。
「ん？　おう、お前たちも頑張るがよいぞ！」

　先輩たちの視線の意味も知らず見送り、俺にも帰ろう、と声をかけるブラック。
「よし、では総そう二じの母上も交え、地下基地で今日のニュースを見るとするか！　この姿でテレビに映るのは初めてじゃからな、楽しみじゃ!!」
　戦闘機形態メガネウインガーに変形したメガ・ネの後部座席に乗せてもらい、うきうきのブラックとタンデムで帰還する。
　ニュースか――

◇

〝マッチョ使い現る〟

　――こうなるよな。
　ＵＭＡ特集のドキュメンタリー風番組のようなおどろおどろしいフォントでそう綴つづられ、ブラックの顔が大写しになる。
「何じゃマッチョ使いとはあああああああああああああああああああああ!!」
　地下基地のモニターに映されたニュースを見て雄お叫たけびを上げるブラック。
　望み通り、帰還して変身解除する間もなく特番が早速流れていたが、新戦士・ブラックの紹介は、ブルーともイエローとも、コミケで現れた白衣の仮面とも違う扱いだった。
『彼女も常人離れした目をしているのが気がかりです。まるで、悪魔崇拝者といいますか……また、しつこく、ねちっこく、情緒不安定な印象を受けるのですが……』
『専門家の分析によると、彼女はテイルレッドのストーカーではないか

と』
『可能性は高いでしょう。まだまだ予断を許しませんね』
　だから何で一バラエティーのパネラーが、正確にバックグラウンドを見抜く……。
　ブラックのついでに、イエローも酷評されていた。
『露出狂の気けがあること自体は見ないようにすればテイルレッドに被害はないのですが、戦闘でも強引に目立とうとし始めたことが今後の懸念事項となりそうです』
「ふぇぇんもうゆるして欲しいですわ!!」
　慧え理り那なが可愛かわいらしく机に突っ伏したので、俺はそっと乱れたツインテールを整えてあげた。
『しかし、今回は悪いニュースばかりではありません。まず、テイルレッドがパワーアップしたとのことです。これに伴い、各玩具メーカーの株価が高騰し……』
　ああ、ライザーチェインがモニターに大写しに。
　……何で俺がパワーアップすると、玩具メーカーの株価が上がる!?
『さらに〝初〟の正統派な味方として、謎なぞのかっこいいロボットが出現。一部ではこのロボットをテイルシルバーと呼称し、待望の仲間を歓迎する動きが世界中で高まっている模様です』
　いやあ、照れるなあ、とメガ・ネ。〝初〟のカテゴリから爪つま弾はじきされたブルー・イエロー・ブラックの中の人たちとトゥアールは、お通夜のようになっていた。
「ついに一般人の前で秘められた力を解き放ったのね、総そうちゃん……それを目にした者全てが使徒となって付き従う、大いなる輝きを」
　女幹部コスの母さんが芝居がかった口調でモニターを見つめる。
「これ以上テイルレッドのマスコット扱いがひどくなったら困るんだ

よ!!」
　視線を感じて横を向くと、変身解除した慧理那が、俺と母さんをじっと見ていた。
『米国モダエル国防長官は、「先を越されてしまった。我わが国も、レッドたんのサポートロボットを秘密裏に開発していたのだが」とコメントしており、ロシアと中国もそれに追随を──』
　ブラックは変身解除し、ジャージ姿の少女……イースナに戻ると、椅い子すの上に体育座りをして親指の爪つめを噛かみ始めた。
「……な、何て見る目のない奴やつら……」
　番組の合間のＣＭが流れ、善いい沙すな闇あん子こがきらきらと輝いて歌っていた。数分前、マッチョ使いと恐れられた戦士と同一人物だと、誰だれが思おう。
「か、帰ろうメガ・ネ……作戦会議する……!!」
「あ、今日八時からラジオの収録やで。しかも二本録どりや」
　マネージャーもこなすおかんに連れられ、イースナは基地を後にする。
「ヒーローとして受け入れられるって、本当に難しいんですわね……」
　疲れきった慧理那の言葉に、愛あい香かは頷うなずくかのように肩を落とした。

◇

　迎えに来た尊みことの運転する高く級る車まで、観み束つか家から帰宅する途中。
　慧え理り那なは、尊みことに今日の出来事を話していた。
「ニュースは私も見ました。お嬢様、お気を落とさず……」
「ええ、大丈夫ですわ。気が急せいてしまったわたくしに落ち度がある

のですから」
　多少理不尽なことであれ、しっかりと自己分析をし、反省する。その誠情こそが、慧理那が生徒に尊敬される生徒会長である所以ゆえんなのだろう。
「私も戦えればよいのですが……。変身はできなくとも、せめて武器か何かをトゥアールに作ってもらえれば……」
「気持ちは嬉うれしいですが、変身できないと危険ですわ。些さ細さいな攻撃さえ命取りになります」
「では頑張って変身できるよう、ツインテール属性を磨きます」
　尊の言葉に励まされたのか、くすり、と上品な笑みを漏もらす慧理那。
「それにあの少女も、前途多難なようで……」
　自分の主人の受難をイースナにも見たのか、尊は言いづらそうに言葉を選んでいた。
「でもイースナさんは、相棒のメガ・ネさんが一躍人気になったのです。誤解が解ける日もそう遠くないと思いますわ」
　慧理那らしい前向きな意見だが、そもそもテイルレッドの仲間であるブルーやイエローも、どれだけ月日が経たっても全く誤解が解ける気配はない。半分誤解ではないのが原因だが、それならば素性を的確にプロファイリングされたイースナも、誤解が解ける日は遠いことになる。
「メガ・ネ……あのロボットですか。部室を片付けに行った時、すでに彼女によって掃除が終わっていました。おそらく、相当な花嫁修業を積んだと見ますが」
「そ、そうですか……ええ、メガ・ネさんも素晴らしい、新たな仲間ですものね」
　メガ・ネの家事能力を間接的に目の当たりにし、尊もメイドの血が騒ぐのだろう。

　慧理那は、はにかんで肩を竦すくめた。
「先日母属性マザーの敵と戦って、そしてメガ・ネさんをお母さんと呼ぶイースナさんを見て、わたくし、思いましたの。やはり、家族は……両親はかけがえのない存在ですわ」
「奥様もお喜びになります」
「それに、観み束つか君と観束君のお母様を見ていると、わたくしもあんな風にもっとお母様と親密になりたいと羨うらやましく思います」
　親と親密に、というのも不思議な言葉だが、それが慧理那の本心なのだろう。
「わたくし、お母様に親孝行したいですわ。何か、素敵な案はないでしょうか？」
「それは……奥様が今何より望まれているのは、お嬢さまが観束と結婚し、私も二番目の嫁となることでしょう」
　黙ってればとてつもなく図ずう々ずうしい外付けＨＤＤが搭載されようとしているが、慧理那は首を振った。
「わたくしたちは今、世界を守るために戦う身。結婚は、その後の話ですわ」
「えっ⁉　私今月二九になるんですが⁉」
「尊みこと、前‼」
　運転手が突如として安全運転を放棄したため、肝を冷やす慧え理り那な。
「け、結婚を置いておくとすれば、何でしょう……。そういえば以前、奥様も観み束つかの家に行きたいと仰おつしゃっていましたね」
「それですわ！」
　慧理那はナイスアイディアとばかりに、手を組んでリムジンの天井を見上げた。
「……観束君は恥ずかしがっているようでしたが、わたくしもあのお店

は素晴らしいと思いますわ。もちろん、お客様を含めて」
「では、お嬢さま」
「ええ。こっそり、お母様を招待いたしましょう！」

　総そう二じの胃が大穴で貫通しかねない火種が今、生まれてしまった。

◇

　総二たちの世界へ進行している、アルティメギル部隊の秘密基地。
　その大ホールでは、集つどった戦士たちの誰だれもが先ほどの戦闘の中継を見て言葉を失い、耐え難い静寂に押し包まれている。
　首領補佐として自分たちの指揮を執っていた上官・ダークグラスパーの離反と、ツインテイルズへの加入。そして、部隊に合流することもなく勝手に出撃し、脇わき毛げの奈落に堕おちていった、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの兵士。
　動揺するなと言う方が無理な、衝撃的な光景ではないか。
　隊長であるビートルギルディは、腹を括くくったように勢いよく立ち上がった。
「全ては、お前たちが今目にした通りだ。ダークグラスパー様は組織を出しゆつ奔ぽんし。そして処刑部隊である死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが動き出した」
　いつもはテイルレッドを愛めでて歓喜の斉唱に包まれている大ホールだけに、戸惑いや動揺の声は不協和音となってさんざめく。
「元々手て強ごわい相手だったツインテイルズに、強力な新戦士が加わった。それだけのことだ」
　以上だとまとめるには、ビートルギルディのカリスマを以もつてして

も難しいのはわかりきっている。すかさず立ち上がったのは、同じ美の四心ビー・テイフル・ハートで長きにわたって彼女を見てきた、カマキリ型のエレメリアン・マンティスギルディだった。
「ビートルギルディ様！　新戦士の存在に恐れ震ふるえる我われらではありませぬ！　しかし、何なに故ゆえにダークグラスパー様が謀む反ほんあそばれたのか……それだけが承服し難く!!」
　確かに、美の四心ビー・テイフル・ハートを擁した今の混成部隊でさえ、ツインテイルズには敗北を重ねている。その有様を見れば、自分たちの部隊に合流もせず、断りもなく、別行動をしているのが処刑部隊・死の二菱ダー・イノ・ランヴアスだと言われれば、まだ納得もできよう。
　しかし、上官の反逆を無言のままに受け入れるには、歴戦の戦士である彼らをしてもまだ、若すぎたのだ。
「ならば……皆、自分の胸に手を当てるがよい」
　厳おごそかなる静せい粛しゅくに包まれるホール内。
「思えば、我らにこそ問題があったのかもしれぬ──。ダークグラスパー様はたしかに執拗で、執念深く、私たちのプライベートを顧みぬ方であった……。しかし、人間とエレメリアン、分け隔へだて無く接してくださろうとした心優しき方であったのもまた、事実」
　ビートルギルディの言葉が胸に応え、戦士たちは己が罪ざい科かを吐と露ろし始めた。
「私は、まるで生物の防衛本能のように、思わずアドレス交換を拒否してしまいました……」
「それをいうなら、俺もだ！」
「いただいた投げキッスを未開封で返品してしまいました……」
「廊下でスク水になったダークグラスパー様に恐怖し、バク転で逃げてしまいました……!!」

「年若い女おな子ごの見守る前でエロゲーをプレイするには、私はあまりにも戦士として未熟すぎました……!!」
　出るわ出るわ、微妙な距離感のメモリー。
「わかったか！　我らが未熟であったがゆえの責よ!!」
　後悔するには遅すぎるかもしれない。しかし、後悔をすることで前に進める。
　ビートルギルディは、部下たちをそう諭さとした。
「故ゆえに私は、ダークグラスパー様……テイルブラックを元アルティメギルの反逆者ではなく、正統なる戦士と認識し、戦ってゆきたいと思う。異論がある者は!?」
　いようはずもない。拳こぶしを突き上げ、戦士たちは雄お叫たけびを上げた。
　尾ひれをつけて悪あし様に語り聞かせ、許されざる反逆者に仕立てあげた方が、余程部隊をまとめるには役に立つ。しかし、この摯実な上官はそうしなかった。
　部下たちも、そんなビートルギルディの心意気を汲くんだのだろう……むしろ、共通の敵を祭り上げるという卑劣で愚ぐ昧まいな行いよりも遥はるかに強く、部隊の結束を深めたのだ。
　スクリーンには、ちょうどテイルイエローが映っている。必殺技にダメ出しをされてしょんぼりし、身を隠すようにテイルレッドを抱っこしている際の映像だ。
「むうう、仲間とはいえなんと度の過ぎた役得……!!」
「おのれ、涎よだれがテイルレッドのツインテールにかかりそうに!!」
　部下たちは結束の勢いそのままにやんややんやと騒ぎ出すが、ビートルギルディだけは、その映像に羨望以外の感情を抱いたらしく、つぶさに見つめ続けていた。
「……ふうむ」

決起の怒号に揺れたホールに静けさが戻り、全ての兵が退室した後も、ビートルギルディだけは残り、本日の戦いの映像を繰り返しスクリーンに映していた。
いつもは天使すぎるテイルレッドが大写しであとはバラエティーのワイプ状態──これは人間のニュースと大差ない──であるホールのスクリーンに、延々とテイルイエローの映像が映っているのは、傍から見れば奇妙な光景だった。
「いかんいかん、テイルレッド爪つめ切りを置き忘れてしまうとは……やや!?」
使途不明な忘れ物に気づきホールに戻ってきた、美の四心ビー・テイフル・ハートのバッタ型のエレメリアン、ホッパーギルディ。彼は一人残る上官の姿に……そして、その鋭い瞳ひとみの先に映る映像に驚く。
「いかがいたしましたビートルギルディ様！　テイルイエローを大写しにするなど!!」
「乱心ゆえではない。ブルー打倒の修行を終えたからやもしれぬが、最近、テイルイエローが気になってな……」
「しかし、テイルイエローはこと戦闘力において他のメンバーに劣ると、かなり前に結論づけられていたはずですが……」
「……気になるといえば、そちらを思うが当然か……。フッ……」
映像は、脱衣パージ状態のイエローがレッドを抱きかかえている。ビートルギルディの瞳がきらりと光った。部下たちは、役得だなどと憤っていたが、彼も、ここが一番目を引くようだ。
「そういえば、こうしてテイルイエローをじっくりと見る機会はなかったが……」
ただの露出狂と一いつ蹴しゆうしていいのだろうか。頑かたくなな形ぎよう相そうで画面を見つめる。
「こんなにも脱いでいるというのに、何な故ぜであろうな……ちっとも

露出を感じぬ。私には、テイルイエローは脱げば脱ぐほど、心が服を着込んでいくように感じるのだ」
　困惑するホッパーギルディに背を向け、ビートルギルディは言葉なくホールを後にする。
　彼の弟分であり、右腕でもあるスタッグギルディが、廊下の角で待っていた。
「なんだ、待たせてしまったか」
「ううん、それはいいんだ。ただ、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのことなんだけれど……」
　真剣な面おも差ざしを見て取り、ビートルギルディもまた神妙に頷うなずいた。
「……部下たちにはああ言ったが……もはや、テイルブラックはすでに反逆者ではなく純然たる敵性勢力。まだ美の四心ビー・テイフル・ハートが健在であるこの世界に、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが投入されるとは思えぬ」
　メガネウラギルディの出撃は、先日のプテラギルディの任務行動とは明らかに一線を画した独断専行。何か別命を受けてのことか。
　それとも、自分たち美の四心ビー・テイフル・ハートは、すでに首領に切り捨てられてしまったというのか——。
　ビートルギルディは軽く頭を振り、言い知れぬ予感を振り切るように歩みを再開する。
「ところで兄さん、テイルイエローを気にしているようだけど」
「なに、ホッパーギルディの言うとおり、戦力としてはさほど警戒する必要のない相手だ」
　はぐらかされたような答えに、スタッグギルディも無言になる。
　程なく、廊下の向こうから歩いてた白い戦士が、そっと頭を下げた。
「ビートルギルディ様、スタッグギルディ様」

「むう、お前は……スワンギルディ」
　爛らん々らんと燃える瞳ひとみを向けられ、ビートルギルディ、そしてスタッグギルディは、値踏みするような視線を向けた。
「恐れながら、私はダークグラスパー様とメル友であったと自負しております」
「ほう、ドラグギルディの意志を継ぎ、過酷な修行に身を投じていると聞き及んでいたが……その最中、ダークグラスパー様とメールのやりとりまでしていたというのか」
「彼女が我われらが敵となったというのならば――私が打倒いたします!!」
　ビートルギルディの目には、修行とダークグラスパーからのメールによってスワンギルディの身体からだに刻まれた、無数の傷きず痕あとが映る。
　決して努力を表に出さぬという白鳥にそぐわぬ、雄々しき男の勲章であった。
「どうか、私に出撃の許可を……！　ダークグラスパー様……いえ、テイルブラックと、そしてドラグギルディ様の仇かたき・テイルレッドと、今こそ決着をつけたく!!」

　ついに、看護服属性ナースの若き神童が、修行の成果を発揮すべく起たち上がった――。

キャラクター名鑑 027

ビートルギルディ



DATA

身長：295㎝

体重：402㎏

属性力：恋愛（ラブ）属性

美の四心（ビー・ティフル・ハート）の隊長。部隊を超え多くの友人を持つ人徳者で、変わり者にも好かれる。「内に秘めた恋心」をこよなく愛しており、繊細（せんさい）な女の子の心情を形にしようとイラストを始め、今やその画力はアルティメギル随一。その成果か、他者の心の機微を捉えることにも長けている。アダルトなイラストを友人にせがまれ描いてあげたところ、リアクションが芳しくなく、密かに凹（へこ）んだ経験がある。それ以来、健全イラストだけに専念していた。

第二章　宿命の邂かい逅こう、いろいろ。

　その日、生徒会の仕事が長引いたせいで、慧え理り那なが尊みことに送られて総そう二じの家の喫茶店に来た時には、日も暮れる頃ころとなっていた。それでも直接部室から基地への転送を選ばなかったのは、今日これから皆と話し合いをする前に、喫茶店をちゃんと見ておきたかったからだ。
　レイアウトを記憶するかのように視線を動かす中、背後から慧理那は温和な声をかけられた。
「神しん堂どうさん。お久しぶり」
「津つ辺べさんのお姉さま……お久しぶりですわ」
　浮き世離れした会話に興じる常連客たちの中でも、マイペースを崩さず、カウンターで小説を読みながらコーヒーカップを唇くちびるへと運んでいたのは、愛あい香かの姉・恋れん香かだった。
　愛香の誕生日以来で会った二人は他た愛わいない世間話を交わしたが、その後恋香は慧理那のツインテールを見て羨うらやましそうに自分の頰ほおを手で押さえた。
「神堂さんも、本当に綺き麗れいなツインテールよね。やっぱり、総くん触りたがっちゃう？」
「え……？　そうですわね、無意識に摘つままれたりさすられたりはありますわ」
　嬉うれしそうに思い出す慧理那を見て恋香も微笑ほほえみ、自分の髪をそっと掬すくい上げた。
「そうよね、総くんの頭の中はツインテールばっかりだもの」
　恋香がたおやかに微笑み、指で輪を作り、左右で結わえたのはほんの一瞬、それこそ話の弾みだったが──慧理那でさえ見とれるほど、その即

席のツインテールは様になっていた。
　もっとも、自分のように何年もの間ツインテールにしてきた者ならば、目を瞑つむっていても正確に左右均等に結わえられるが、恋香は子供の頃愛香に「ツインテールにしないで」とせがまれてからは、一度もツインテールにしていないと言っていた。さすがにただの偶然だろう。
「ごめんなさい、引き留めてしまって。総くんによろしくね」
「はい、失礼しますわ」
　そう応えて奥の通路に向かったたものの、実は今から会いに行く中に総二はいないのだ。

　慧理那が地下基地のコンソールルームに到着すると、中で待っていたのは、愛香、トゥアール、未み春はるの三人。トゥアールがメインモニターを何やら忙せわしなく調整しているのみで、愛香も未春ものんびりと待ってくれていた。
「お待たせしました、申し訳ありません、言い出したわたくしが一番最後になってしまって」
　全然大丈夫、と愛香に気遣われながら、慧理那も着席した。
「それで会長、用事って何？　あたしたちを招集するのって、珍しいよね」
　慧え理り那なは、招集なんて大袈裟なものではないのですが……と苦笑して居住まいを正し、
「実は、津つ辺べさんとトゥアールさん……それに未み春はるさんにご相談があって」
「あら、やっぱり私もだったの？　総そうちゃんはいいの？」
　慧理那は申し訳なさそうにこくりと頷うなずき、
「ええ。というより、できれば今からするお話は、観み束つか君には内緒で……」

「……あら？　あらあらあら？」
　未春が目を輝かせて慧理那の隣に席を移した。
「どんな悩みかしら？　遠慮なく言ってちょうだい！　性!?　性なの!?」
　やや勘違いをしているフシがあるが、これ幸いとばかりに慧理那は誤ご魔ま化かさずに伝えた。
「実は、わたくしのお母様が未春さんのお店に来たがっているのです」
「へえ、慧理那ちゃんのお母さんが？」
　思っていたこととは違うようだが、慧理那の母が「娘の男友達の家に来たがっている」、というワードに惹ひかれたのか、未春は嬉うれしそうに続きを促うながした。
「けれど、観束君はあまりそれを望まれていないようで……この話題を避けているようですの。どうしてでしょうか」
「やっぱ、お客さんがはっちゃけてるお店だから気にしてるのよ」
　総そう二じ自身も慧え夢むを店に呼べない理由は未知の生物の棲せい息そくと不思議なお客さんの棲息などとで虚実織り交ぜて伝えていたので、愛あい香かもそれが大きいと思っているようだった。
「でも、理事長も厳しいだけじゃなく意外に剽ひよう軽きんなところあるから、あのお店のお客さんたちのやりとり見てもけっこう平気だと思うけどなあ」
「わたくしもそう思うのですが……」
　愛香も口にこそ出さなかったが、ツインテール馬ば鹿かを基準に総二を婿むこにしようとしている理事長のイメージは、とうに「こちら側」にカテゴライズされている。
　未春はよく言ってくれた、とばかりにどんと胸を叩たたき、
「とにかく、オーナーの私が太鼓判を押すから、大丈夫！　気にせず連れてらっしゃい、慧理那ちゃん！　総ちゃんもあとでわかってくれるわ

よ」
「はい、ありがとうございます、未春さん！」
　胸のつかえが取れたようにほっとする慧理那だったが、直後、聞き慣れない不穏な音階のアラートがコンソールルームに鳴り響く。
「何これトゥアール、エレメリアン⁉」
「総二様の部屋に侵入者です‼」
「侵入者⁉　…………そーじの部屋に⁉」
　ごく当たり前のように盗撮している総二の部屋が、コンソールルームのメインモニターに映し出された。トゥアールが先ほど何をしていたかと思えば、監視カメラの調整だったらしい。
　そこには──

◇

　俺が自室でくつろいでいると、クローゼットの奥からコンコンとノックの音が聞こえた。
「はーい」
　条件反射で返事をしてしまったが、すぐに我われに返る。
「…………え」
　クローゼットから……ノック……？
　古びた洋館の門もん扉ぴの如き軋きしんだ音を立て、クローゼットが開き始めた。

「………………………総そう二じーさーん……あーそーぼー……」

「オアー──────────────ッ‼」
　指三本分ほど開いたクローゼットの薄暗がりから、ぎょろりと目が覗

のぞく。
　そもそも軋み音も幻聴だろう。それだけ怪異な雰囲気を漂わせ出てきたのは……もちろんイースナだった。



夜中にやられたら心臓止まってたぞ今の!!
　はにかんだ仕草だけは女の子っぽく、しかし口からはブフフェフェ、とくぐもった声を漏もらしながら、イースナがカラフルな長方形の箱を差し出してきた。
「あ、新しいゲーム買ったから、一緒にやろうと思って……」
　小学生の男の子が友達の家でゲームをやるノリで来てくれたようだが……エロゲーなんだよなこの子の場合……。
「遊びに来るのはいいから！　頼むからちゃんとドアから入ってきてくれ!!」
　いや、むしろ俺の部屋のクローゼット、部室のロッカーみたいに改造されてないだろうな。母さんがいた時もあったし……そろそろ本腰を入れて俺の部屋を調査する時が来た。
　箱上部の開け口の隙すき間まに爪つめを挿さし、摩擦でシュリンクに切れ目を入れるイースナ。
　手慣れた動きで箱をきれいに開け、ディスクを取り出していく。
「そうだ……」
　思い出したようにバッグから何か布のようなものを取り出し、俺の前で広げた。
「これ、特典のタペストリー……総そう二じさんの部屋に、飾って、おきますね……」
「何で俺の部屋に……ってまた服着てない感じの絵柄だなーこのタペストリーさんは!!」
　淡々と自分のやりたいように進めていくため、ツッコミが追いつかない。
　俺は肌色面積特大タペストリーが壁にかけられるのを、諦てい観かんにも似たスルーでやり過ごした。
「私も、何か月も待ちました、が……実はこの作品、足かけ、三年……

一九回延期して、やっと発売したん、です……」
「どんだけしてんだよ延期!?　よくモチベーション保てたな待ってた人……」
「最後の方は、一か月刻みで五か月連続で延期した……」
　延期チキンレース頑張りすぎだろ。
　イースナがこの世界に来るずっと前から延期を繰り返していたってことか。
「でもまだ、発売されたのだから、御の字です……。一〇年放置とか、よくあります……」
　俺が全異世界共通らしいエロゲー事情に困惑している間も、イースナは手を動かす。
「インストール……」
　今回イースナは俺のＰＣではなく、自分のＰＣ持参でそっちにインストールしていた。
　メタリックブラックで統一された、画面が大きめのノートＰＣだ。
「き、今日は、時間があるから、総二さんに、エロゲーの醍だい醐ご味みを、教えようと思って……」
　以前のように肩が触れるような距離で俺の隣に座ると、イースナは目を爛らん々らんと輝かせ、
「まず、お、おさらいです……。ＯＰ画面でクリック、これは駄目……」
　宣言通り熱の入ったレクチャーを始めた。
「ムービーがスキップしちゃうからだろ？」
　それくらいは俺も覚えている。
「せ、正解……です……」
　もじもじしながら照れ笑いをし、イースナは眼め鏡がねのずれを指で直した。普通に笑えば可愛かわいい女の子なんだけどな、この子

は……。
　ＯＰムービーが終わった時俺は、ある重大な事実に気付く。
「……ツインテールの女の子が見当たらなかったぞ？」
「攻略ヒロインに、デフォルトでツインテールが、いないゲーム、ですから……」
「そんなゲームが存在するのか⁉」
　身体からだ中の乳酸値が一気に上がったような気がした。そりゃ制作者の好みはあるだろうけど、それじゃ俺はこれから、何を目標にこのゲームをプレイすればいいんだ……。
「そして、タイトル画面で、コンフィグに……。ここでいきなり『未読もスキップ』にチェックを、入れる人は、現実でもモテない人……。と、特別な項目が無いか確認したら、あとはデフォルトでいいんです……最初は」
「あ、ああ」
「ラーメンを食べる時、いきなり胡こ椒しようをかけたり……カレーを食べる時、一口も口にせず、辛み増量液を入れるのが、邪道なのと一緒……。初めはデフォルトの味を楽しんで、それで物足りなさを感じた時だけ、自分の好みの味に調整する……。それは、エロゲーのコンフィグも同じ……テキスト速度も、音量も、制作者がチューニングしたものが、基準です……」
　すごく奥深い説明のような気がするが、どうリアクションすればいいんだ……。
　俺の苦悩を知ってか知らずか、イースナは肩をちょん、と触れ合わせてきた。
「い、一緒にエロゲー……。恋人っぽいですよね……」
「えっ」
　俺は桁けた違いの真顔でそう聞き返してしまったが、イースナは半笑

いでこっちを見つめてきた。

『笑って受け止めてあげてくれへんかな。少しずつ、普通の女の子になってくと思うから』

　……そうだ。メガ・ネと約束したじゃないか。イースナは変わろうとしているんだ。
　俺も笑って応こたえてやらなくて、どうする。
「恋人はともかく、レクチャーは聞くから、進めてくれ」
「は、はい」
　イースナが好きなものなんだ。いい加減、動揺しないで慣れていかないとな。
「ってまた開始早々脱いでる――――――――っ!!」
　コンフィグの極意などどこ吹く風、「はじめから」をクリックして数秒で画面が肌色になっていた。
「掴つかみで、エッチなＣＧを、見せておかないと……。怪獣映画も、最初に怪獣を見せておかないと、ドラマパートで、子供が飽きやすいです……」
「確かに、最後に大暴れするだけじゃなく、所々に怪獣が出てきた方が集中力も持続するけど……」
「エロゲーも、同じです……。最近はもう、自分磨きをして、最後の最後に結ばれるパターンは、標準じゃないですから……」
　何にでも通じるものなのかもしれないが……とにかく俺は、画面から肌色が消えるまで視線を宙に移ろわせていた。しかしそれは、見抜かれてしまったらしい。
「………………わかりました……」
　イースナはマウスから手を離し、俺に顔を近づけてきた。

「ん？」
「そ、総そう二じさんは……女の子に免疫がないから、エロゲーが苦手、なんです……」
　今、世界の理が逆転した暴論を耳にしたような……。
「ま、まず、現実の女の子の裸に慣れれば、エロゲーも、もっと楽しめます……」
　イースナは、ジャージの上を脱ぎ、半笑いで目を見開いた。
「だ、大丈夫、です……もう、恥ずかしがりませんから……」
　さらに続けて、靴下に手をかけ──
「うわあああああ待て────────────────っ!!」

◇

「ひいいいいい待ちなさいイースナ──────────────ッ!!」
　まさに青天の霹へき靂れき。ほのぼの女子会を破砕する抜け駆けを盗撮大画面で目の当たりにし、トゥアールが頰ほおを手で挟み叫ぶ。
「エロゲーの画面に連動して脱ぐとか、次世代の技術かましちゃってあの泥棒猫！　私たちが女の友情を深めている間に殿方の部屋に忍び込むとは、やってくれますね!!」
「あんたがつれないからそーじに懐なついちゃったんでしょ！　こうしちゃいられないわ、止めに行くわよトゥアール!!」
「間に合いません、どんなに急いでも部屋まで数分は……！　それだけあれば、ゆうに格納するところまでは！」
「何をよ!?　……もういいわ、あたしが変身して、あんたをブン投げるわ。そーじの部屋まで飛んでいって、イースナを止めて!!」
「まかせてくださいやちょっとまってください!!　この基地、総二様の部屋の一〇〇〇メートル下にあるんですよ!?」

　肯定と否定を見事に融合させた新語でツッコみ、トゥアールは後あと退ずさる。
「大丈夫、ちゃんと到達できるぐらいの力で投げるわ!!」
「到達する頃ころにはトゥアールちゃんが囓かじり尽くしたトウモロコシの芯みたいになりますいやあああああああああああああ」
「じゃあどうするのよ！」
　他に無数に選択肢があるのに一択を迫る理不尽に、トゥアールはポケットからシューズを取り出して愛あい香かに渡した。
「何これ、変身前でも速く走れるスニーカー？」
「アンチアイカシステム七号・アイカウチアゲールです！　理論上は成層圏まで愛香さんを打ち上げ花火にすることができます！　あと一か月早く完成させておくべきものでしたが!!」
「よし、あんたが履きなさい」
「あああああああああああああああ最強の武器を相手に奪われるハイリスク!!」
　腕組みをして壁にもたれかかった未み春はるが、二人を手厳しく諫いさめる。
「フッ……。あなたたち、そんなきゃっきゃうふふしてていいのかしら？　もう一人はすでに行動を起こしたわよ」
　トゥアールが周囲を見渡すと、慧え理り那なの姿が忽こつ然ぜんと消えていた。
「あっ！　慧理那さんがいません!!」
「慧理那ちゃんはアラームが鳴った時点で密かに部屋を出ていったわ！　女の本能に突き動かされてね！」
　愛香とトゥアールは愕がく然ぜんとした。未春の言う通りだ。
　長きにわたりじゃれ合いを続けた経験値が、二人から迅速さを奪ってしまった。

　きゃっきゃうふふの文字全てに濁だく点てんがついているが……とにかく、何をするにも愛香とトゥアールはまず自分たちが一コント挟むため、初しよ手てが遅れる。
　当人たちに意識がなくても現にこうして繰り出されるまでに染みついたライフワークが、致命的なタイムラグを生んでしまうのだ。
「……ま、負けてはいられません!!」
「会長に続くわよ!!」
　二人三脚をするかのように息ぴったりなダッシュを見せる二人に手を振って見送り、未春は息子の部屋の盗撮画面を邪悪な目で注視するのだった。
「本当、イースナちゃんが来てから面白くなってきたわねぇ」

◇

　イースナがジャージの下を脱いでショーツが丸見えになった時、勢いよく部屋のドアが開かれた。
「お邪魔しますわ観み束つか君!!」
「慧え理り那な!?」
　そこには、顔を真まっ赤かにした慧理那が立っていた。
　イースナはともかく、慧理那が事前に連絡も無しに家に来るなんて、珍しいな……。
「イースナさん！　男性のお部屋で薄着になるのは感心しませんわ!!」
　陽よう月げつ学園高等部の生徒会長として、毅き然ぜんとした態度で風紀を正そうとする慧理那。
「わ、私は今、総そう二じさんにエロゲーを楽しんでもらうために、脱ぐという、使命感に燃えてます……。それは、誰だれにも止められない……」

「脱がなくても教えられるはずですわっ！」
　しかし、イースナも意地になっているのか聞き入れようとしない。
「……慧理那さん……あなたは、脱衣を受け入れて、理解がある人と思って、いたのに……私を止めるのは、ひどい……」
「う、受け入れているわけではありません！　正義のためですわ!!」
「……正義のための脱衣って、何……？」
　真顔で聞くイースナ。確かに真顔で聞くしかないことなんだが。
「私は、テイルイエローが誕生する前から、この世界に来ていました……。慧理那さん……テイルイエローは、この先の戦いに、ついていけない、かもしれません……」
「どうしてですの!?」
「あなたは、自分にいいわけを、しています……。心に嘘うそをついたままでは、これからもっと強力になっていく、エレメリアンには勝てません……」
「わたくしの……正義が、嘘だと……？」
　さすがにこれは俺も止めに入る。
「違う、慧理那は脱衣とかそういう恥ずかしいことも含めて自分を受け入れて戦士になったんだ。それは俺がちゃんと見てる。嘘なんかじゃないぞ、イースナ」
「ああ、ちゃんと見てくださっていたのですね、ご主人様……」
　たまにうっかり漏もれる呼び方に耳ざとく反応し、イースナは慧理那へとにじり寄った。
「わ、私を見てください。今脱いでいるのは、総二さんのためです……。決して、自分勝手に脱いでいるわけでは、ありません……。あなたの脱衣は、総二さんに、迷惑……!!」
「ううっ……!!」
　言い返すこともできず打ちのめされる慧理那。

　そもそも自分勝手という単語自体乱暴で彼女たちには似つかわしくはないと思うが、自ら進んで脱いでいるという点で二人には何の相違点もない気がするのだが。
　男には立ち入ることのできない、女の子ならではの持論なのだろうか。

「どりゃあああああああああああああ!!」
　破は城じよう槌ついのように小こ脇わきに抱えたトゥアールの頭で俺の部屋のドアをブチ破り、愛あい香かが突入してきた。
　鍵かぎの一つもかけられていない無防備なドアに、何なに故ゆえにこれ程理不尽な破壊がもたらされてしまったのか。
「そーじ、無事!?」
「無事ですか総そう二じ様!?」
　あの扱いで何でそこまで凜り々りしく俺の心配をできるんだ、トゥアールは。
「……見てください。自分は武器にされながらも、トゥアールさんは、総二さんの心配を、しています……。そして、脱いでいる……。彼女も、強い……」
「ホントだ、いつの間に脱いでんのよあんた！　白衣上に着てるから気付かなかったわ!!」
「下着姿の女がいる部屋への討ち入りです、最低こちらも同条件にならなければ!!」
　何気ない二人のやりとりを聞いて、はっとする慧え理り那な。いや、今の愛香やトゥアールに学ぶべき点はないと思うが……。
　イースナは着衣を整え、クローゼットへと歩いて行った。
　そして最後にイースナが慧理那を一いち瞥べつし、
「ただ脱ぐだけでは……これから激化する戦いで、あなたは足手まとい

になるだけです……」
　彼女なりのアドバイスなんだろうが、何でさっきから脱衣だけがフォーカスされているんだ。
「それじゃあ総二さん、続きは、また今度……」
　クローゼットの中へと消えていくイースナ。
　しょんぼりとしている慧理那の肩を叩たたき、俺は言った。
「大丈夫、イースナも一緒に戦っていくうちにわかるさ。慧理那がちゃんと信念を持って戦っているって。俺にも最初は結構刺とげ々とげしかったからさ、慣れればすぐ仲良くなれるよ」
「……はい……」
　突入してきたはいいが状況を呑のみ込めずにいる愛香とトゥアールを交え、少し今後のことを話しておく必要があると感じた。
　まだイースナは、俺とトゥアール以外には完全に心を許してくれていないようだからだ。

◇

　イースナがクローゼットから現れた翌日の放課後。先にやってきた俺と愛香、トゥアールは部室でくつろいでいた。
　俺がいつも座っている席の真後ろ──ＴＶのある壁の斜め上に、昨日まではなかった「出勤表」なるボードが掛けられている。善いい沙すな闇あん子こととしての仕事の予定が書かれているのは、ツインテイルズとして出撃できる目安にしてということなのだろう。……その予定自体は、毎日俺の携帯にもメールで送られてくるのだが……。今日は一七時からインタビューの仕事らしい。
　程なく慧え理り那なと桜さくら川がわ先生もやってきたのだが、桜川先生はやおら俺に耳打ちしてきた。

「なあ、お嬢様が変なゲームについて調べようとしているようだが、昨日何かあったのか？」
「………………変なゲーム？」
「うむ。奥様はそういうものに興味を持つことを反対なさらんが、限度があるからな……」
　視界の端で様子を窺うかがうと、席についた慧理那はトゥアルフォンを凝視していた。
「えろげ……えろげ……」
　あのわかりやすい呟つぶやきが検索ワードなのだろう。やっぱり昨夜イースナに言われたことを気にしていて、自分もエロゲーを理解しようとしているのか。
　その前向きさは慧理那らしくて素晴らしいんだが、エロゲー界が不用意に足を突っ込むと危険な魔境なのは、俺も身を以もつて体験している。やんわりと警告しておかないと。
「慧理那さん、エロゲーを検索したいんですか？」
　俺が止めようとする前に、トゥアールが慧理那の横顔を背後から覗のぞき込む。
「ええ。でも、わたくしの検索の仕方が下手なようで、なかなか出てきませんの」
　慧理那の自宅と違って、トゥアルフォンには年齢制限がかかっていない。まずいぞ……。
「お任せください、エロに関しては数百種の機能がありますからね！　タッチ位置を予測して指が画面に触れる瞬間エロ動画へ飛ばすポップアップが出現する機能とかもありますよ！」
　付き合いの長い携行デバイスの知りたくなかったポテンシャルに俺がくじけそうになっていると、愛あい香かが机に両手をついて勢いよく立ち上がった。

「あんたの仕業だったのね！　この前いきなりやらしい動画が再生されてビビったわよ!!」
「それを今日まで私に言わなかったということは、さては愛香さんそんなポップアップが出てきてもおかしくないやましいサイト見てぶおあああああああああああああああ!!」
　愛香がトゥアールを物理的にポップアップしている間も、慧理那の検索は続く。
　漠然と検索して上級者向けのエロゲーが出てきてはかなわない。俺は慧理那のトゥアルフォンで昨日イースナが持ってきたエロゲーのタイトルを入力し、公式サイトを表示させた。
　慧理那は俺に礼を言うと、登場人物のページなどを見始めた。その辺は大丈夫だが、肌色の増えるサンプルＣＧにはできればいかないでほしいが……。
「慧理那。エロゲーはイースナのコミュニケーションだし、あまり深く考えない方がいいぞ」
「ですが、イースナさんと仲良くなるために、彼女の好きなものを理解したいのです」
　その理由も本当だろうが、やはりイースナの言葉が心にしこりを残しているように感じる。
「それに、わたくし自身、自分の力不足は痛感し始めていました。よい機会ですから、戦士として一皮向けるために、今一度テイルイエローとしての自分を見つめ直したいのですわ」
　心に嘘うそをついていると言われた慧理那が、イースナの言動をなぞってそこに光明を見出だそうとするのは、無理もないことだろう。よりによって、それがエロゲーなのが問題なだけで。
「……お嬢様をちゃんと支えてやってくれよ、観み束つか。やはり、無理をなされている」

再び耳打ちしてきた桜さくら川がわ先生に、俺はしっかりと首しゆ肯こうする。桜川先生も、うむと頷うなずき、
「ところで観束、お前のいつも座ってる椅い子す、脚あしががたついているぞ。新しい物と交換しよう」
「え、そうですか？」
顧問でありながら、自分がしたいからという理由でいつも部室を掃除してくれている桜川先生は、備品一つまでこうして気にかけてくれている。俺は桜川先生が出してくれたスペアの椅子にありがたく腰掛けた。
すると、シャク、と妙に柔らかな感触が。
いつものパイプ椅子ではなく、ペーパークラフトのような素材の椅子だ。
直後、全身を呪術にも似た悪お寒かんが駆け巡り、俺は慌てて立ち上がって椅子を再度確認した。
メッシュ生き地じのように見えた黒斑はん点てんは━お経よろしくびっしり刻まれた、文字だ。
「ギャアアアアアアアアアアアア婚こん姻いん届とどけで椅子が編まれている━━━━━━━ッ!!」
━━━ペーパークラフトというか、婚姻届ペーパーだった。
「…………誕生日まで、もう二週間ないからな……私のこともちゃんと支えてくれよ……」
もはや、判を押させるでもなく、婚姻届を呪術道具として仕込むまでに追い詰められているのか……。宣言どおり、二九歳の誕生日が近づくにつれ、行動が過激になっていく……。
トゥアールが、闇やみに堕おち始めた桜川先生に詰め寄る。
「いい加減諦あきらめたらどうですか尊みことさん！　そんなに結婚相手が欲しいならストックしているロボット差しあげますから！　アンチアイカシステムの汎用格闘タイプの試作品が三～四〇体よりどりみどり

ですよ!!」
　どんだけ試作してるんだ……そしてそのシリーズは完成を見たのだろうか……。
「私は恋人が欲しいのではなく結婚したいのだ！　ロボットでは満足できん!!」
「……きゃっ、この年とし増まったら肉欲に正直」
　トゥアールがジト目で桜川先生を見てフフフフ、と意味ありげに笑うが、桜川先生は不思議そうに首を傾かしげるだけだった。

　「トゥアールのおっぱい」
　　　　　　「トゥアールのおっぱい」

　エレメリアン出現のアラートだ。いつもは冷や汗ものな俺の肉声だが、慧え理り那なの気が紛まぎれてくれるならこの不名誉おもしろボイスも悪くない。
　俺は席を立ち、トゥアールより先にアラートを止めようとノートＰＣに近付いた。

　　　　　　　　　　「――――トゥアールさんのおっぱい……」

　三度目のアラートが、最近聞き慣れ始めたくぐもった女の子の声に変わっていた。
「イースナの声になってるじゃないですか――――――――――っ!!」
　トゥアールが、固まってしまった俺の代わりにアラートを切る。
　科学に明るい新メンバーは、こういう悪戯しこみもお手の物のようだ。あの時イースナは羨ましそうにしていたように見えたのは、未だにトゥアールの胸を好きだからだったのか？

「……待ってください、これは……！」
　画面を注視したトゥアールの表情が強こわ張ばる。
「エレメリアンが、同時に二箇所に出現しています……！」
「何だって!?」
　俺たちは一斉にトゥアールの周りに集まり、画面を覗のぞき込んだ。
　確かに、二分割した画面には二体のエレメリアンの反応が示されていた。
「複数同時に出現することはあったけど、今まで別々の場所に同時に現れることなんてなかったわよね……」
　愛あい香かのもっともな疑問に、慧え理り那なが持論を提示する。
「イースナさんがいなくなったことで、指揮系統が混乱しているのかもしれませんわね……。とにかく、二手に分かれて出撃しましょう！」
　慧理那は、数十秒前までエロゲーを調べていたとは思えない凛りんとした顔つきで宣言した。
　場所は、関東と関西で大きく離れた二か所。それぞれ総合病院と中学校だ。
　出勤表を見るに、イースナは今の時間は仕事中で、出撃は無理だ。三人で分担だな。
「よし、俺がこっちの病院に行く。愛香と慧理那は学校の方を頼む」
　すかさず愛香に目配せをする。即座に俺の意図を察してくれたらしく、愛香は頷うなずいた。
　表面上はともかく、慧理那は元気が無い状態だ、戦闘でも誰だれかがフォローしなければ。

◇

　アルティメギル基地の、人ひと気けのない廊下に二つの影があった。

「なんと！　スワンギルディが出撃を!?」
　老参謀・スパロウギルディは、ビートルギルディからその事実を聞かされ愕がく然ぜんとした。
「うむ。本人のたっての希望でな」
「修行は完全に修了したわけではないというのに、あやつめ……!!」
「敵かなう敵わないは問題ではない。私は奴やつの心意気を汲くんだのだ。それに、力の程もしかと見極めた」
　ビートルギルディは、廊下の隅に置かれたワゴンを指差した。
　その上に置かれたものこそ、ドラグギルディがかつてスワンギルディの魂こん魄ぱくを試さんと眼前に差し出した、彼のＰＣだった。
「ロード画面のサムネを見る程度はもちろん、セーブデータを解析してどの〝回想シーン〟を何度見たかまでをもつまびらかにしたというのに、奴やつは小揺るぎもしなかった。信用してやるがよい、話に聞いたヒヨっ子は今や、とうに雄々しく羽ばたいているということを」
　どれだけ成長したかは、見守ってきたスパロウギルディが誰だれよりもわかっている。
　しかし、ドラグギルディの位を目指して日々修行してきたスワンギルディがそこに到達する前に先走ってしまったのは──やはりダークグラスパーの離反が誰よりもショックだったからではないだろうか。
「……それに、奴の決闘を後押しすべく、私の右腕もサポートに向かった」
　スパロウギルディの心中を察したように、ビートルギルディは優しい言葉をかける。
「スタッグギルディ様が……!?」
　甲こう虫ちゆうの翼をマントのように翻ひるがえし、ビートルギルディは熱き部下へと激励を送った。
「存分に戦え、スワンギルディ！　貴様のその気迫が、あるいは奇跡を

呼ぶやもしれぬぞ!!」

◇

「急患でーす」
　病院の中を逃げ惑う人々の悲鳴の中、場違いな棒読み声が聞こえた。もはや目印にも等しい。俺は声の元へと急いで向かう。
　建物の中で戦うのはまずい。避難できない人たち……自力では動けない重病人や、手術中の人だっているだろうからな。
「急患でーす」
「私は健康ですー!!」
　ストレッチャーの上に看護師さんを乗せ、廊下を走る白いエレメリアンの姿を発見する。
「待て！　その人を離せ!!」
　俺の声が届くやいなや、エレメリアンは驚くほど素直に看護師さんを解放した。
「結構なお点て前まえでした」
　慌てて逃げる看護師さんに、真顔で賛辞を送るエレメリアン。何の未練も感じられない。
　どうやらこいつも、属性力エレメーラ狙ねらいではないらしいな。
「……む、貴様一人か、テイルレッド!?」
　他のメンバーがいないことを訝いぶかしむが、
「同時に別の場所にもお前らの仲間が現れたんだ、当たり前だろ！」
　それはこいつにとっても意外なことだったのか。今初めて理解したかのように、虚空を見つめるエレメリアン。
「……なるほど、私への手た向むけ――一対一の場、ありがたく頂ちょう戴だいします」

傷だらけの白い全身に並々ならぬ闘志をみなぎらせるエレメリアン。
「私は看護服属性ナースの戦士──スワンギルディ！　亡きドラグギルディ様の最後の弟子だ!!」
「ドラグギルディの!?」
「リヴァイアギルディ様とクラーケギルディ様も、私に戦士としての気構えを託してくださった……！　……テイルブラックは今日は来ていないようだが……ダークグラスパー様もまた、我わが師も同然のお方。テイルレッド、言わば貴様は、私から四人もの師を奪ったのだ!!」
まるで白鳥のように白くしなやかなフォルムのエレメリアン・スワンギルディが告げたのは、俺の心を揺さぶるに十分な因縁だった。
この尋常じゃない気迫。師の仇かたきとして、俺を相当に憎んでいるってことだろう。
「ブラックは自分の意志で征ゆく道を選んだ。彼女はともかく……俺がお前の仇だっていうなら、受けて立つ！」
「他の仲間たちがお前に夢中になっている間も、私は輪の中に入れずにいた……！　未熟と笑えテイルレッド！　師の仇を、私し怨えんと切り離し美しさを認める強さが、私には無かったのだ！　師の愛したツインテールを持つお前を……！　あの日から私は、お前のツインテールを真まっ直すぐに見ることができなかったのだ!!」
そうか……こいつにとって、俺のツインテールこそが、師の仇なのか。
分断は仲間の手向けだとこいつはさっき言ったが、今日ブラックがいないのも、メンバー分けで俺が一人になったのも、まして俺がこの病院の方を選んで出撃したのも、全て偶然の産物だ。そう考えると、この対たい峙じに、俺も何か運命めいたものを感じる。

スワンギルディは、どこからともなく透明なコップを取り出した。そ

して、その中にペットボトルのお茶を注いでいく。
「……見ての通りこれはただのお茶だ。しかし、ここが病院であることを考えると──」
　ペットボトルをゴミ箱に捨て、コップだけが残った今、見えるのはそのコップの中に入った薄黄色の液体。そしてやつの立つ隣の壁には、「検査室」のプレートがある。
　視覚トリックの完成というわけだ。
「どんなものも、見方によってはまるで別のものとなる。お前のツインテールも同じだ、テイルレッド！　その美しさこそ、私の仇……！　だから私は、何より自分自身が許せぬのだ‼」
　訴えたいことはわかるが、検尿とツインテールを同列にされるのは承服しがたい。
「……ドラグギルディは、最期に俺のツインテールを見て笑って散っていったぜ。お前の仇は俺のツインテールじゃなくて俺自身だろう！　ツインテールから目を逸そらして、俺と戦えると思うなよ、スワンギルディ‼」
　スワンギルディははっとすると、腹を据えたようにレイピア状の武器を取り出す。
「そうだな……！　よく言ってくれたテイルレッドよ！　私はお前のツインテール属性をいただき、ドラグギルディ様への餞はなむけとする‼」
　敵に発破をかけるなんて、馬ば鹿かげているかもしれない。
　それでも俺は、こいつの思いだけは受け止めなくてはならないと強く感じていた。
「場所を変えろ！　看護服を愛しているなら、看護師さんが愛する病院と、患者さんたちにも敬意を払うべきだろう‼」
「……決闘を前にその優しさ──さすがだな。アルティメギルの誰だれも

が憧あこがれるわけだ」
　それは俺も同じだ。たとえ倒されても、その遺志は次代に受け継がれていく──信念を尊とうとぶエレメリアンたちに、敵ながら俺はいつも教えられる。仲間は怒るかもしれないが、敬意を懐く。
　俺たちは互いを見据えながらゆっくりと無人の廊下で歩を進めた。
　スワンギルディは一気に歩速を上げ、俺もそれに続く。
　飛ぶように階段を昇り、互いに一言も発することなく、病院の屋上まで辿たどり着いた。
　検尿に見立てたあのコップ、いつまで持っているんだ、捨てるタイミングを逸いつしたのか、と思っていたが……あれだけ激しい疾走の中、一滴も中身を零こぼしていない。大胆にして、繊せん細さいな動きのパフォーマンスということか。
　晩夏の涼風にツインテールを揺らされつつ、俺は真っ正面からスワンギルディを見据える。
　奴やつのおびただしい全身の傷──本当にドラグギルディを思い出す。
　厳しい戦いになりそうだ。

「ゆくぞ、テイルレッド!!」
「ああ、来い!!」
　因縁の決闘が、今幕を開けた。

◇

　レッドと二手に分かれたブルーとイエローは、もう一つの現場である離れた県の中学校へと到着していた。
「………………あの、あれはエレメリアンでは……」
　イエローの指差す先に、植え込みに身を隠すようにしゃがんでいるエ

レメリアンがいた。
　校庭の端はしの、校舎の裏への道を覆うように繁る植え込みだが、そのエレメリアンの長大な二本角が屈かがんでいても飛び出してしまっている。隠れているというよりは、こっそり何かを覗のぞき見しているように見えるが……あれでは前方からはバレバレのはずだ。
　一歩近づこうとしたブルーは、先んじて気付いたそのエレメリアンに手を突き出された。
「しっ。少し待ってくれないかな」
　決して迫力があるというわけではないが、何か有無を言わせぬ強制力を感じ、ブルーとイエローはエレメリアンの視線の先を窺うかがった。
　特に人を襲うでもない……これでは、下校中の生徒たちもエレメリアンが出現したと気付いてはいないだろう。
　そこまでしてこのエレメリアンが出で歯ば亀がめしたがる光景とは一体――。
　二人もそのエレメリアンの隣まで歩いて行って身を屈めると、植え込みの隙すき間まから前を覗く。
「っ……⁉　あれ……⁉」

「……あの、先輩、好きです……！　つき合ってください‼」
「ぼ、僕でいいの……‼」

　セーラー服を着たツインテールの女の子が、学ランの男の子に愛を告白している場面だった。
「「（キャ――――――――ッ‼）」」
　破壊神、変質者と揶や揄ゆされているとはいえ、ブルーもイエローも本質は女の子。
　思わず見てしまった甘酸っぱい光景に、声を殺して歓喜する。

男おとこの娘この時のドラマと違い、正真正銘、爽さわやかな青春の一ページだ。
二人が去って行くのを見送ると、エレメリアンは満足そうに立ち上がった。
「僕はスタッグギルディ。礼を言うよ、一つの恋が実るのをしっかりと見守ってくれて」
「エ、エレメリアンに言われるまでもないわ！」
「わたくしたちも、恋が成じよう就じゅする瞬間は邪魔したくはありません！」
ちょうど無人になった校舎裏から、さらに奥へと場所を移す。
ここならば、よほど派手な戦闘にならない限り、すぐには気付かれることはないだろう。
問題は、ブルーもイエローもちょっとしたことで派手な戦闘を招いてしまうことだが。
『大して暴れてもいないのに存在を探知できたということは、ツインテイルズの分断が目的でわざと属性力エレメーラを増大させおびき寄せたのかもしれません！　油断なさらず、二人とも!!』
トゥアールの通信に、ブルーとイエローは揃そろって頷うなずく。
下校時間とはいえ、まだ多くの学生が残っているというのに、戦闘員アルテイロイドも連れず、やったことといえば覗のぞき見だけ。戦力の分断という指摘が、現実味を帯びてきた。
「あんたの目的は何!?　まさか、本当に中学生の告白出歯亀に来たわけじゃないでしょ!?」
「あれは素敵な偶然だっただけさ。見られてよかったよ」
スタッグギルディはブルーとイエローを順番に見据えると、ブルーに指を突きつけた。
「君も、恋をしているね」

甘く囁ささやくようにそう告げられ、ブルーは身を庇かばうようにたたらを踏んだ。
「はあっ!?」
「隠さなくてもいいよ。僕は恋愛属性ラブ……人間の恋愛には敏感でね、恋心を見抜けるんだ」
エレメリアンに散々な評判のブルーをあえてそう評したのだ、嘘うそとは思えない。
「恋心がわかる属性!?　さ、最悪……レッドと別行動でよかった……！」
しかし、落ち着いて考えてみると、突拍子も無いことを言われたのだと気付く。
恋の指摘ではなく――その前の、属性についてだ。
「待ってよ……恋愛の属性なんてもう、属性力エレメーラっていえるの!?　本当の愛と何も変わらないじゃない!!」
プテラギルディの母属性マザーならば、まだわかる。だがもはや、恋愛属性ラブなどというダイレクトに愛そのものを表す属性は、もはや趣味嗜し好こうの域を超えてしまっているように思われた。
「確かにこの属性力エレメーラを持つエレメリアンは少ないね。こんなに素敵で明快な属性だというのに。恋愛は何より美しいじゃないか……それを愛めでることの、何がおかしいの？」
恋する女の子は美しい――人間からすればもはや使い古された感すらある普遍のフレーズも、怪人が嬉き々きとして語ると、困ったことにそれは新鮮だった。
ツインテールを愛するように。巨乳や貧乳を愛するように。恋愛という「心を愛めでる心」――そう言われてみれば、実にシンプルなものにも思える。
「むしろ、人間が持つ属性力エレメーラとしてはこれ以上無いくらいポ

ピュラーなものだと思うけどね……どうしてかな？　恋に恋する、って言うじゃないか？」
　ストレートに恋を育はぐくむことを恥じ、「とりあえず」や「何となく」など、逃げ口上ばかりが上う手まくなる人間たちを、皮肉っているようにも……そして、悲しんでいるようにも聞こえる。
「君の印象が少し変わったよ、テイルブルー。他のエレメリアンは怖がっているけど、まあ、僕はその美しい恋心を認めてあげるよ。いいんじゃないかな」
「何様よあんたはああああああああああああああああ!!」
　それ、人気は無いと思うけど、僕は好きだな……というような超絶上から目線で評価された屈辱に、ブルーが怒り猛たける。だが、それこそがスタッグギルディの狙ねらいだった。
　スタッグギルディの背後に、極彩色のゲートが出現する。
「僕の役目は終わった。話に付き合ってくれてありがとう、ふふ」
　二人がしまった、と思った頃ころには既に遅く、その身体からだはゲートの中に溶け込んでいた。
「テイルブルー。素敵な恋だけれど、君とレッドの愛は、死の二菱
ダー・イノ・ランヴアスの隊長の方が喜ぶかもしれないな……。せいぜい、彼が出てこないことを祈るよ」
　取り逃がしてはしまったものの、そんな属性があったこと……そんな属性を持ったエレメリアンがいたこと……そして、自分の心さえも見抜かれたこと。様々な思いが綯ない交ぜになって、ブルーは立ち尽くす。
　同じように言葉なく立つイエローだったが、その胸中はブルーとは決定的に相違していた。
「……スタッグギルディ……誉めたのはブルーの心だけでしたわ……。それって……」
　自分は恋を見抜かれなかった。その意味するところを噛かみしめ、イ

エローは俯うつむく。
「え、ああ、ほら！　あたしは年季が入ってるから……って何言ってんだろ、ええと……!!」
　微妙な空気が漂う中、それを斬きり裂いたのはトゥアールの通信だった。
『スタッグギルディは囮おとりだったようです……！　レッドと対たい峙じしたエレメリアンが、ドラグギルディの弟子だとか、決闘だとか口にしています！　愛あい香かさん慧え理り那なさん、急いでレッドの元へ向かってください!!』
「マジで!?　そりゃやばそう……行こう、イエロー！」
「は、はい!!」
　二人は一気に学校の屋上へと跳躍し、一度基地へと帰投した。

◇

「――あれ？」

　病院の屋上で戦い始めて数分後、俺の目の前には精根尽き果てたスワンギルディが倒れていた。横には、お茶の入ったコップが零こぼれコンクリートを濡らしている。
「うぐぐ、何という強さだ……！　わ、私はこの数か月、死とすれすれの限界まで己を追い込み、修行を重ねてきた！　血ち反へ吐どを吐いて透すけている荷物にも耐え抜いた！　それでも、ここまで歯が立たないというのか!!」
　演技をしているようには見えない。
　ドラグギルディの弟子で、ずっと修行をしてきたというから、それこそ俺は幹部クラスと戦う覚悟を決めてこの決闘に臨んだ。しかし……決

して弱くもないがそれほど強くもないという、何ともリアクションに困る戦闘力だった。
　俺の渾こん身しんの一いち斬ざん、たった一発の剣撃でレイピアは折れ、スワンギルディは吹っ飛び──。
　あえなく因縁の勝敗は決してしまった。
「完敗だ……。さすがはドラグギルディ様を倒した戦士、見事なツインテールだった……」
　俺も奴やつを倒した頃ころよりは相当地力が上がっているはずだ、そのせいもあるのだろう。
　救いなのは、敗れたスワンギルディが悔いなく晴れやかな表情をしていることか……。
「敗れた私が言うのもなんだが、こうして地に伏してやっと、お前のツインテールを真まっ直すぐに見ることができたぞ、テイルレッド……」
「スワンギルディ……」
　戦いを撮影していた戦闘員アルテイロイドたちも、所在なく立ち尽くしている。
「……モケ……」
「お前たちは戻れ。よくぞ、手出しせず私の生きた証を記録してくれた……!!」
　スワンギルディは戦闘員アルテイロイドに退却命令を出すと、
「さあやれ、テイルレッド！　命果はつるならば、ドラグギルディ様と同じくお前の手で！　私の最期の望みを叶かなえてくれ!!」
　ブレイザーブレイドを握り締めたまま、俺はただじっとスワンギルディを見つめた。
　俺と戦うためだけに、ドラグギルディが倒されてからの数か月間、ひたすら修行に明け暮れた戦士……そんなこいつに、俺は一体何をしてやれるというんだ。

　とどめなんて、俺には……。

「レッド――――――――――――――――ッ!!」
　空をつんざくような叫びに、思考は中断された。
　病院全体が震ふるえるほどの衝撃で、ブルーとイエローが屋上に着地した。
「レッド、無事ですの!?」
「大丈夫!?　……みたいね」
　戦闘を終え、よほど急いで来てくれたらしい。俺の無事と、倒れたスワンギルディを確認し、安あん堵どするブルーとイエロー。
「どうしたの？　倒さないの？」
　ブルーが急せかすように攻撃を促うながす。
「いや、こいつはもう降参したようなもんだから……俺はもう、止とどめを刺す気はないよ」
　それが俺の結論だ。属性力エレメーラを狙ねらわず、戦いに満足したというなら、止めを刺す理由はない。
　正々堂々の戦いを終えた、清涼なそよ風のような心ここ地ちが、俺の心ツインテールに吹いていた。

「完全解放ブレイクレリーズ！」

「えっ」
　俺はスワンギルディの晴れやかな表情に応こたえるべく、精一杯の清すが々すがしさを込めて気持ちを伝えたつもりだったが、ブルーはガン無視してウェイブランスを完全解放ブレイクレリーズしていた。
「オーラピラー！」
　しかも、地面に倒れ伏すスワンギルディを、容赦無く拘束バインドも

した。
「まっ……待て、レッドの手で逝ゆきたいと願った矢先に何だこの蛮行は!?」
　スワンギルディが動けぬ身体からだで必死に状況説明を乞う。
「そーやって情に訴えればレッドなら見み逃のがすと思ってんでしょ！　あたしはそうはいかないわよ！　望み通りとどめを刺してやるわ!!」
　……ぶれなさすぎて怖いですブルーさん……。
「エグゼキュートウェ――――――ブ!!」
　俺とイエローの制止も間に合わず、ブルーの刺し突とつがスワンギルディへ向かって一直線に突き抜けていった。

「レッドがいい――――――――――――――っ!!」

　多分に同情すべき断末魔の声と共に、スワンギルディは大爆発を起こした。

◇

「……ああ、スワンギルディ……とうとうお前までもが……!!」
　力無く崩れ落ちるスパロウギルディ。
　戦闘員アルテイロイドの中継が、アルティメギル基地大ホールのスクリーンに非情な現実を映し出した。
　大番狂わせはなかった。奇跡が起こることはなかった。
　ドラグギルディ部隊最後の輝かしき後継者が今、消え去ったのだ。
「スワンギルディ、無念であろう！　最後の最後で文字通り横よこ槍やりを入れられるとは……!!」

　尋常の勝負の末に敗れたスワンギルディの願いを、屍し肉にくを攫さらうハイエナが如く掠かすめ取った簒さん奪だつの徒。戦士たちには、テイルブルーがそう映っていた。
「おのれテイルブルー！　死に征ゆく者の願いを踏みにじるとは、鬼め!!」
「次は私に出撃の許可を！　差し違えてでもあの悪魔めを倒してみせましょうぞ!!」
　怪物たちに鬼だ悪魔だと散々テイルブルーが揶や揄ゆされる中、ビートルギルディは一人、スワンギルディが消え、立ち尽くすツインテイルズを映すのみとなったスクリーンを見つめていた。
「……テイルブルーの技が炸さく裂れつする最後の一瞬、激流の中に炎が迸ほとばしったように見えたが」
「はっ……!?　炎を操るツインテイルズはテイルレッドの他におりませぬ、おそらく戦いの残り火でありましょう」
　部下のホッパーギルディにそう言われ、気のせいと判断したのだろう。
「そうか……」
　ビートルギルディは中継を打ち切らせ、ホールを後にした。
「……あちらが尋常の勝負に水を差すのならば、こちらも相応の報むくいで応こたえねばなるまい」
　静かなる怒りを、背の羽と雄々しき一本角から立ち昇らせながら――。

◇

「……今のは――」
　俺は無意識に独りごちる。

　エグゼキュートウェイブがスワンギルディを貫こうとし、水流の瀑ばく布ふが迸ほとばしった一瞬。
　それを斬きり裂くかのように、炎が一いつ閃せんしたように見えたのだ。
「トゥアール、さっきブルーが技を出した辺りのデータを確認してくれ……別のエレメリアンが現れていなかったか⁉」
『はい？　…………ええと、いえ、特には……どうかされましたか？』
「いや、何でもない」
　俺の気のせいか……？
　しかし、イエローも今のやり方には思うところがあったようで、ブルーを詰問している。
「ブルー、いくら何でもあれはひどいのでは⁉　戦意はもうありませんでしたわ！」
「病院を狙ねらうエレメリアンなんて逃がしたら、次に本気で属性力エレメーラ取りに来た時大変なことになるかもしれないのよ⁉　……レッドも！　この前ＭＲＩに入ってたエレメリアン倒した時に、あたし同じこと言ったじゃない！」
　殴り合いの喧けん嘩か肯定派の愛あい香かなら男と男の決闘の矜きよう持じみたいなものをわかってくれるかと思ったが、そこは現実的だった。そう言われてしまえば、ぐうの音ねも出ない。

　その時不意に、視線を移ろわせた空の彼方かなたで、赤い光点が一際大きく輝いたように見えた。
　飛行機か何かかもしれない。エレメリアンの反応が無いというのだから、むしろそちらの可能性の方が高い。しかし俺は、確かめずにはいられなかった。不安の根拠に──スワンギルディの属性玉エレメーラオーブがどこにもない。

「ブルー、イエロー、ごめん、先に帰っててくれ!!」
　独断専行しようとした俺の腕を、イエローが摑つかんだ。
「……あの赤い光を追えばいいのですわね？」
「また罠わなかもしれないでしょ、今度はちゃんと三人で行くわよ！」
　ブルーが髪紐属性リボンを発動して翼を展開し、俺の手を摑む。二人も気付いていたようだ。
　確かに、あえておびき寄せているのかもしれない。細心の注意を払って追跡しなくては。
　飛び始めて間もなく、彼ひ我がの距離はみるみる縮まっていった。
　相当の距離があったというのに、フォーラーチェインにチェンジして加速するまでもなくこれだ。途中で俺たちに気付いて、わざと速度を落としたとしか思えない。
　それでもかなりのスピードは出ている。あれがエレメリアンなら、気配を殺しているとは考えられない。とっくにトゥアールが探知しているはずだが……依然としてできていないという。
　いったいあれは、何なんだ!?
　赤い光点は見る見る人ひと気けのない方へと飛んでいき、最後には市外の閑かん寂じやくな河原へ降り立った。
　人間大かそれよりやや大きい、薄く中が透けて見える程度の透過度の赤い光点は、ガラス細工のように砕け――中から現れたのは、忘れるはずもないあのエレメリアンだった。
「フェニックスギルディ!?」
「よう、テイルレッド……久しぶりだな!!」
　天を摑つかむように巨大に広がる翼に、太陽風コロナを宿したような棘とげ張ばった身体からだ。
　間違いない。ツインテールを禁止され、ポニーテールを拡散されていたロエルたちの世界─その事件の張本人だった裏切りのエレメリアン、

フェニックスギルディだ!!
「……ダークグラスパーを助けてくれたらしいな。それは、礼を言う」
「ああ、気にすんな。俺様も首領アイツのやり口は好きじゃねえんでな!!」
　どうしても不信を隠せない俺の礼にも、からっとした態度で応こたえてくる。こいつのこういうざっくばらんさは相変わらず好感を持つが、簡単に割り切れない因縁があるのも事実だ。
「……けど、俺の秘こ密とをダークグラスパーに喋しやべったんだろう。人の隠し事をベラベラと言い触らすのは少し見損なったぞ、フェニックスギルディ！」
　すぐに俺の正体のことだとわかったのか、バツが悪そうに後頭部を掻かく。
「ば、馬ば鹿か言え、俺様だって告げ口なんて大嫌いだ！　ちゃあんと考えがあったんだぜ！」
「考え？」
「ああ。あいつは、アルティメギル側にいるべきじゃねえと思ってよ！　相棒のお母ちゃんロボには悪いことしちまったが……最後にはおおむね上う手まくいっただろう？　言っておくが、俺様だってダークグラスパーの姉ちゃんは好敵手って認めてたんだからな!!」
　確かに、イースナやメガ・ネがこいつに助けられたのは動かしがたい事実だ。
　悪意がないというのなら、そうなのだろう。
「なら、それはいい……。けど、この世界に来てどうするつもりだ。まさかここもロエルたちの世界と同じように、ポニーテールとツインテールを逆転させるつもりなのか!?」
　ダークグラスパーがテイルブラックとなり反逆者と認識されなくなった今、こいつはアルティメギルにとって一番の追われの身だ。そこまで

大胆な行動を取るだろうか。
「なかなかいい世界だ……そうしたいのは山々だがよ、この世界は今直属軍が侵攻指揮を取ってるんだぜ⁉　以前お前らと会った世界なんかと比べものにならねえほどアルティメギルの目が光ってんだ、大っぴらに暴れでもすりゃあっという間に見つかっちまうぜ‼」
「……ではあなたも、この世界でわたくしたちと一緒に戦ってくださるのですか？　理由はどうあれ、以前に一度味方をしていただいていますもの」
　イエローが一いち縷るの期待を託すように、フェニックスギルディに問いかける。
　だが、おそらくそれは無理だ……。貴の三葉ノー・ブル・クラブとの戦いに割って入ったあの乱入だけ見れば、味方になってくれるようにも思えるが……その後、俺だけがフェニックスギルディの真意を聞いた。ツインテールの世界への拡散を悪と断じるこいつと、すんなりと相あい容いれるとは思えない。
　そういえばあの時は、多勢に無勢だとか、やり方が目茶苦茶だとか、理由があって戦いの場に姿を現していたな。美学というか、信念というか……こいつは自分の中に、一本筋の通った行動理念を持っているんだ。
「悪ぃが俺様は誰だれの味方でもねえ、正義の味方だ！　信念のままに戦うだけだぜ！」
「……！」
　自分の期待があえなく否定されたこと以上に、イエローは衝撃を受けいてるようだった。
　情報を得るためにか、あえて黙って聞いていたブルーが、堪たまらず声を上げた。
「あんたそもそも、どうやってこの世界に来たわけ⁉」

「そうですわ、まさかわたくしたちを追ってきたというんですの!?」
　あるいは、ダークグラスパーを首領の追撃から助けた時、後を尾けたか、だな……。
「――いいや、俺様もこの世界に辿たどり着くにはもう少し時間がかかるかと思ってたんだが……どうやら、こいつが導いてくれたらしくてな……！」
　フェニックスギルディはずっと握っていた手の平大のレリーフを、俺たちに見せつけた。
「ポニーテール属性のエンブレム、ですわ……」
　イエローの言うとおり、レリーフにはポニーテール属性のエンブレムが刻まれている。
　それを目にした瞬間、俺はまとったテイルギアの内側から鼓動が響く錯覚に襲われた。
「時空を超えて共鳴したようだぜ！　お前たちのその……テイルギアとな!!」
「何!?　どういうことだ！」
「俺様がこの世界に来た理由を教えてやるぜ。確かにテイルレッド、お前にまた会いてえってのが大きいが……それ以上に、親友の形見をもっとちゃんと拝んでおきたくてよ!!」
　形見……？　何のことだ、あいつは何で俺たちを見ながらそう口にした……!?
　フェニックスギルディは手にしていたレリーフを、炎と共に出現させた自分の武器・フェニックスラッシューターの銃身へと嵌はめ込んだ。
「それとよ。こっそり告げ口した形になったのは、俺様も後味が悪い。こっちもとっておきの秘密を見せてやるから、おあいこにしようぜ、テイルレッド!!」
　炎が猛烈な勢いで、フェニックスギルディの身体からだから噴き上が

る。
　雲にも届きそうな勢いで立ち昇った火炎は螺ら旋せんを描いて集束し、繭まゆ状にフェニックスギルディを取り巻いていく。
　胎動と呼ぶにはあまりにも暴力的な炎の蠢うごめきに、俺たち三人は目を奪われる。
　やがて繭が砕け、溶岩のように周囲に炎が噴き散り、中から予想だにしないシルエットが像を結んだ。
「っ、な……!!」
　少女が。人間の少女が、フェニックスギルディの作った繭の中から現れたのだ。
「――エレメリアンが……人間に……!?」
　奴やつの魂をそのまま形にしたかのような、超然とした輝きを放つポニーテール。
　どこかフェニックスギルディの面おも影かげを残す、絶対の自信を貼はり付けた瞳ひとみと、不敵な笑み。一糸纏まとわぬ裸身の中、炎を押し固めたような髪留めシユシユだけが、凛り々りしくポニーテールを彩っている。
　裸なことも意識の慮外に飛ぶほど、彼女が俺たちに与えた衝撃は大きかった。
「……な、何よ、またコスプレ!?　エレメリアンのくせに、裸の女になるなんて……!!」
「違いますわブルー、あれは、着ぐるみやホログラフではありません……。息吹を、鼓動を感じますわ……」
　イエローに否定されるまでもなく、ブルーも同じことに気づき、あえて軽薄にふるまっていたのかもしれない。
　灼しやく熱ねつの最中に感じる、人たる体温。吹き荒れる炎が耳じ朶だを打つ中、確かに聞こえる力強い胸の鼓動。あいつは正真正銘、俺た

ちと同じ人間になったんだ……!!
　それだけで圧倒され、身動き一つ取れずにいる俺たちに、フェニックスギルディは更なる追い打ちをかけた。
「これだけじゃねえ。言ったはずだぜ、おあいこにしようってな!!」
　炎が集束し、凝縮され、赤色の剣となって彼女の右手に収まる。
「それは――」
　レリーフを中心に、奴やつの武器が形を変えていく。
　そのフォルムは俺たちの……ツインテイルズのテイルギア、その武器とそっくりだ!!



「フェニックスラッシューター……こいつが、俺様の〝テイルブレス〟だ」
　これまでの戦いで、そしてこれからの戦いで──果たして俺たちツインテイルズは、今ほどの衝撃を受けることがあるだろうか。
　エレメリアンは名前すら知らないはずの、俺たちの、俺たちとトゥアールの心の結晶を、奴やつはいとも容易たやすく口にしたのだ。
　そして、その心の紡つむぎ出す、魂の言葉さえも──。

「テイル・オン!!」

　握り締め、突き出した剣から、閃せん光こうが迸ほとばしる。
　凜り々りしいポニーテールの少女の裸身を、眩まばゆき光が包んでいく。
　初めて自分が変身した時の昂こう揚ようを外から目撃したかのように、俺はスローモーションさながらにその一部始終を網膜に焼き付けていた。
　やがて、変身は完了し──ポニーテールを舞い上がらせながら、少女は大地に降り立った。
「そ、そんな……」
　狼狽うろたえる俺をあざ笑うかのように、白い歯が笑みを形作る。
　剛力とは無縁の細指が、気け高だかくポニーテールを掻かき上げる。
　素肌を覆うアンダースーツと、要所要所を守る紅あかい硬質のプロテクター。しかしそれらは、どこか鋭角的で、そして攻撃的だ。
　首からたなびく青いマフラーは、灼しやく熱ねつを超えた蒼あおき極炎を思わせる。
　背中には、フェニックスそのものの巨大な翼と、袈け裟さに伸びた鋭いウイングパーツ。

　そして変身という役目を終え、武器という新たな使命を担った紅の剣を、腰に叩たたきつけるようにかざす。刀身はウェストを覆うようにしなやかに伸長してベルトと化し、ポニーテール属性のエンブレムが刻まれたレリーフがバックルとなって、その細い腰を厳おごそかに包み込んだ。

　フェニックスギルディはその〝対等〟な姿を、俺達の前へと見せたのだ。

「空想装甲テイルギアは、ツインテールの専売特許じゃねえってことだぜ！」

　全異世界を探し回っても俺たちしかいないはずの、テイルギアをまとった姿を……。

『まさか、認識撹乱装置イマジンチャフ……エレメリアンが……!?』

　エレメリアンの反応を確認できなかった理由に思い至り、トゥアールが愕然としている。

　──それはつまり、目の前にある装甲が本物だと、制作者が認めたも同然だった。

「さあ、これで全てにおいて平等だ。いっちょう拳こぶしで語り合うとしようぜ、ツインテイルズ！　ポニーテールとツインテール、お互いの信念をよ!!」

キャラクター名鑑 028

スタッグギルディ

STAGGUILDY



DATA

身長：284㎝

体重：338㎏

属性力：恋愛(ラブ)属性

美の四心(ビー・ティフル・ハート)の科学担当で、ペイントソフトや液晶タブレットなどのイラストツール製作に定評がある。恋愛(ラブ)属性を持ち、「積極的な恋」を特に愛(め)でる。そのため健気に秘めた恋をよしとするビートルギルディとは当初馬が合わずに衝突を重ね、ついには戦艦を一隻大破させる大喧嘩を繰り広げた。その後、それぞれの恋の良さを認め、義兄弟の契りを交わし、以後彼の右腕を務める。美の四心は彼らを筆頭に「同じ属性」同士で認め合った朋友(ケース)が多い。

第三章　テイルギアＶＳテイルギア。

『テイルギア……そんな、どうしてエレメリアンが……!?』
　基地でもその俄にわかに信じがたい映像は余すことなく映し出されているのだろう、絶望的なまでに驚きよう愕がくの声を響かせるトゥアール。
　俺もブルーもイエローも、存在するはずのないもう一つのテイルギアを目まの当たりにし、魂を抜き取られたかのように呆ぼう然ぜんとしてしまっていた。
　背後から悲鳴のような声が聞こえた。ブルーの視線が女体化したフェニックスギルディの一点に集中している。その脳筋ポリシーに共感したからではない。フェニックスギルディの胸はアンダースーツでくまなく保護された上から、いわゆるアンダーカップブラのように下半分だけをプロテクターが覆っている。胸のシルエットが強調され、それがどんな強力な武器よりも苛か烈れつにブルーを攻め立てるのだ。
「……何よあれ、エレメリアンが巨乳になるなんて！　反則！　退場よ!!」
　……ブルーだけ、あいつを見て呆然としてた理由が俺たちと違うんじゃないだろうか……。
　だが、それを見たおかげでトゥアールも幾分か調子を取り戻したようだ。
『国際ルールに則のつとってレッドカードなのは、愛あい香かさんの胸です。Ｂカップ以上は全て巨乳に見えるかもしれませんが、あれぐらい年とし頃ごろの女の子なら普通ですよププーフォフォフォフォ』
　通信でトゥアール主審が選手の抗議を半笑いで撥はね除のける。
　レッドカードを受けた選手が、残った己おのがスポーツマンシップを

場外まで蹴けり飛ばし、『試合後に主審を血祭りに上げよう』と画策しているが、今はそれどころではなかった。
「女に胸があるのが当たり前の世界なんてものがあったら、このあたしが壊してやるわ」
　今俺は、幼おさな馴な染じみが「地球を滅ぼします」と宣言する瞬間に立ち会ってしまったのだろうか。
「トゥアール……あいつがまとっているのは、本当にテイルギアなのか⁉」
　俺にはまだ、目の前の光景が現実とは信じられない。
『……わかりません……。ただ、以前お話しした通り、エレメリアンの技術力は底知れません。これまでツインテイルズと戦ったデータから、模も倣ほう品を作り出したのかも……』
　特訓してブルーの弱点を探っていた奴やつらは、確かにそれまでの多くの戦闘経験を基にしていただろう。しかし、フェニックスギルディと俺たちは直接の戦闘経験は一度もない。
　唯一こいつと真っ向から戦ったダークグラスパー──テイルブラックのグラスギアがテイルギアのコピーな以上、その一戦だけで製作に十分なデータが取れたとは思えないが……。
　テイルギアに対抗して作った〝兵器〟にしては、あまりにもテイルギアに似過ぎている。
『とにかく、気をつけてください総そう二じ様！　人間の姿になったことを免めん罪ざい符ふに、おぞましいセクハラをしてくるかもしれません……防御は口と胸とＶラインを重点的に‼』
「……え、Ｖラインってどこだ……⁉」
　ツインテールなら、ゆるやかな逆Ｖ字を描いていると言えなくもないが……。
「フェニックスギルディ……人間の姿になったのは何な故ぜですの？

あなたたちエレメリアンは元々、テイルギアをまとったわたくしたちと同じだけの力を持っている。それなのに、わざわざ人間の姿になって、その上で強化装甲をまとう意図がわかりませんわ……『にせツインテイルズ』になるつもりですの!?」
　どこか気さくなフェニックスギルディ相手だからか、イエローも素直に疑問をぶつける。
　その通りだ。エレメリアンの姿で使える兵器を作れば、それが一番効果的じゃないのか。
　ヒーローもののお約束だから言ったのだろうが、イエローの「偽者」は的を射ているのかもしれない。あの姿で世界を混乱させることが目的なのだとしたら、合が点てんがいく。
「エレメリアンが、〝停滞〟した生命体だって思い込んでりゃあそうなる。俺様たちにだって、望みはあるし、夢はある」
　自じ嘲ちようというほどの後ろめたさもなく、まるで少年が高らかに夢を謳うたうように、フェニックスギルディは返答した。
「例えば、ポニーテールの似合う姿になりたい……ってな。一番シンプルな変身願望じゃねえか！」
　俺は心臓を摑つかまれたような悪お寒かんに襲われ、よろめいた。
　ひどくわかりやすいはずのその理由が、取り返しのつかない奈な落らくのような錯覚に襲われて。
　シンプルな変身願望。似合う性別すがた。それは俺と――。
　頭を振り、不吉な考えを振り切る。
　しかし、フェニックスギルディが男から女に変身する力を持っていたことを知った今、初めてこいつと会ったときからずっと謎なぞだったことが、ようやく腑ふに落ちた。
「お前が俺を男だって見破ったのは、そういう絡から繰くりだったのか……！　俺と同じ、男から女へ変身する戦士だから……!!」

　男の娘属性ガールズボーイや性転換属性トランスセクシヤルのエレメリアンどころの脅威じゃない。こいつは身を以もつて、男から女に変身する想像力ビジヨンがあった。初めから認識撹乱装置イマジンチヤフの弱点にストライクだったってわけか。
「正解──と言いたいところだが、テイルレッド……お前は変身を解除すりゃまた男として生活できんだろ？　だが、俺様は違うぜ。一度この最終闘体に到達した時から、俺様は完全に女になった。エレメリアンの姿に戻ってもな！　ポニーテールに捧げた覚悟が違うぜ……‼」
　じゃあ、ロエルたちの世界で会ったあの時、もうこいつは女性型のエレメリアンだったっていうのか⁉　それで臆おく面めんもなく、俺に惚ほれたとか言って来やがったのか……。
「さっきの話だがよ、黄色の嬢ちゃん。俺様は別に科学畑じゃねえからな、エレメリアン用にギアをチューンしなかったんじゃなく、できなかったってだけさ！」
「どういうことですの⁉」
「偽者に成りすます技術すらねえよ！　……本物になっちまう方が簡単だ‼」
　左腕の手甲……あれも属性玉変換機構エレメリーシヨンなのだろうか、それとも別の装備なのだろうか……それを撫なでながら、フェニックスギルディは言う。
「これはダチに託された俺様のテイルギア！　テイルギア・ＴＹＰＥ-Ｐだ‼」
「ＴＹＰＥ-Ｐ……。Ｐｏｎｙｔａｉｌと、Ｐｈｏｅｎｉｘをかけてるのかっ！」
　もう一つの空想装甲テイルギア。その名前に込められた意味を、俺はすぐに察した。
「おお、いい線いってるじゃねえか。こだわりをわかってもらえると嬉

うれしいよな！」
　チッ、チッ、と勿もつ体たいつけて指を振り、フェニックスギルディはウインクをした。
「だが、もう一つ、肝心なのが抜けてるぜ」
「何？」
「その二つに加えてこいつは──Ｐｒｏｔｏｔｙｐｅのテイルギア。ま、お前らのテイルギアの御先祖様ってところかな」
『プロトタイプですって⁉　テイルギアは私が作ったものですよ⁉』
　通信でトゥアールが異を唱える。当然のことだ。テイルギアを作ったのはトゥアールだ。技術そのものはアルティメギルから与えられたものでも、それをテイルギアという最強の武装に昇華させたのは、他の誰だれでもないトゥアールなのだから。
　グラスギアのように複製物コピーというならまだしも、元祖を名乗られるのは我慢ならないだろう。
　俺が困惑混じりにブレイザーブレイドを抜いたことが、ゴングとなった。
「──さてと、長々話しても時間がもったいねえ。そろそろいくぜっ、テイルレッドォ‼」
　フェニックスギルディは嬉き々きとして叫び、一足飛びで距離を詰めてくる。
　空を赤色に割り迫り来る剣をすんでのところで、俺も頭上にブレイザーブレイドを構え受け止める。どう見ても挨あい拶さつ代わりの気軽な一撃だろうに……あと少しでも気を抜いていたら、受け止めた剣を弾かれてそのまま身体からだを真っ二つにされるかと感じたほどだ。
「へへっ……あの時はできなかったが、やっぱ手っ取り早いのはこっちだよな！　意見がぶつかった時は、拳こぶしと拳をぶつけるのが一番だ‼」

「っ……!!」
　こいつは一体、どこまで本気なんだ。
　ツインテール属性を奪うわけでもない。俺たちの味方でもない。無邪気なまでに純粋に、ただ俺と力比べがしたいだけと言わんばかりだ。
「その意見には賛同するけどね――これで終わりにしてやるわよ！」
　いつの間にかフェニックスギルディの死角に回り込んだブルーが、逆手に持ったウェイブランスを空中から突き立てようとしていた。
「思いきりのいい姉ちゃんだ!!」
　フェニックスギルディの首元から垂れ下がっていた二本の青いマフラーが、不死鳥の尾を思わせるしなやかな動きで、意志を持ったようにブルーの眼前へ迫る。
「えっ!?」
　紙のようにしなやかにウェイブランスの穂先に巻き付き、突きを完全に止めると、そのまま力任せに柄を握ったままのブルーごと振り回し始めた。
「きゃあああっ!?」
　大上段に持ち上げたブルーを、地面に強したたかに叩たたきつける。俺は取り乱して叫んだ。
「ブルー！」
「こ、こいつ、何てバカ力よ……!!」
　間髪容れず、ヴォルティックブラスターを斉射するイエロー。
「自動防御の装備があるのでしたら、防げないほど撃つまでですわ！」
　しかしフェニックスギルディは先ほどのマフラーを二本とも振り回すように前面に展開し、雷の弾丸のことごとくを弾き落とした。
「テイルイエロー、あんたは攻撃にちっと迷いがあるな。手足を狙ねらってどうする？　テイルブルーは迷わず俺様の脳天をブチ抜きに来たぜ!!」

いや、そっちの方が駄目だろどう考えても……。
その脳天をブチ抜きにいった人が、俺に意外な提案をしてきた。
「……フュージョニックバスター。あいつにならいけるでしょ」
イエローがミサイルやレーザーを発射しているが、やはりあのマフラーの防御の前に全てを阻まれていた。ついに完全脱衣形態フルブラストモードとなり、激しい爆音が轟とどろく中、俺はブルーの提案に疑問を唱える。
「お前、前は人間に使うの嫌がってたじゃないか⁉」
「あいつはエレメリアンよ。羞しゆう恥ち心しんなんて持ち合わせちゃいないでしょ。元はエレメリアンなんだから、武装がなくなればフェニックスギルディの姿に戻らざるを得ないでしょ」
確かに武装を失えば、人間の姿で戦う理由はないはずだ。元がエレメリアンでも、人間そのものな奴相手に、剣や槍を振り回すわけにもいかない。……振り回してた仲間がいるけど……。
「わかった、いくぞイエロー！　属性玉エレメーラオーブ――三つ編み属性トライブライド‼」
三つ編み属性トライブライドの効果でイエローの武装が強制脱衣パージされ、宙に浮く。
「はふぅん、いきなりですわっ‼」
発射途中の弾丸が無軌道に空を舞い、花火のように弾ける中、アーマーが合体していった。
「ほおう……」
くねくねしているイエローの上で完成した合身巨大砲ユナイトウエポンを見て、フェニックスギルディがギラリと目を光らせた。
「――隙すきありぃっ‼」
背の翼パーツに走ったラインが光ったかと思うと、矢のように勢いよく跳躍し、滞空していた合身巨大砲ユナイトウエポンにしがみついた。

後から飛来したブレイザーブレイドとウェイブランスが合体しようとするが、それぞれ刃やいばの腹を蹴って弾いてしまう。
「どうどう！」
　釣り上げた大魚を逞たくましい胸板に掻かき抱く漁師のように、フェニックスギルディは合身巨大砲ユナイトウエポンを抱えたまま着地した。
「あああああっ合身巨大砲ユナイトウエポンがさらわれましたわああああああああああああああ!!」
　心なしか、合身巨大砲ユナイトウエポンも逃のがれようとピチピチもがいているように見える。
　俺はしてやったりというドヤ顔のフェニックスギルディに、怒りのまま指を突きつけた。
「何が隙ありだ！　ダークグラスパーだって、武器が合体して発射するまでは待ってくれていたぞ！　お前のかざす正義ってのは、そんなもんか!!」
　普通に考えれば敵の隙を突くのは真っ当なこと、理不尽なことを言っているのは俺の方だが、奴やつは背中に稲妻が落ちたようにショックを受けていた。
「ぬぐぐ……俺様としたことが！　すまねえテイルレッド、お前の言う通りだ!!」
　口上を大事にするやつなのでこう言えば効くかもと考えたのだが、思った以上の効果だ。
　ペシッ、と放られた合身巨大砲ユナイトウエポンは、飼い主に駆け寄る犬のようにキャンキャンと飛び跳ねてイエローの元へと戻ると分離し、再着衣リバースされた。ペットは飼い主に似るというが……。
　俺はブレイザーブレイドを構え、ブルーとイエローに向かって叫んだ。

「ブルー、イエロー、完全解放ブレイクレリーズだ！　フュージョニックバスターが駄目なら、三人分のオーラピラーでふん縛る!!」
「はあ、はあ、あ、ふぅ……し、縛る……？　わたくしをですの……？」
　まずい、着脱を繰り返しすぎてイエローがグロッキーだ、だいぶはあはあしている!!
「おやすみなさいですわ……」
「わ───待て！　何な故ぜ寝る!?」
　おもむろに自分の顔面を俺の腋わきの下に突っ込んできたイエローを抱き留め、喝を入れる。
「しっかりしろイエロー！　フェニックスギルディはツインテールを消そうとするくせに正義の味方を名乗る奴だ、お前が本当の正義の味方の強さを見せてやれ!!」
「───は、はい！　わかりましたわ!!」
「もういい!?　いくわよ!!」
　多少じれていたブルーに急せかされ、三角形を描くようにフェニックスギルディを取り囲む。
「「「完全解放ブレイクレリーズ」」」
　迸ほとばしった灼しやく熱ねつと水流が円柱となってフェニックスギルディを取り巻き、ダメ押しとばかりに空から降り注いだ合身巨大砲ユナイトウエポンの爆撃が、雷の結界を形成する。
　三重の螺ら旋せんとなったオーラピラーが、かつてない強固さでフェニックスギルディを拘束した。
「……これはダークグラスパーの姉ちゃんは使ってなかったな……テイルギア特有の技か!?」
　しかし、その渾身の結界の中で、すでにフェニックスギルディは動き始めていた。むしろ、オーラピラーの方が軋きしみを上げている。

「迷ってらんないわ……！　エグゼキュートウェイブ────!!」
　拘束という千載一遇のチャンスを破られるという焦燥からか、ブルーはフェニックスギルディ目掛け必殺の槍そう撃げきを投は擲なってしまった。
「やっぱブルーは来るか！　気持ちがいいくらい遠慮がねえ!!」
　フェニックスギルディが腰のベルトに手を触れると、それは再び銃剣武器・フェニックスラッシューターに変形。都合三つ分のオーラピラーを、ただの一いつ閃せんで両断した。
　行き場を失ったエネルギーが、フェニックスギルディの周囲で炸さく裂れつする。そして喉のど元もとにまで迫っていたエグゼキュートウェイブを、無造作な斬きり上げで打ち払ってしまった。
「嘘うそっ……!!」
　大波が返すように反転したエグゼキュートウェイブのエネルギーは、立ち尽くすブルーを呑のみ込んでしまった。
「あぐっ……！」
「ブルー！」
　幸い技をそのまま反射されたのではない、ブルーも無事なようだが……ショックは大きいだろう。修行したエレメリアンたちと違い、技の隙すきを見切るのではなく、力任せに破られたのだ。
　ウェイブランスが弧を描き地面に突き立った瞬間、天で雷光が轟とどろいた。
「ヴォルティックジャッジメントオオオオ──────────────ッ!!」
　イエローの必殺の蹴撃が、フェニックスギルディの離脱と迎撃の間かん隙げきを捉えた。
「ほおう、蹴り技か！　俺様もそいつが得意でよ!!」
　しかし避けるどころか、フェニックスギルディは受けて立つとばかり

に背の翼を展開し、炎を吹き上げて跳躍した。
「バーニングフェニックスキ――――――――――――――――ック!!」
　雷光と灼しやく熱ねつの蹴撃が天で激突し、スパークする。
　視界を灼やく激しい閃熱の中、空中で拮きつ抗こうする二人。
「うおらあっ!!」
　しかし、フェニックスギルディが裂れつ帛ぱくの気合いと共にさらに右足を蹴り抜くと、一気に均衡が崩れ、イエローは大きく跳ね飛ばされてしまった。
「きゃあああああああああああああっ!!」
　脱衣パージ後僅わずかに残る右足のブーツ状のアーマーも完全に砕け、きりもみしながら落下する。地面に叩たたきつけられる寸前で、俺はイエローを受け止めた。
「はあ、はあ、も、申し訳ありません、わたくしが下に敷かれなければなりませんのに……」
　イエローが苦悶の声を上げている。自分自身が弾丸となって射出される性質上、技を破られるダメージはイエローの方が甚大だ。
　イエローを地面に横たえ、俺はプログレスバレッターをフォースリヴォンに合体させた。
「フェニックスギルディ――――――――――ッ!!」
　ライザーチェインに形態変化チエインカスタムし、ブレイザーブレイドツインを両手にフェニックスギルディへと斬きりかかる。
「パワーアップしたのか、テイルレッド!?　そうこなくっちゃな!!」
　互いの武器が打ち合った瞬間、俺は剣を手放し、すかさずフォーラーチェインへと変化。
　ブレイドを宙に置き去りにする高速移動でフェニックスギルディの背後へと回り込む。プログレスバレッターを取り外して、ブーメラン状武器・スラッシュモードへと変形させた。

あの何の変哲もないマフラーがこいつの攻防の要かなめだ、それを斬ざん裂れつすれば――!!
「……なるほど、結び変え……それがお前の目指した新しい強さってわけか。だがな!!」
完全に虚をついたはずの俺の一撃―
「目移りはよくねえんじゃねえかっ!?」
しかしそれはまたしても、マフラーの自動防御に阻まれた。
「くっ！」
交差した腕から身体からだへ強い衝撃が突き抜け、俺は大きく吹き飛ばされる。あんなにヒラヒラしてるのに、何て力だ！
「この結び位置！　この角度！　この長さ！　俺様のポニーテールは、これがベストフォーマットだ！　だからこそ、こいつに情熱を注ぎ、極めた！」
フェニックスギルディはポニーテールを掬すくい、俺たちに見せつけるように眼前に掲げた。
「結び位置を変えてえってんなら、その全てを同じくらい極めねえとな。そうだろ!?」
ダメージに程度の差はあれ、ちょうど三人全てを迎撃したところで、フェニックスギルディはスラッシューターをベルトに戻して装着した。
「難しいもんだ。テイルギアの力を見極めたくても、肝心のお前がこの姿の俺様には全力を出せねえときてる。名だたるエレメリアンたちを倒してきた、底力を見せて欲しかったんだがな」
フェニックスギルディはやおら天を仰ぎ、不敵に笑った。
「仲間がピンチでも後方支援に徹したままってことは……戦士は引退したのかい？　俺様は、テイルレッドと同じくらい、あんたに会いたかったんだ!!」
勇ましく天に指を突きつけるフェニックスギルディ。誰だれを指名し

ているかは明白だった。
『っ……!!』
　通信越しに、トゥアールが息を呑のむ気配がした。
「……俺様の親友が、あんた自身のこともベタ褒ぼめしてたぜ。人間では最高の天才だってよ。覚えてねえか？　白衣みてえに翼で身体をくるんだ、白馬のエレメリアンを！」
『なっ……何な故ぜそれを!!』
　トゥアールの動揺が俺たちにも伝わったらしく、フェニックスギルディは確信を得たように笑う。
「ツインテイルズの科学担当サポーターさん……顔を見せてくれねえかな。本当にそれだけだ！　俺様の親友が認めたツインテールを、この目で見てみてえんだ!!」
　友人をドライブにでも誘うかのような気軽な口調で、空に向かい語りかける。
　俺は激情に駆られ、再び天を指さそうとしたフェニックスギルディの手首を掴つかんだ。
「ん……!?」
「ツインテールを悪だとまで言ったお前が、今度は興味半分でツインテールを見たいだと!?　お前こそ気軽に目移りしてるじゃないか！　それだけは絶対にさせないぞ!!」
　こいつは本当にただの好奇心からテイルギアの製作者を知りたがっているのかもしれない。純粋に、何の嫌味もなく、親友が惹ひかれたというツインテールを見ようとしているのだろう。
　それでも──トゥアールに気安くツインテールを見せろと言ったこいつを、俺は許せない。
　トゥアールがツインテールに託した思いも、願いも知らず、土足で心を踏み荒らすような真ま似ねをさせてたまるか!!

　摑んだ手首のパーツから火花が散る。フェニックスギルディはほおう、と感嘆を漏もらした。
「──何の気なしに言ったつもりだったが、俺様はお前とお仲間さんの琴きん線せんに触れちまったらしいな……。テイルレッド、お前のツインテールが熱く燃え盛っているのを感じるぜ!!」
　俺が拘束を解くと、未だに放電している手首のパーツを見つめながら、
「まだまだ不安定だな。半分根性で動かしてるからよ、そろそろ変身の限界みてえだ」
　もう戦意はない、とばかりにギアを解除するフェニックスギルディ。炎の繭まゆから出てきたと同じ、神秘的な裸身を俺たちの前に惜しげもなく晒さらす。
「……ちょっ……あんた……服!!」
「おう、そうだったな」
　ブルーに指摘され、フェニックスギルディは炎のドレスを出現させ、身に纏まとった。
　粗そ野やな男口調と美しいポニーテール、そして気品さえ感じるドレスとが調和し、フェニックスギルディを一層魅力的に映していた。
「俺様も色々急ぎすぎた……ツインテイルズとの決着も、その少女と会うのも、また機を見てからにさせてもらうぜ！　今日はお前の熱さにまた触れられただけで満足だ、テイルレッド!!」
「フェニックスギルディ……お前は、何が目的なんだ……まさか本気で俺たちの力を見極めるだの、わけのわからねえこと言うんじゃないだろうな!?」
「───本気だぜ？　言っただろ、お前らの纏うテイルギアには……俺様の親ダ友チの遺志もこもっているんでな!!」
　馬ば鹿かな、本気でそれだけのために、こいつ自身が侵攻部隊に見つ

かる危険性を犯してまで俺たちの世界に⁉

「ところで、いい加減この姿でフェニックスギルディってのも味気ねえ。人間の姿の時の名前があるから、そう呼んでくれねえか？」

　フェニックスギルディは親指で自分の胸を示し、

「ユノだ‼」

　自信たっぷりに名乗った。

「ユノ……？」

「この姿の俺様の名前さ。そう名乗ろうって決めてた！　……難しい字で書くらしいぜ、結いわ翼ばね唯ゆ乃の、ってな」

　指の動きで、だいたいどんな漢字かはわかった。

　イワバネ……ユノ……結翼唯乃。まるで、俺たち日本人のような名前だ。

「異世界っぽい名前じゃないわね、どっから拾ってきたのよ……！」

　敵が武装解除しても、未いまだに警戒心を解いていないブルーが、皮肉っぽく問いかける。

　俺が真意を問おうとする前に──どこか寂しげに笑い、唯乃は背を向ける。

「次こそは全力でやり合いてえもんだな！　ちゃあんと信念とツインテールを磨いておきな！　特に……あんただ！」

　フェニックスギルディが指差したのは、俺───ではなく、イエローだった。

「わ、わたくしが⁉」

「キックを撃ち合ってわかったぜ。あんたは全然、ツインテールを使いこなせてねえな！　途中で俺様が威力を弱めなかったら、危うく身体からだをバラバラにしちまってたかもしれねえ‼」

　あの激突の瞬間──途中で、手加減したっていうのか⁉

「解げせねえな。ツインテールは見事なもんなのによ。吹っ切れてねえ

んじゃねえのか？　レッドはあんたに正義の味方を教えてやれとか言ってたみてえだが……俺様に言わせりゃ、あんたこそ子供のヒーローごっこの延長に過ぎねえ。信念が感じられねえ!!」
　何も言い返さず、イエローは呆ぼう然ぜんとして立ち尽くしていた。
「……お前の正義を見つけたら、もう一度戦おうぜテイルイエロー！　正義の味方同士な……！　それじゃあな、ツインテイルズ!!」
　答えを聞けないままに、フェニックスギルディは空の彼方へ飛び去っていってしまった。
「いちいち言うことが思わせぶりな奴やつねっ……イエローも、気にしちゃ駄目だからね！」
「え、ええ。もちろんですわ」
　ブルーは呆あきれているが、俺にはあいつが格好をつけるためにそう口走ったとは思えなかった。
　一度弱体化の不安を経験した俺だから、わかるのかもしれない。
　イエローの力が、本調子では無かったことを。
　フェニックスギルディは、それを見抜いたっていうのか？
　今までエレメリアンは俺たちと戦っても、狙ねらいはツインテール属性だけだった。変身前の人間が誰だれかなんて全く興味を示さなかった。だが、フェニックスギルディはツインテイルズの頭脳ブレーンである、トゥアールにまで狙いを定め始めた。この差は大きいぞ……。

◇

　コミケの戦利品の段ボールもすっかりと片づいた自室で、ビートルギルディは一人、絵画に勤しんでいた。
　壁にはすでに、テイルブルー、そしてテイルブラックのＣＧイラストが飾られている。

　いずれも、本人と見まごうほどに美麗な、入魂の一枚だった。
「兄さん……ツインテイルズの絵を描いているのかい？」
　入室してきたスタッグギルディが、今にも動きだしそうなイラストを見て尋ねる。
「ダークグラスパー様は一度、ジャージ姿でお腹なかをぼりぼりと掻かきながら廊下を歩いているのを見たことがある。おそらくあれが、飾らぬ普段の彼女なのだろう。それを見ているからこそ、私はこうして彼女のイラストにも魂を吹き込むことができた」
　部下の前では相当気を遣ってはいたようだが、イースナも気が緩んだ一瞬をうっかりウォッチされてしまっていたようだ。
「テイルブルーは、普段も戦闘時も何ら変わりない。荒々しさと美しさを兼ね備えた少女なのだろう。これもやはり、すんなりとイラストに起こすことができた」
　しかし一方で、テイルレッド、テイルイエローのイラストは何度も描き直し、そして未だに完成を見ていないようで、多くがラフ画のままだ。ビートルギルディにあるまじき迷い線の多さは、彼の心の惑いを如実に示していた。
　タブレットにペンを寝かせるビートルギルディ。何度も描かき殴ったラフの束を手に取り、一枚一枚検あらためていく。
「……だが、テイルレッドとテイルイエローは、何度描いても上う手まくゆかぬ。部下に指南をしておいて何だが、私が本気で描こうとするとこのざまだ……。私には彼女たちにはもう一つ、別の顔があるように思えてならぬのだ」
「どうしてだい？　テイルレッドも普段は天てん真しん爛らん漫まんな幼な子だろうし……テイルイエローもきっと露出狂だよ」
　甘い声でシンプルな暴言を吐くスタッグギルディ。
「戦闘中の映像を思い描き、構図を決める……しかし、何な故ぜかデッ

サンが狂うのだ。特に瞳ひとみがな……」
　ビートルギルディがめくっていく紙に、スタッグギルディが横から目を通す限りでは、ラフ画でも十分にデッサンは整っているように見える。コンマーミリの領域を攻めているのかもしれないが、むしろ構図を大胆に崩すことも厭いとわないビートルギルディにしては弱気な発言だ。
「彼女たちはもしや、普段は別の視点で世界を見ているのではないだろうか……」
「考えすぎだよ。テイルレッドはあれだけの可愛かわいさとツインテールを持っているんだ、底知れない何かがあるのかもしれない……けど、テイルイエローは兄さんが気にするほどのポテンシャルはないよ。僕はこの目で確認してきたからね」
　スタッグギルディは、自分がブルーとイエローを足止めしていた時の映像を確認してもらおうと、部屋のスクリーンを起動させ、大ホールで流していた戦闘中の映像を投影した。
「その映像は私も確認した……だからこそ、気になってな」
「どうしてだい？」
「お前がテイルブルーだけに恋心を告げたことで、明らかに動揺している……つまり彼女もまた、自分では恋をしていると思っていたのだ」
「あ……」
　今度ばかりはスタッグギルディも意見に納得したようだ。
　普段、スクリーンに映るテイルレッドの映像を礼讃し歓喜している一般兵は、ツインテールの躍動や自分たちの愛する嗜し好こうを追いこそすれ、彼女たちの微妙な仕草までは目を向けまい。
　恋愛属性ラブを持つ義兄弟だからこそ気づける、心の機微だった。
「むしろ、お前がテイルイエローの恋を推し進めてしまったやもしれぬな。フッ……」

　スタッグギルディは苦笑し、
「兄さん……まるで、テイルイエローに恋をしているみたいだね」
「案外そうなのかもな」
　珍しく冗談で返されてスタッグギルディは驚いたが、多少苦い表情になり、
「エレメリアンが人間に恋をするなんて、あり得ないよ……」
　自みずからの甲殻にテイルレッドをプリントしようという未来を顧みぬ計画を立てる者がいるほど、皆テイルレッドに夢中だが、それは恋とは言わない。
「いや、一体だけ知っている」
「え……？」
「知っていた、と言うべきだが……本当の意味で人間に恋をしたエレメリアンは、確かにいた。私がこの目で見たのだからな」
　それだけ言い残し、ビートルギルディはイラスト作業に没頭し始めた。
　二本角を不安そうに震ふるわせながら、スタッグギルディは言葉なく退室するのだった……。

◇

「悔しい————————————————っ!!」

　愛あい香かの無情な叫びが木霊こだまするツインテール部室で、俺と慧え理り那なは肩を落としていた。
　理由は言わずもがな、フェニックスギルディ——いや、結いわ翼ばね唯ゆ乃のに俺たちツインテイルズが完敗したことだ。
　今回の戦闘と類似したケースを思い返す。同じ人間で、ギア装着者

で、初戦闘の際には俺たちと力の差があった、ダークグラスパー。作戦行動優先でまともに対戦したことは数えるほどしかなかった。そして、俺たち三人が力を合わせることで、何とか対抗もできたのだ。

　だが……テイルギアを擁するフェニックスギルディの力は、これまでの敵とは次元が違う。

「あれが、ポニーテール属性を極めたやつの力なのか……」

　机の上で拳こぶしを握る。愛香のように叫びこそしないが、悔しいのは俺も同じだ。

　トゥアールが、口を尖とがらせて愛香に流し目を送る。

「全く、戦闘力だけが取り柄の愛香さんがボロ負けするなんて、不ふ甲が斐いない！」

「あたしだって、人形や着ぐるみはともかく本当の人間相手になら躊躇ためらいもするわよ!!」

　その対戦相手がどこをブチ抜かれそうだったって証言したか、言げん質ち取ってるんだが……。

「な、何笑ってるのそーじ」

「いや。トゥアールも悔しく思ってるのが嬉うれしくてさ。愛香のこと、信じてるんだな。守ってくれるって。トゥアールだって、不安なはずなのに……」

　一見いつも喧けん嘩かしてばかりに見えるけど、トゥアールは、誰だれよりも愛あい香かの強さを信頼してるんだ。だから、敵に負けたことが我わがことのように悔しい。

　不謹慎かもしれないけど、これからの不安が、二人を見て和やわらいだように思う。

「「なっ……」」

　愛香とトゥアールは、互いを見合わせて顔を真まっ赤かにし。一度俺に向き直った後、再び今度は息のかかるような距離で睨にらみ合った。

そしてトゥアールは、机を飛び越えて俺に覆い被かぶさってきた。
「キシャ――――――――オッパ――――――――――――――イ!!」
怪け鳥ちよう音おんを発して俺をその豊満な胸に抱き込むトゥアール。
「むぶっ……ちょ……！」
「いけません、いけませんよ総そう二じ様！　脳内百ゆ合りカップリングを嗜たしなむのも殿方の甲か斐い性しようかもしれませんが、このザコ蛮族だけはやめて下さい！　慧え理り那なさんとならぬちゃぬちゃしてもいいですから!!」
「こっちこそ願い下げじゃアホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
怪鳥を葬るは天空の荒鷲わし。急降下して獲物を捕らえる鋭い爪つめのように両足でトゥアールの首を挟む愛香。その体勢で回転し床に頭を叩たたきつける技・フランケンシュタイナーが炸裂した。
しかも一回では終わらず、体勢を維持したままバク宙を連続で行うことで技を延々と繰り返し、トゥアールにその都つ度どダメージを累積させていく。
トゥアールはといえば、ダメージよりもさっき俺が言ったことの方が気になるのか、「絶対違います」と連呼していた。
やがて、頭の痕あとがいくつも並び切り取り線みたいになったリノリウムの床から立ち上がり、
「とにかく、テイルギアの性能を上げる方法を考えます……。今は見極めるだけと言っていますが、フェニックスギルディがロリちゃんたちの世界のようにツインテールを封殺してポニーテールを広めようとしだしたら一大事です」
「……いや……。同じ条件で俺たちがあいつに勝てない理由はただ一つ。ギアの性能で負けたんじゃない。あいつのポニーテール属性に、俺

たちのツインテール属性が負けたんだ」
　噛かみしめるように、そう呟つぶやく。
「俺は、みんなの心を守りたいってのとは別に、『ツインテールを好きな気持ちなら負けないぞ』って奮い立ってエレメリアンと戦ってきた。だから、今まで負けることはなかった。……俺が、俺たちが負けるっていうのは……好きなものへの気持ちで負けるってことと同じなんだ。テイルギアは、心の力が強さになる装甲なんだから」
　俺の方が、ツインテールを好きなんだぜ。
　いいや、俺様の方が、ポニーテールを好きだ。
　子供の意地の張り合いにも似た、他た愛わいのない好きくらべ。
　本来、同一のものを好きでない限り比べることもできないはずの〝心のタイマン〟で、俺は負けたんだ……。
　だが……だからこそ俺は、心ここ地ちよかった。
「変な話だけど、清すが々すがしい悔しさっていうか……決定的に違うのは……俺は、テイルギアをまとって初めてツインテールになれるけど、あいつはテイルギアに頼らずにエレメリアンの姿からポニーテールの姿に変身していた。それだけ真まっ直すぐ、ポニーテールだけを心に描き続けたからだと思う」
「……ただ戦闘力が強くなればその属性力エレメーラを体現する女性に変身できるのでしたら、今まで出てきていてもおかしくなかったはずですものね……」
　慧え理り那なの言葉に頷うなずく。慧理那は知らない戦いだが、ツインテールに限界まで近付いた戦士……あんなに強かったドラグギルディでさえ、人間の女の子にはなれなかったんだもんな。
「ちょっとそーじ！　あんたまさか、ツインテール属性を強くして、テイルギア無しで女になるって言い出すんじゃないでしょうね⁉」
　俺がフェニックスギルディを羨うらやんでいると思ったのか、愛あい

香かがすごい剣幕で詰め寄ってきた。
「それじゃソーラになった時と同じだろ？　俺が負けたくないのは、ツインテールを好きだっていう気持ちさ。特に、ポニーテールの方がツインテールより優れているなんて言う、それぞれの髪の平等を認めないあいつには、絶対に負けられない!!」
　馬ば鹿かなことを言ったものだが……愛香と慧理那とトゥアールは、笑顔で頷いてくれた。
　愛香は腰の前で手を擦こすり合わせてもじもじとしながら、俺を見つめてきた。
「そ、そーじはそれでいいと思う。うん」
「何、雌めすの顔になってるんですか!?」
　すかさず愛香がトゥアールに制裁を加えんとするが、トゥアールはジト目で重ねる。
「おやあ、またフランケンシュタイナーなんかして、大丈夫ですか!?　今のパンツの状態が私にばれるかもしれませんよ!!」
「っ……！」
　愛香が動きを止める。気にせず技を繰り出すかと思ったが、何な故ぜ思いとどまったのだろう。
「ってわけだから、トゥアール。テイルギアに関しては大丈夫。あいつがまた何かするようなら、俺たちが強くなって次こそ止めてやる」
　仮にギアの性能があちらが上だったとしても、それは負ける言い訳にはならない。
　要は、俺たちの心がもっと強くなればいいんだ。
「約束したもんな、トゥアール。俺は俺。テイルレッドはテイルレッド。俺は、変身する時だけツインテールになるんだ。トゥアールに託されたこのツインテール属性で」
　トゥアールは何故かとろけたような表情になり、俺ににじり寄って来

た。
「総そう二じ様……あの、私今世界で一番ヤりやすい女だと思うので、もう愛あい香かさんがいても気にせず……」
　トゥアールが鼻息荒く、白衣を床に落とした。そして制服のシャツに手をかけた瞬間、愛香より先に飛び出したのは……慧え理り那なだった。
　トゥアールに抱きつき、脱がせまいと抵抗しているように見える。この前のイースナと同じように風紀的指導をしているのならわかるのだが、何な故ぜか理由が別にあるような気がする。
「ふぇっ……わ、わたくしっ……⁉」
　数秒おいて、何より本人が戸惑っていた。
　混乱したのか、さらに慧理那もトゥアールを真ま似ねするようにシャツのボタンを外していく。
「どうしたんですか慧理那さん⁉　可愛かわいすぎてスカートの中に仕舞いますよ⁉」
　制服のスカートのジッパーを下ろし始めたトゥアールを、愛香は渾身の力で投とう擲てき。
　ピンボールのように部屋の中を跳ね回る大惨事となった。
「慧理那、落ち着け！　クーラーは効いてるぞ⁉」
「だ、大丈夫ですわ……。ただこの夏、厳しい戦闘が続いたからでしょうか……。テイルイエローの時のように、観み束つか君の前で脱ぎたいという思いが増大しているようですわ……」
　慧理那はよろけたように俺にもたれかかってきた。顔が真まっ赤かだ。本人の言う通り、戦いで疲れているのか……⁉
「やはり、激しい戦闘による後遺症が身体からだを蝕むしばんでいるのですわ……。今こうしていても、脱ぎたくなって……」
「大丈夫か⁉」

後遺症というか、どんどん変身前後の境界線がなくなってきているのは、前々から兆候はあったが……。
「わたくし、負けません！　変身の代償があるのはヒーローの華……！　必ず自分のものにしてみせますわ!!」
「そ、そうか」
ものにする……か。脱ぎたいっていう気持ちを抑え込む、って言うのかと思ったが……。

ちょうど慧理那が宣言を終えた時、扉が開いて桜さくら川がわ先生が部室に入ってきた。
「おっ、今日は久しぶりに部室がズタズタだな」
心なしか嬉うれしそうに部室を見渡す桜川先生。
「あ、あの、尊みことさん……部室がズタズタということは連動してズタズタになっている美少女がいるということで……」
満まん身しん創そう痍いで当然の訴えをするトゥアールだが、桜川先生は気にせず慧理那の側に向かった。
「お嬢さま、例の件。学期始めで今放課後はお忙しいようです。ですが大変喜んでいらっしゃいまして、次の休日、ゆっくりにと……」
「わかりましたわ。楽しみです」
慧え理り那なが目配せするように愛あい香かとトゥアールを見ると、二人も頷うなずいた。
「どうした、何かあるのか？」
「うふふ、秘密ですわっ」
愛香もトゥアールもにこにこしている。サプライズの計画か何かか？

何だろう。みんなが笑顔でいいことのはずなのに、黒猫、カラス、切れた靴くつ紐ひも、割れた写真立てを一度に見たような、果てしない胸

騒ぎがする。

◇

　広大な敷地面積を誇る神しん堂どう家には、多くのメイドが従事している。

　主人たちの前では約一名の妖よう怪かい婚こん姻いん届とどけを除き廉れん直ちよくな働きぶりを見せる仕事人の彼女たちも、一息つけば年若い女性として肩の力を抜く。

　今日も、あらかたの仕事を終えた夜、休憩所に集まって女子トークに華を咲かせていた。

「お嬢様、最近女性誌とか読まれるようになって、チョーかわいいの！」

「嘘うそ!?　児童誌とか特撮雑誌じゃなくて!?」

　一〇代後半～二〇代前半の若いメイドは、ほとんどが尊みことの下で慧理那のお付きとなっているため、主かの人じよの変化には敏感だ。

「それでねそれでね、モデルの女の子の胸元見てぇ、自分の胸ペタペタ触って、溜ため息いきついたりしてるの！　やべ――――――かわいい死ぬ――――――ッ!!」

「あああぁぁん幼児体型に悩むお嬢様超萌える!!」

「わ、私もう…………クケェ――――――ッ!!」

　メイドの一人が、感極まってメイド服の肩口を握り締め、そのままボタンを引き千ち切ぎる勢いで脱ぎ捨てた。

　下着姿になり、主の姿を思い浮かべて涎よだれを垂らすその姿は、由緒正しき神しん堂どう家のメイドとしての風格など、プールで泳いでいて紛失したコンタクトレンズよりも発見が困難だ。

「で!?　で!?　お嬢様の好きな男の子って、どんな子なの!?」

くねくねしていたショートカットのメイドに催促され、隣に座っていた後ろ髪をアップにまとめた最年少のメイドが、ポケットからスマートフォンを取り出して、皆に見えるようにテーブルの上に置いた。
「これ、この子！」
慧理那が総そう二じと僅わずかな区間を一緒に登校しようと、通学路で合流したタイミングで隠し撮りされた写真だ。
「わぁ～、結構可愛かわいい顔してるじゃない！」
「私、好み!!」
年上のお姉さんに方には、総そう二じはなかなか好評のようだ。
しかし、彼の周りの女性の盗撮への敷居の低さが、深刻なレベルに到達していた。
「ねえこれ、慧え理り那なお嬢様！　メチャメチャ恋する乙女の目じゃない！」
そして、写真に写る慧理那の幸せそうな目に気付き、歓声を上げる。
「だってこの観み束つか君も、慧理那お嬢様のこと憧あこがれてるみたいだもん。すっごくツインテールが好きなんだって」
最年少のメイドの駄目押しの情報に、皆はさらに身を乗り出した。
「ええっ!?　それじゃあ、この家の婿むこになるために生まれてきたみたいなコじゃない!!」
「実際、ある時期から奥様、全然慧理那様に縁談の話しなくなったわよね……もしかして!?」
「そう！　噂うわさじゃこの観束君、慧理那様の見合い話を進めている奥様のところに怒鳴り込んで、取り止めにさせたらしいわよ！」
「「「アキャ――――――――――――――――ッ」」」
少女漫画さながらの熱い場面を想像し、メイドたちも素面しらふでさらに酔っ払っていく。
「私もこの日お嬢様についてたらなぁ～。でもそれじゃ、もうつき合っ

てるの、二人!?」
　最年少のメイドは、溜ため息いき交じりに現状を皆に伝えた。
「何かね、観束君……幼おさな馴な染じみの子とか、色々周りにくっついてるのよ。それに……」
　視線を横に移す。その先では神しん堂どう家のメイド長・尊みことが女子トークには交ざらず、ソファに深く腰を下ろして女性誌を読んでいた。
「奥様が未み春はるさんに会われるのだ、チャンスだな。私もしっかりアピールせねば」
　メイドたちは一斉に押し黙り、尊の周りに殺到した。
　その足運びの軽やかさ、埃ほこり一つ舞わせぬ静かさ。さすが、神堂家のメイドは教育が行き届いている。
　……先ほどの狂態に目を瞑つむれば、だが。
「あの……メイド長。奥様が……誰だれに会われると？」
　皆を代表するように、最年少が恐る恐る尋ねる。
「んー？　いやな、お嬢様が奥様を観束のお母さんに是非会わせたいと言ってらしてな、次の日曜に決まった。奥様も楽しみにしているぞ」
　歓喜の雄お叫たけびが休憩室を激震させる。
「そ、それって……それってぇ!!　…………ん？」
　しかし熱病は、余計な一言を思い出したことですぐにクールダウンしてしまった。
「メイド長……さっき、チャンスだとか、アピールするとか」
　尊みことは女性誌を畳み、胸を張って返答した。
「当然だろう、私だって奥様に観み束つかと結婚していいって言っていただいているんだ」
「そんな社交辞令真に受けてどうするんですか！」
「むしろ私は観束のお母さんにとっくに挨あい拶さつしているぞ!?」

「それ普通に当あたり障さわりのない挨拶と取られて終了だったでしょう絶対!!」
　比類なき女子力の応酬で、休憩室は放電を幻視するほどに昂たかぶっていた。
　とうとう最年少のメイドは皆の言葉を代弁し、歯に衣着せずに意見をぶつけた。
「メイド長ォ！　前々から言おうと思ってましたけど、もう少し空気読んでください！　登校中もお二人の邪魔して！　今、慧え理り那なお嬢様は一番幸せな時期なんですよ!!」
「今一番暗黒な時期の女が、どうすれば空気を読めるというのだ!!」
　五体に染み渡る激げき甚じんな説得力に、メイドたちはたじろぐ。
「だ、だいたいメイド長は誰だれ彼かれ構わず婚こん姻いん届とどけ渡し過ぎなんです！」
「そうですよ！　この前、街で私のカレにも婚姻届配ったでしょう！」
「カレ？　ああ、あの婚姻届欲しそうなツラしてた男か」
「そんなツラしてませんし！　もし欲しそうにしてても、それはメイド長のじゃありません！」
　数に任せて言いたい放題だった若きメイドたちだが、彼女らはいつしか、周囲を粘っこい黒雲が取り巻いていることに気付き、声が萎い縮しゅくしていく。尊のぎこちない呟つぶやきが、よく響いた。
「男と」
「はい？」
「……男と初めて海に行った。二八年間、女として生きてきて」
「……」
「…………」
　二八歳独身──桜さくら川がわ尊が放つ負の感情の塊の前では、若さという鎧よろいはあまりにも無力だった。

「水着を着るのも、随分久しぶりだった。最後に着たのは、何年前だったかな。お嬢様のスイミングにご随伴した時だな……まあ、競泳用水着だったが」
　言葉にできないやるせなさに、メイドたちは冷や汗をかいていく。
　泣くでもなく、喚わめくでもなく、ただ無言の子供に、玩具売り場のディスプレイの前で袖そでを摘つままれたような感覚だった。
「あの頃ころはまだ、私は二〇前半か……結婚なんて、冷めたフライドポテトをレンジで温めるよりも簡単にできると思っていた……」
　ティーンシンガーが書き綴つづったラブソングの歌詞のような台詞せりふを、演歌のように情念たっぷりに紡つむぐ尊。
「……その水着を、観束が誉めてくれてな……。周りに若い女の子ばかりなのに、私も誉めてくれたんだ……」
「……えと」
「あの、メイド長」
　壁の鳩はと時計が、二一時をお知らせする。ポッポー、と飛び出てきた瞬間、部屋の淀よどんだ空気に当てられたのか、根元からぽっきりと折れて落下した。
「夏休みには、遠くに旅行にも行った……。男と初めて国外旅行だ……。あれ、異世界だったか……でも、わくわくしたな……」
　総そう二じも愛あい香かの誕生会で危き惧ぐしていたが、ツインテール部の関係者で年輩に当たる尊が、一番口が軽いのが恐ろしい。
「そうだよな、お前たちみたいに男がいる女から見れば、うえたアラサー独身女なんて、火星人も同然なんだろうな」
　メイドたちは悟った。あの少年は本物だと。今まで強がっていた年とし増ま……もとい妙齢の女性が、心のよりどころを見つけてしまったがために弱くなってしまったのだと。本来なら、はやし立て、応援すべき案件なのだが……相手が主人とかぶっていなければ。

「いや、そこまで言ってませんよ!?」

「わ、私も彼氏いないですし……メイド長と同じです！」

「同じ、か……。お前、確か二〇だったな……。あと八年後、もし私と同じ立場だったらそう言ってみろ……。喉のどが引きつって、言葉が出んぞ」



「メイド長は結婚できないことより、その年まで彼氏がいなかったことを悩むべきでは……」
「……だから今、頑張って婚こん姻いん届とどけ配ってるんじゃないか……」
　あまりの腫はれ物っぷりに、メイドたちが一斉に尊みことを慰め始める。
　タンバリンやマラカスで何とか盛り上げようとするメイド。趣味のギターを持ち出すメイド。
　意味もなくバク宙してみせるメイド。
　根は上司思いなのだが、尊の部下だけあって、最後の部分で要領がよくない。
「すまんな……。確かにちょっと、浮かれてるのかもしれんな……。過ぎ去った青春を取り戻したようで……」
　号泣し、我われ先にと尊の胸に飛び込んでくるメイドたち。
「メイド長ォ！」
「わかりました、愛人さんになっちゃってください！」
「もう、３Ｐでいいんじゃないですか⁉」
　まるで、不良学生たちが熱血教師の熱意に絆ほだされ、純粋な想いを吐と露ろするかのような光景だ。
　恐るべしや、独身女の熱意。畏おそるべしや、独身女の情念。
　そろそろ神しん堂どう家の夏祭りが開催されんばかりにヒートアップする中、上品にドアがノックされ、楚そ々そとした佇たたずまいの女性が入室してきた。
　慧え理り那なの母にして陽よう月げつ学園理事長・神堂慧え夢む。狂態で濁った空気を、揺れるツインテールの一振りで吹き飛ばし、清廉な微笑ほほえみを浮かべた。
「ああ、休憩中でしたのね、わたくしに構わず、くつろいでいてよろし

くてよ」
　無茶を言う。中には感極まりメイド服を引き千ち切ぎってブラ丸出しのメイドもいるというのに。
「尊。明後日わたくしもお呼ばれいたしますが……その前に、明日。慧理那は覚悟を決めたようです。先ほどわたくしにある申し出をしてきました。そのことで、話が」
「は、はい。ただいま」
　火星の大地のように荒廃しきった態度を引き締め、仕事人の顔になる尊。
「本来であればわたくしが指南しようと思っていたところですが……やはり、普段から親交のあるあなたの方が婿むこ殿も安心するでしょう。二人をサポートしてあげて欲しいのです」
「サポート……？　はい……」
　その後も尊は何を言われているかはっきりとは理解していないようだったが、耳をそばだてていたメイドたちは、自分たちが思った以上にとんでもなく面白いことになっていると確信した。二人が休憩室から出て行った後、メイド一同による優勝パレードじみた大騒ぎが始まった。

　広大な屋敷内とはいえ、一つ屋根の下でくっきりと明暗がわかれているのは物寂しい。
　慧夢にある希望を伝えて快諾された後、慧理那は自室でテイルイエローに変身していた。
　重装甲をまとったままソファーに腰を下ろし、一〇〇インチ以上ある大型ＴＶで自分が編集した〝歴代ヒーローの名シーン集〟を鑑賞している。
　時たま映像を一時停止し、やおら立ち上がってヴォルティックブラスターを構えたり、仕草を真ま似ねしてみたり。その度たびに、最後には

切ないため息が零こぼれた。

　レッドやブルーは何の意識もせず、もちろん陰で練習などしていないだろう。しかし、戦闘中の何気ない構えなどが、思わず見み惚とれるほどにかっこいい。

〝本物のヒーロー〟は、無意識の立ち振る舞いが人を惹ひきつけてやまないものなのだろう。

〝本当の信念〟は、いかなる雑言にも揺るがず確固として自らの裡うちにあるものなのだろう。

　仮面なき変身を遂げたはずが、いつしか不可視の仮面が生まれ、自分の本心を隠した。

　その仮面が今度は逆に、不安に耐えきれずに剝はがれ落ちようとしている。

　煌きらびやかなヒーローたちの放つ、画面の鮮やかな光の照り返しを受け。負けず劣らぬ輝きを持つはずのイエローのテイルギアは、彼女の不安を代弁するかのように昏くらくくすんで見えた。

◇

　イースナにアルティメギルであまり気にされていないと聞いたことや、フェニックスギルディに茶々を入れられたこと……他にも俺が知らない時に何かあったようだが、立て続けに落ち込むことがあったせいか、イエローの調子が最近かなり悪い。

　今日の戦闘でも、胸からのミサイルが飛んでいかずにごとっと地面に落ちて、不発弾よろしく退避する一幕もあったが……敵がさほど強くなかったこともあり、何とか切り抜けた。

　基地に帰還してコンソールルームに入り、各々変身解除すると、慧え理り那なは俺の側そばに駆け寄ってきた。何かを言いたそうに俺を見上

げてくる。俺の方から聞こうかと思った丁ちよう度どその時、
「あの……今日、観み束つか君の家に泊まってもよろしいでしょうか？」
　頬ほおを朱に染め、気恥ずかしそうに慧理那は聞いてきた。
「な、な、な、な、な、何言ってんのよ会長――――――――――――ッ!!」
　椅い子すに腰を下ろそうとしていた愛あい香かだったが、見事なストライド走法で俺たちとの距離を詰めると、ツインテールを振り乱して慧理那の肩を摑つかんだ。
「ですが、お泊まりでしたらこの前にも……」
「あれはそーじの部屋にいるイースナを監視して、ここで徹夜してただけでしょ!?」
　さらりと今まで空白だった事実が明かされた気がするが……ずっと俺の部屋にいたイースナを監視してたってことは、つまり――
　恐怖の思考を中断するように、母さんが嬉き々きとして躍り出た。
「私は全然構わないわ慧理那ちゃん！　でも困ったわね、予備の布ふ団とんがないのよ……そうだ――」
「未み春はる将軍――――――！　それは、その作戦を立案したのは私ですううう!!」
　今や懐かしささすら感じる、出会った頃ころのトゥアールが披露した高速で繰り出れる出で鱈たら目め、虚無の思考シークタイムゼロ時間。それを鼻歌のようにリフレインしながら、母さんは慧え理り那なの手を取った。
　母さんまで味方についたことで愛あい香かはさらに狼狽うろたえ始め、慧理那を迎えに来ていた桜さくら川がわ先生に助けを求めた。
「桜川先生も止めてください！　と、年頃の女の子が……よくないですよね!?」

迎えではなくお泊まりセットを持って来ただけのようで、大きな鞄かばんを床に下ろす桜川先生。
「だが、明日は休日だしな……それに奥様も喜んでおられた。何泊でもしてこいと。あと、私も隣で指導してやってくれと仰おつしゃられていたが、それが何のことかわからなくてな……」
トゥアールと愛香が頭を抱える。
「理事長、何てことを……!!」
「わからないって……どうしましょう嘘うそ言ってるように見えないですよこの年とし増ま、体育教師なのに保体がからっきしじゃないですか……!?　でも、それはないです！　それはないですよ！　慧理那さんだけならまだしも、尊みことさんが交じるとかお情けにしても分不相応です!!」
トゥアールは、桜川先生の言う「何のこと」がわかっているのだろうか？
「とにかく、そーじの部屋に泊まるのは駄目！　二階に空き部屋があるからそこにして!!」
勝手知ったる我わが家とばかりに、幼おさな馴な染じみが宿泊部屋調整で譲歩を始める。
慧理那は愛香のネゴシエートを受け、俯うつむき加減で申し訳なさそうに言った。
「ええと、わたくし、この基地に泊まらせていただこうと思っていたのですが……」
「「え」」
意外な答えに、愛香とトゥアールの驚きがぴったりと揃そろう。
「慧理那さん、それは基地奥に私の自室があることを知っての提案ですよね？　うへへ」
つつつ……と爪つま先さき立ちで慧理那に近付き邪悪な笑みを浮かべ

るトゥアール。
「ええ。わたくし、できればトゥアールさんのお部屋に泊めていただきたいのです」
　瞳どう孔こうが開き、白目になり。血走り──トゥアールの瞳ひとみが、文字通り目まぐるしくトランスフォームしていく。
「マッ……マジですかあああああああああああああああああああああ!?」
　両りよう拳こぶしを握り、裂れつ帛ぱくの気合いを迸ほとばしらせるトゥアール。激しい闘気……いや、妖よう気きで白衣の裾すそが肩まで翻ひるがえっている。
「お嬢様!?　奥様は観み束つかの家に泊まるから許可を出されたので、それでは話が……！」
「ここも観束君の家の一部屋ですわ、問題はありません！」
　理屈の上ではそうだが……桜川先生は不測の事態に弱いので、案の定おろおろしている。
　これにさらに驚きよう愕がくの言葉を被かぶせてくることで、慧理那の本気が皆に伝わった。
「お願いしますトゥアールさん……！　どうかわたくしを、あなたの弟子にしてください!!」

第四章　痴女に弟子入りですわ。

　技術力では現代科学の数世代先を行っているトゥアールのコンピュータでも予測演算できなかったであろう、予想外が限界突破した慧え理り那なの言葉。
　今度という今度こそ聞き間違えではないかと、俺たちは必死に頭の中でリフレインさせた。
「で、し……？」
　狂乱の歓喜から一転、トゥアールは喜んでよいのかどうかと戸惑っている。
「それって、トゥアールみたいに科学者になりたいってことか？　自分で発明とかできるように……」
　武器メンテナンスやギアの調整を自分でできるようにしたいとか。慧理那ならありえる。
　慧理那は首を振り、できれば俺の案で妥協しておいてほしかった恐ろしい発言を重ねた。
「わたくし、トゥアールさんのような〝ちじょ〟になりたいですわ!!」
　可愛かわいらしく拳こぶしを握り締め。美しいツインテールにいささかの翳かげりもなく。
　お嬢様は、天地に反逆する衝撃発言で俺たちに止とどめを刺した。
「いや、もうなって……」
　慌てて言葉を呑のみ込む愛あい香か。
「じゃなくて！　本気!?　トゥアールになったら……トゥアールなのよ!?」
　混乱のあまりか、途方も無く深遠にも思える哲学を語る愛香。
「険しい道を選んだのね、慧理那ちゃん……。あなたが初めてうちに来

た日を思い出すわ──」
　芝居がかった感かん慨がいにふける母さん。
「お嬢様！　そもそも、痴女が何かおわかりなのですか!?　トゥアールのような女ですよ!!」
　さらに間髪容れず桜さくら川がわ先生がなだめるが、むしろその言葉は援護射撃でしかなかった。
「ですから……トゥアールさんのようになりたいから、ちじょになりたいのですわ！　津つ辺べさんがいつも言ってらしたじゃありませんか！　トゥアールさんのことをちじょと!!」
　満面の笑顔と穢けがれなきツインテールに、悔恨の愛香は顔を両手で隠す。
　夫との口くち喧げん嘩かで言った罵ののしりの言葉を、いつの間にか小さな子供が覚えて口にしていたようなバツの悪さなのだろう。
「……勇者とか賢者みたいな栄えい名めいと勘違いしてないか!?」
　俺は一応そう確認したが、大丈夫ですわ、としか応こたえてくれない。決意は固そうだ。
「わたくし、最近また調子が悪くなってきていますの……。まるで、変身したての頃ころ、テイルギアの力を全く使いこなせなかった時に逆戻りしていっているようですわ」
　そこで初めて不安を吐と露ろする慧え理り那な。皆、一様に押し黙ってしまった。
　そして慧理那は、決意を湛たたえた瞳ひとみで言い放つ。
「テイルギアは心の強さが影響するもの。ここ最近、わたくしは心を乱す出来事が多くて、それが反映されているのだと思います。ですから……わたくしがこれからの戦いを乗り越えて行くには、もっともっと心を強くするしかないのです!!」
　慧理那──。

俺が心配するまでもなく、ここ最近の不調をしっかりと受け止め、そして乗り越えようとしていたのか。強くなりたいと言うが……君はしっかり強くなっているよ、慧理那。
「そうだよな。フェニックスギルディに信念だの正義だの気安く言われっぱなしなのも悔しいし、今度こそ吹っ切れようぜ、慧理那!!」
「ええ、観み束つか君!!」
俺の激励に、力強く首しゆ肯こうする慧理那。彼女のツインテールには、現実を受け入れようとせず「こんなはずはない」と連呼していた初陣の脆もろさはもはや微み塵じんも無い。
だったら俺も、あの時から変わらず、今も彼女の決断を応援するだけだ。
「……というわけですので津つ辺べさん、明日に備えて、こちらに泊めていただいた方が」
「でも、なんで泊まりで、トゥアールで、痴女で……!!」
愛あい香かはまだ少し心配なようだ。普段の言葉のキレが全くない。
「トゥアールさんはえろほんの件でわたくしをツインテイルズに快こころよく迎え入れてくださいましたわ。わたくしが一皮剝むけるためには、トゥアールさんに学ぶことが一番だと思うのです」
そう、慧理那のツインテールは、一皮剝けるため……より強く輝くために、あえて光を蓄えているようにさえ見える。調子が悪いというより、ツインテールが雌し伏ふくの時を迎えているのではないだろうか。
トゥアールもそれを感じ取ったのか、慧理那の手を力強く握った。
「外ほかならぬ慧理那さんの頼み、喜んで聞きますとも」
「トゥアールさん……！」
「ただし、慧理那さんが本気とわかった以上、手加減はしません。私の持つ全てを慧理那さんに伝授するつもりです」
「ありがとうございます！」

　愛香は俺の肩を揺すってきた。慧理那相手では、強く言えないのもあるだろうが……愛香自身、慧理那が全く的外れなことを言っていると思ってはいないからだろう。
「ど、どうするのよ、そーじ。このままじゃ会長がトゥアールになっちゃう!!」
「いや、慧理那の意見は俺も賛成だ。考えてみれば、慧理那がテイルイエローとして完全に覚かく醒せいしたのも、自分の全てを受け止めたからだ。トゥアールの大らかさを学んで心にゆとりを持つのは、これからのためにも悪いことじゃないと思うぜ」
　筋の通った意見だと思うのだが、愛あい香かはそれでも諦あきらめきれないのか、
「会長！　強くなるなら、あたしと組み手とかしない!?　キックに慣ればイエローの必殺技も強くなると思うよ！」
　慧え理り那なの前でハイキックをしてみせた。
「お嬢さまは護身術の基礎さえ学んでいない。一から始めるならともかく、生なま兵びよう法ほうは大おお怪け我がのもとだ。お前のように熟練者が相手では尚なおさらな」
　桜さくら川がわ先生が腕組みをして窘たしなめる。
「何でこういう時だけ真ま面じ目めなこと言うのよ、桜川先生は……！」
　愛香は拳こぶしを握りしめて俯うつむいたかと思えば、意を決したように勢いよく顔を上げ、
「……そ、そういえば会長とお風ふ呂ろ入ったことなかったなぁ～、あたし会長の裸見たいし、今日、一緒に入ろっか？」
　シャツの襟えり元を摘つまみ、ペッタンペッタンと扇あおいで戦闘で汗をかいたとアピールする愛香。
　しかも、思いつく精一杯なのであろう、自分なりの痴ち女じよっぽさ

を演出しながら。
「愛香ちゃん……いいわ、身体からだで友情を繋つなぎ止めようとするその健けな気げさ、おばさんもう年だから涙るい腺せんに来るわ!!」
　母親が涙腺に来ちゃっているらしいのはスルーし、俺はやんわりと愛香を説得した。
「いいじゃないか、今回はトゥアールに学びたいって言ってるんだから。愛香は次の機会で」
「たった一回でもトゥアールに師し事じしたら全てが終わるでしょ！　……会長！　あ、あたしが脱ぎたいってのもあるかなー！　胸がちょっと控えめ同士、女子トークに花咲かせようよ！」
　あれ……おかしいな、どうして涙が零こぼれそうになるんだろう……？
　俺が突然の落らく涙るいに戸惑う間も、愛香は血涙交じりに訴える。もはやトークというより闘とう苦くだ。
　しかし、捨て身の健闘も虚むなしく、慧理那は清せい廉れんな笑顔で滅びの言葉を口にした。
「すみません。お風呂は、トゥアールさんと一緒に入りますわ」
　いや、むしろそれは人々が神を崇あがめる祝詞のりとだったのかもしれない。
　突如として、コンソールルームが眩まばゆいばかりの光に包まれた。神が、降臨したのだ。
「こ……これは⁉　トゥアールか⁉」
　俺は思わず腕で目を覆う。
「おお……何と見事なアルカイックスマイル!!」
　桜川先生が素直にそう溢こぼすほど、後光さえ錯覚する至上の微笑ほほえみをトゥアールは湛たたえていた。
　天井か床か壁でオブジェになっている印象ばかりつきまとうが、トゥ

アールは歴史に刻まれるレベルの絶世の美少女だ。
　普段の邪悪な薄ら笑いではなく、心からの微笑みをその神に祝福された美貌に貼はり付けた時——もはや彼女は、女神と同じ座で天下に光をもたらすのだ。
「慧理那さん。あなたの望みは全て叶かなえましょう。一緒に洗いっこしましょうね」
　心を摑つかむ安らかな声こわ音ねは、その奥にある邪心をもコーティングする。
「させるかあああああああああああああ!!」
　すでに巨乳属性ラージバストのエレメリアンとの戦いの時、胸のためなら神をも殺すと宣言していた愛あい香かだが、その前言に違たがわず、胸を司つかさどる女神・トゥアールに致死性のハイキックを放った。
「さえずるのをやめなさい、か弱い小鳥さん」
　トゥアールはアルカイックスマイルを崩さずハイキックを手で受け止めると、さらにその威力を合気道のように跳ね返し、愛香を吹き飛ばした。
「なっ……!?」
　必殺の蹴りを虫でも払うかのように易やす々やすと片手で迎撃され、尻しり餅もちをつき呆ぼう然ぜんとする愛香。
　トゥアールもまた、進化しているんだ……!!
　愛香は光の消えた瞳ひとみでのそのそと立ち上がり、
「…………そーじ、トゥアール見張ってて……。あたし、今夜は奥のトレーニングルームで特訓してるから」
　地下基地の中で一番使用頻度が高いと思われたがその実ほとんど使用されていない、トレーニングルームへ向かう愛香。以前トゥアールが、女体化した俺を見て昂たかぶったとか言って愛香の攻撃に耐えたことは

あったが、今回はその比ではない。余程ショックだったようだ。
「あの、津つ辺べさん落ち込んでらしたようですが、大丈夫でしょうか……」



「ああ、大丈夫。負けず嫌いだからさ、愛あい香か」
　……頼むから、普通に生身で新必殺技とか編み出してこないでくれよ……。
　母さんが頬ほおに手を当てうっとりとしながら言う。
「うふふふふ、可愛かわいいわねえ愛香ちゃん、基本的に私ノーマルだけど、こういう可愛い嫉しつ妬とかもアリだわ！　何か、後輩に懐なつかれてた高校時代を思い出すわねえ」
　何が嫉妬かはわからないが、直後に不穏当な言葉が聞こえて冷や汗が背を伝う。思い出さないでくれ頼むから。
「奥様にお嬢様のサポートを仰せつかっております。お嬢様がそこまでの覚悟ならば、この私も共に痴ち女じょになりましょう」
　慧え理り那なという惑星に付き従う美しき衛星──忠誠心厚きメイドさんが、公転周期を飛び出し、巨大な隕石となって降り注ぐ。痴女パンデミックが始まろうとしていた。
「ありがとう尊みこと。でも大丈夫、一人で立派に成し遂げてみせると、お母様に伝えてください」
　慧理那は桜さくら川がわ先生の心遣いを最大限慮おもんぱかりつつも、強い意志でその提案を辞した。
「……ここで私が食い下がれば、お嬢様の決意の妨げになるな。観み束つか、私は屋敷に戻るが、ちゃんとトゥアールを見張ってくれ。お嬢様の仰おつしゃることもわかるが、あいつは加減を知らん」
「わかりました。まあ一晩だけですし、大丈夫ですって」
　桜川先生は俺に耳打ちすると、心配そうに何度も振り返りながら、基地を後にした。
「さて、と……」
　次の瞬間、トゥアールの衣服が弾け飛び、白衣の下に下着だけという出で立ちになる。

「……腐っても蛮族、どうやらさっきのキックの威力は返しきれていなかったようですねー。時間差で私の服を破っていくとはー」
　気のせいか服が破ける直前、白衣の袖から、シュウマイ弁当を温める時引っ張るヒモのようなものが視界に映ったような。じわじわと微笑ほほえみの加護を失いつつあるせいか、あらが見える。棒読みに聞こえたし。
　しかし、下着姿を直視するわけにはいかない。俺が目を逸そらすと、今度は慧理那に向き直るトゥアール。
「さあ慧理那さん、どうしました、もうレッスンは始まっていますよ！　師匠が脱いだら弟子も脱ぐ！」
　早速厳しい師弟関係の掟おきてを口にするトゥアール。
「えっ⁉」
「あなたが目指す痴女──それに必要なのは、脱ぐことを恐れぬ勇気！　見せることを恥じぬ信念です！」
「で、ですが観み束つか君が──」
「いるのが総そう二じ様だけだからいいのでしょう！　慧理那さん……イエローのいいところは、誰だれ彼かれ構わずではなく主人と認めた総そう二じ様だけに被虐心を解放する一途さ！　イエローが強くなるには、変身前の慧え理り那なさんもその情熱パトスをものにすることが必要不可欠です‼」
「なるほどですわ‼」
　洗脳……もとい、勢いに引っ張られるように目を輝かせる慧理那。
「総二様も、協力すると仰おつしゃったのですから目を逸そらしてはいけません！　私も、恥ずかしいのを我慢してこんな格好をしているのですから‼」
「わ、わかった……」
　目が充血していてとても恥ずかしそうには見えないし、割りと何度も

自発的になるのを見た下着姿スタイルだが、真顔でそう言われれば俺も恥ずかしいとは言っていられない。
　慧理那の願いのため、俺もできる限り力になろう。
「うう……」
　ワンピースの裾すそを両手で摘つまみ、涙目で震ふるえる慧理那。
「変ですわ……テイルイエローの時は平気なのに……観束君も見ているのに、どうして……」
「いや、俺はそれが普通の反応だと思うんだけどな……」
「総二様！　慧理那さんの決意に水を差してはいけません！」
　そうだな。トゥアールの言うとおり、慧理那が脱ぐまでしっかりと見守ろう。
「…………」
　こめかみに鈍い痛みが走り、手で押さえる。如い何かなる信念の前でも確として守るべき倫理が、場の雰囲気に流されて失われていってはいないだろうか……!?
「み、観束君……わたくしのツインテールを触ってください……!!」
「わかった！」
　できる限り優しく、しかししっかりと、俺は慧理那のツインテールを握った。
　……後ろからの方がよかっただろうか、慧理那が充血した目で息を荒らげて俺を見てくる。
　母さんが涙を指で拭ぬぐいながら何度も頷うなずいた。
「総ちゃんが生まれた日のことを思い出すわあ～。分ぶん娩べん室で母さんの手を握りながら、父さんは『我わが子に全ての神気を』って念じながら──」
「頼むからそういう情報はこれ以上俺の頭に入れないでくれるか!?」
　よく看護師さんに蹴けり出されなかったな父さん……。

「わたくし、頑張れそうですわ。観束君の手、とても温かいです……」
「そっか、ツインテールで体温を感じられるようになったんだな!!」
　不可視の温点をツインテールに備えた慧理那の成長を喜ぶも、慧理那の表情は優れない。何か余計なことを言っただろうか……。
　その時、コンソールルームの出口の先にある部屋から、けたたましい破壊音が響き渡った。
「何だあ!?　奥から怪獣がビルを体当たりで壊したような音が聞こえたぞ!?」
「騒ぐ胸もないのに胸騒ぎがして暴走した怪獣がどこかにいるのかもしれません、とりあえずそのまま続けましょう！」
　とりあえずで済ませていいのかはわからないが、慧え理り那なは思い切りワンピースを摘つまむ指に力を込めた。
「てやあっ!!」
　可愛かわいらしい叫びと共に、一気にワンピースを捲めくり上げる。視界に慧理那の下着が飛び込んできて、慌てて目をそらした。
　スコアボードらしきものを手にしたトゥアールがなにやら記入して頷うなずくと、次のレッスンへと進んだ。
「では総そう二じ様、次はマットを敷きますので、横になっていただけますか？」
「い、いいけど……どうするんだ？」
「慧理那さん、顔面騎乗位の練習をしましょう。初心なラブコメから熟練者のプレイにまで幅広く使える基本テクニックです」
　……何かこの前イースナとエロゲーやった時もそんな単語が出てきた気がするけど、基本って何の基本だ……!?
「がんめん……きじょうい？」
「不安でしたらまず私で練習していただいて大丈夫ですよ」
「……いえ、とりあえず、やってみますわ……」

　多分今の俺と同じく、慧理那も底知れぬ疑ぎ惧くを感じたのだろう、トゥアールの申し出をやんわりと断った。
　愛あい香かのツッコミがないと、いちいち会話を聞いているだけで薄氷を踏んでいるような不安に駆られる。どの辺が常人としての会話の上限なのか、俺には判断がつかないのだ。
　とりあえず、トゥアールが用意してくれたマットに横たわる。上質なスリープマットのような、このまま眠りに落ちてしまいそうなフィット感だ。
「それでトゥアールさん、がんめんきじょういとは……」
「はい、図で説明しますね！」
　モニターに大写しで図画表示される。デッサン人形のようなワイヤーフレームでできた二組の人間が、もつれあっていた。片方は地面に横たわり、片方はその顔面に腰を下ろしていた。
　なるほど……顔面に、騎乗する……なるほ……ど……。
「え、これ、もしかして、わたくしが、上……で……お尻を乗せ……!?」
　大丈夫、心臓マッサージと同じで医療行為みたいなものですから、と慧理那に真偽不明な説明をするトゥアール。
「総二様！　他意はありません！　よくあるハプニングの例としてですね」
　ブリッジで跳ね起きると、俺はトゥアールの言葉も途中に一目散に出口へ向かってダッシュした。そこへ颯さつ爽そうと立ち塞ふさがる、漆黒の影。
「待ちなさい総そうちゃん、頑張ってる女の子に協力しないなんて、お母さん許しませんよ!!」
「母さんじゃないだろ行く手を阻はばむ女幹部だろ俺をここから出してくれ――――っ!!」

安請け合いだったと後悔しながら、トゥアールの秘密特訓は続いた。

◇

テイルブルーを打倒するために灼しやく熱ねつの夏を駆け抜けた、強こわ面もての怪人たち。
絵画修行を通じてお絵描きの楽しさに目覚めた者も多く、こっそりこの世界のイラスト投稿サイトに自分のＣＧをアップするエレメリアンも現れる始末だった。
「フッフッフ……見よ。俺の描かいた鎖さ骨こつ輝く少女のイラストが、デイリーランキングに掲載されてしまったわ」
鼻息も荒く、ノートＰＣを仲間に見せつけるのは、鎖骨属性クラビクルを持つサイ型のエレメリアン、ライノセラギルディ。響く感嘆も心ここ地ちよく、彼は充足感に包まれていた。
彼のイラストは一か月前とは比べものにならないクオリティになっている。人間たちも、自分が評価をつけたイラストの作者がエレメリアンだなどと夢にも思わないだろう。
「成長したな、ライノセラギルディよ」
「こ……これは、ビートルギルディ様!!」
背後からビートルギルディに声をかけられ、居住まいを正す戦士たち。ビートルギルディはそのままでよい、と苦笑し、部下の快作を賞賛した。
「首の筋と鎖骨が描く二つの三角、そのくぼみにツインテールがやわらかくかかっている構図……見事だ」
ビートルギルディのアドバイスした技術をスポンジが水を吸収するように余さず体得し、ライノセラギルディはイラスト技術を向上させた。

師のような敬意を、そしてクリエイターとしてのリスペクトを感じているからだろう。ライノセラギルディは、直感が働いたようにはっと息を呑み、ビートルギルディに疑問をぶつけた。
「ビートルギルディ様！　我わが拙せつ作さくをいつも必ず一番最初にお気に入りに登録してくださる、ユーザーネーム『かぶと♪ラバー』氏は、まさか……!!」
「フッ……さて、何のことかな……」
　会議の時間が近づき、兵たちもホールに集合する。
　ビートルギルディはライノセラギルディの追究をはぐらかすと、演説台へと登壇した。
「先の修行を経へて、お前たちの力は格段に上がった。それはこの私が保証しよう。……しかし、ツインテイルズもまた、同様に修行を重ねていたのだろう。休戦宣言をする前より、明らかに戦闘力が増している」
　横に並んだスタッグギルディが続ける。
「修行で追いつくのは、相手が足踏みしていることが大前提だからね……。常勝戦士であるツインテイルズが、油断なく日々鍛錬を続けている……恐ろしいことだよ」
　ある意味残酷な現実だ。一同が静まるのも無理はない。
　ビートルギルディたちも、ツインテイルズが異世界で貴の三葉ノー・ブル・クラブを撃破した事実は聞き及んでいるが、あの死闘がどれだけツインテイルズを成長させたかまでは考えていなかった。
　それまで数か月分の戦い以上の戦闘をたった数日で切り抜けたのだ、戦闘経験値は莫大なものだっただろう。
「だから次は、兄さんと僕とで出撃するよ」
　スタッグギルディの宣言に、静寂から一転、ざわめきが起こる。
「お待ちください、あなた方が出撃なさるなど──」
　当然部下からは異論が挙がるが、スタッグギルディはいつになく強い

口調で諫いさめた。
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの独断を許すわけにはいかない。それにはもう、この世界の侵攻を断固として完遂するより他にないんだ。それができるのはもう、僕と兄さんだけだ」
　暗に、「お前たちの実力では心こころ許もとない」と告げられ、兵たちは一様に押し黙る。有無を言わさぬ決定に誰だれもそれ以上口を差し挟むことはできず、会議は沈ちん鬱うつな空気のまま終了した。

　部下たち全員がホールを去った後、一体だけそこに残っていたのは、生気を失いさらに老け込んでしまったように見える、スパロウギルディだった。
「辛つらいか」
　ビートルギルディに声をかけられ、ようやく顔を上げるスパロウギルディ。
「……ビートルギルディ様たちの必勝は信じております。しかし、スワンギルディも倒され……私はもう、胸に穴が空いたようで……」
「しっかりせぬか」
　普段座ることのない一般兵たちの雑席に腰を下ろし、ビートルギルディは肩を並べ励ました。
「万一私たち美の四心ビー・テイフル・ハートが敗れれば、正式にこの混成部隊へ死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが統合されるやもしれぬ。その隊長はアルティメギル屈指の変わり者でな……兵をまとめるには向かぬ。また、お前が皆の面倒を見ねばならぬのだぞ」
　ビートルギルディのみならず、人変わりしたように部下を叱責していたスタッグギルディもまた、優しく自分を見つめていることに気づき、スパロウギルディは彼らの真意を悟る。
「まさか、あなた方は……!!」

　そのくたびれた肩を軽く叩たたき、ビートルギルディとスタッグギルディはホールを後にした。
　まるで光の中に溶け込むように扉の向こうへ姿を消した二人の背中に、切なき真意を見る。
　後進に未来を託し出撃する上官を、自分はあと何度見送ればいいのか。
「次、など……もう、私には考えられませぬ……」
　長年連れ添った隊長も、将来を有望した部下も失い。そしてこの先を思い、スパロウギルディは拳こぶしを震ふるわせた。

「スタッグギルディ……すまぬな。つらい役をさせた」
「兄さん。僕は名誉や栄誉なんてどうでもいい。部下からの信頼も、別にいらないよ。ただ、兄さんと、この美の四心ビー・テイフル・ハートが栄光を手にしてくれれば、それでいいんだ」
「しかしな……」
「またテイルイエローを見ていたね、兄さん」
　図星だった。義弟の真しん摯しな詰問に、優しく応こたえるビートルギルディ。
「まさか、この前私がテイルレッドのイラストを描かけなかったことで、無用な心配をかけたのではないか……？」
　スタッグギルディはゆるりと首を振り、
「ごめん。責めているわけじゃあないんだ。でも、僕はやっぱり未熟だよ。同じ恋愛属性ラブを持っていても、兄さんと同じ世界が見えない。それが不安なんだ……」
　エレメリアンたちは、テイルレッドを愛めでたり、ブルーやべえ、と恐怖を共有することで、仲間意識を高め、結束を深めていく。しかしスタッグギルディは、尊敬する義兄の気持ちを理解し共有できなくなり始

めた自分が不安なのだろう。
「ダークグラスパー様も、テイルレッドへの恋が最後の引き金だったのだろう……。誠心誠意尽くした組織に弓引くほど、恋とは時に人を駆り立てる」
「困った属性だね、我われながら……。わからなくていいものも、わかってしまうなんて」
「同感だ」
「いつまでも過去の遺産で生き長らえるわけにもいかない。そろそろ、この世界で属性力エレメーラを奪ってみせようよ、兄さん」
　弟の決意に絆ほだされ、ビートルギルディは言葉なく頷うなずいた。
「無論、栄光は私や皆だけではない。お前もその手にせねばならぬぞ」
　不退転の誓いを胸に、義兄弟きようだいは固く握手を交わした。

　去って行く義弟の背中に、ビートルギルディは寂しげに微笑ほほえみかけた。
「同じ世界は見えぬさ……。恋とは、自分だけのもの。愛と違い、相手と共有することもできない。だからこの景色は、私にしか見えぬのだ……」
　強こわ面もての怪人が、愛の詩を紡つむぐように美しく謳うたう。
「だが、もう一つの素晴らしき楽園は見せてやろう。美の四心ビー・テイフル・ハート、最後の極美を花咲かせてな」
　それは決して、有終の美などという後ろ向きな覚悟ではない。必勝の決意だった──。

◇

　およそ全ての痴ち女じよ特訓を総そう二じが命からがら回避した頃こ

ろには、とっぷりと夜も深まっていた。
「頑張りましたね慧え理り那なさん、眠いでしょう？」
「え、ええ、でも大丈夫ですわ」
　九時には眠くなる体質の慧理那だが、先の徹夜といい、最近は頑張っているようだ。
　疲ひ労ろう困こん憊ぱいの総二が先に入浴した後、未み春はるは邪悪な笑みを浮かべながら「総ちゃんの後にこっちに入りなさい」と観み束つか家の風ふ呂ろの方を勧め、トゥアールもそれに邪悪な笑顔で答えた。トゥアールと慧理那が次に一緒に入浴することになったのだ。
「久しぶりですね～一緒に入るのは、ロリちゃんの世界のお城以来ですよね!?」
「……は、はい。その時は一緒に入浴というより、いつの間にかトゥアールさんが……」
　客観的に見れば変質者が潜水して盗撮していただけだが、純真な慧理那にそんな罵ば倒とうが思い浮かぶはずもなく、トゥアールの罪は不問になっていた。
　総二がいないので、ツインテールも解ほどいてお団子のようにまとめる。トゥアールも髪をアップにしていた。
　背中に完全脱衣形態フルブラストモード並みの爆撃的視線を感じながらも、慧理那は浴室に先に入った。
　身体からだを洗い終わり、二人では少々手狭な浴槽に入る。
　切り出したのは、トゥアールだった。
「総二様もいませんし、そろそろ聞かせてください、慧理那さん」
「え……」
「二人きりでお話をするために、私と一緒にお風呂に入りたいと提案なさったのでしょう？」
「……トゥアールさんは、何でもお見通しなんですのね……」

　壁を見つめ、トゥアールに背を向けたまま、慧理那は本心を吐と露ろし始めた。

「不調はできるだけ自分の意思で乗り越えたかったのですが……やっぱり、少し不安で」

　ちょうど、総二に異世界で悩みを打ち明けた時のように。裸のつきあいが一番飾らずに本心をぶつけられる場だと、異世界で総二と背中合わせで入浴した時、慧理那は学んだのだろう。

「アルティメギルでのイエローの扱いを聞いたり、相変わらずな世間での評判を目にしたり、イースナさんに信念を問われたり……フェニックスギルディに、わたくしの闘いがヒーローごっこの延長だと言われてしまったり……」

　指折り数えるように、最近の出来事を呟つぶやいていく慧理那。

「自分なりに、世界の平和を守りたいと精一杯やって来たつもりでしたが……わかる方はわかるし、見ている人は見ているのだと、痛感してしまって……」

　たまたま最近指摘が重なったわけではない。慧え理り那なはいつも、敵の信念をぶつけられ、その度たびにそんなことはない、と精一杯自分の信念で反論してきた。そして、戦いに勝ってきた。

　だが今、途方も無い強敵たちを前に、返す自信が揺らぎ始めている。

「わたくしは今のままだと、全てが中途半端な気がするのですわ」

　風ふ呂ろ場で反響する声こわ音ねは、微かに震ふるえていた。

「でも、それで私に弟子入りして、本当によかったんですか？」

　さすがのトゥアールも、そこまで言われては今までやってきた痴ち女じょ講座を省かえりみたようだ。

「わたくし、テイルイエローに変身して、あんな風になってしまうことは、実のところそこまで嫌ではありませんの。それは、人々にはあまりよくは思われていないですが……」

慧理那はそっと自分の小さな胸に手を触れた。
湯を通して、トゥアールにもその高鳴る鼓動が伝わるかのようだ。
「観み束つか君が解放してくれた本当のわたくしは……これだけは、家のしきたりでもない、いただいたテイルギアでもない、初めて自分で手にした、わたくしだけの信念ですから。少し恥ずかしいですが、嫌じゃない。大切な、わたくしの宝物なんです」
脱ぐ。はあはあする。妙な被虐願望もある。……それらは全て、自身がご主人様と定めた総そう二じに向けてのものだから、受け止められるのだ。
「怒らないで聞いて欲しいのですが……トゥアールさんのようになりたくて。トゥアールさんなら、わたくしのこんな気持ちをわかってくださるかと思って……」
くすり、と優しい笑いが浴室に反響する。
「私も、フェニックスギルディにテイルギアを見せられたり、私に会うとか言い出した時には、これからを思って少し怖くなっちゃいましたけど……でも、総二様のおかげでそんなの吹っ飛んじゃいました」
慧理那は言葉を無くした。単純な好奇心が先行しているとはいえ、明確に標的にされたのだ。自分よりもよほどトゥアールが不安を感じていたはずではないか。
しかしトゥアールは、総二のおかげで心配を払ふつ拭しよくできたという。
「慧理那さんも、もっともっと総二様に甘えていいんです」
「おわかりなのですね……。わたくしが、観束君に甘えたいと思っていることが……」
慧理那はきゅっと唇くちびるをかみしめ、そっと深呼吸をした。
「恋愛の属性を持っているスタッグギルディは、人間の恋心を見抜けるそうですわ」

　ここからこそが、本題だとばかりに。
「ですが……彼が見抜いたのは、ブルーがレッドを好きなことだけ。わたくしには、何も言いませんでした……」
　背を触れ合わせたまま、トゥアールは黙って聞き入っていた。
「わたくし、観束君を尊敬していますし、お母様に結婚の話を持ちかけられた時も、観束君とならいいと本気で思いました……。でも今こうして、この気持ちが恋ではないと暗に告げられて……自分の想いに自信が持てなくなってしまって」
　直後、慧え理り那なは背中に風ふ呂ろのお湯よりもずっと温かな温ぬくもりを感じていた。
「本当に可愛かわいいですね、慧理那さんは」
「トゥアールさん⁉」
　トゥアールが、後ろから慧理那を抱き締めていたのだ。
「ありがとうございます、私に話してくれて」
　いつもの剽ひよう軽きんなトゥアールしか知らない慧理那にとって、驚くほど誠実で温和な声で、トゥアールはささやきかけた。
「多分、私たちは普通の人とはちょっと感性が違うかもしれません。でも、総そう二じ様はこんな私たちを受け止めてくれます。あの方は、自分の好きなもの、信じるものを他人に否定される心の痛みを、誰だれよりもわかっている人ですから」
　危うく聞き逃のがしそうになる自然さで「ちょっと」などと高層ビル並みの防波堤を立ててはいるが、トゥアールの言葉は信頼に溢あふれていた。総二なら、全てを受け止めてくれると。
「少なくとも、恋心を見抜かれなかったのは、エレメリアンが夢見るチェリーなだけで、女の子の複雑な思いなんてわからないだけです。慧理那さんは総二様のことをちゃんと好きですよ。……って言うのも変な話ですけど……」



　自分の発育に不満のある慧え理り那なにとって、その途方も無い柔らかさが、胸がもたらす感触などとは到底信じられない世界だったが――とても、安心できた。
「私も総そう二じ様のこと、大好きですから。同じ相手を大好きだからこそ、その思いが本気だってわかるんです。慧理那さんも……それに、今トレーニングルームを破壊してるでしょう、どこかの蛮族さんも」
　きっと、こんな豊かな胸に包まれれば、誰だれもが安心できるのだろう。もちろん、総二も。
　胸のことで愛あい香かがいつもトゥアールと喧けん嘩かしている理由が、少しわかった気がした。
「わたくしの方こそ、ありがとうございます、トゥアールさん……。話せて、すっと胸のつかえが取れましたわ……」
　トゥアールへ振り向き、心からの笑顔で応こたえる慧理那。
　ムラッ、という擬音めいた何かが聞こえた気がしたが、慧理那は水音と納得して特に考えないようにした。……しかし。
　何な故ぜか、取れたはずのつかえが、さらに邪悪さを増して慧理那の胸に出戻りしてきていた。
「あの、トゥアールさん」
「本当、難儀なものですね、同じ殿方を好きになってしまうって……うふふ」
「トゥアールさん！　手の動きが……!!」
「でも、青春って感じで、キュンとしますよね」
　ポーカーフェイスどころか慈愛に溢あふれた微笑ほほえみを崩さず手だけを犯罪稼働させてセクハラをするという、地上最悪の変質者が本性を現してしまっていた。
　真面目限界タイムリミットをオーバーしてしまったのだ。
「はあ、はあ……ああ、すべすべ、ぷにぷに……やっぱこれですよね」

「ひゃっ……トゥアールさん!?　ま、待ってくださ……！　んっ、ゆ、指がっ……！」
　邪悪な両の五指が、慧理那の無む垢くな柔やわ肌はだを遠慮なく這はい回る。
　制裁を加える愛香もおらず、慧理那の貞操が絶体絶命の危機に迫ったその時――トゥアールは、止まるはずのない手の動きを止めた。
「はっ……脱衣所に人の気配!?　総二様ったらもう！」
　一応ちゃんと惚ほれた男の方を優先するという果てしなくギリギリの矜きよう持じを見せ、トゥアールは水みず飛沫しぶきを巻き上げ、一足飛びで浴槽から飛び出した。
　慧理那の眼前に存分に生尻を晒さらしながら、浴室の扉を勢いよく開け放つ。
「総二様っ、そんなこそこそ鑑賞されるなんて水くさい！　今なら慧理那さんとバリューパックでお買い得ですから存分に――」
　雫しずくをしたたらせながら、トゥアールが固まる。そこにいたのは、総二ではなかった。
「……あ……」
　悪いた戯ずらを見つかった子供のようにしゅんとしているのは、イースナだった。しかし、彼女の格好が悪いた戯ずらでは済まない。
　上半身裸、下半身も下着一枚……ただし、女性用ショーツではなく、はいているのは男物のトランクス。もちろん、この家でそれをはくのは、総そう二じ以外にありえない。
　トゥアールの下で数時間修行した慧え理り那なと比しても月と太陽ほどの差がある、ご意見無用のＨＥＮＴＡＩさんがそこにいたのだ。
「何してるんですかあなたはあああああああああああああああああああああああ!!」
「わ、私は……お世話になったお礼に、総二さんの洋服、洗濯してあげ

たい、って……」
「いやそれ総二様の脱いだトランクスでしょう⁉　洗濯じゃなく窃盗じゃないですか‼」
　慣れないツッコミでトゥアールも口滑りが悪い。普段通りのイースナの方が優勢だ。
「だ、大丈夫です……総二さんの部屋の椅い子すの上に、ぱんつを脱いで置いてきましたから……」
　つまり、他人の家に無断で上がり込み、部屋に侵入し、通報もののプレゼントをフォーユーしただけでは飽き足らず、その危うい格好で二階から一階まで悠々と降り、怪盗ノーパンガールとなって予告状もなく脱衣所から男のパンツを盗むという蛮勇をかましたのだ。
　トゥアールも、未いまだ浴槽から出ずのぼせそうになっていた慧理那も、ただ唖あ然ぜんとしている。
「お先に、失礼、しまーす……」
　変身前のこもった口調でアイドルチックに業務用の挨あい拶さつを終えると、イースナは総二のトランクスをはいたまま脱衣所を出ていってしまった。
「はっ⁉　な、何てこと、対愛香さんに特化した反応速度になってしまって、他の上級者には追いつけないなんて⁉」
　全裸で歯は噛がみしながら立ち尽くすトゥアール。それがあまりにナチュラルな全裸なので、慧え理り那なも気恥ずかしさより憧あこがれが先行してしまったようだ。
「な、何か堂々としていればかっこいいですわ……わたくし学びました、トゥアールさん‼」
　逮捕・懲役レベルのセクハラを受けた直後にもかかわらず、汚れなき瞳ひとみで師を仰ぎ見る慧理那。
　その邪悪な女神像を見て慧理那がよからぬ学習をしようとしているの

が心配だが、トゥアールはくるっと回れ右していよいよ堂々とその裸身を慧理那の前に晒さらした。
　慌てて視線を逸そらす慧理那に、トゥアールは真ま面じ目めな表情で告げた。
「……慧理那さん。これから特訓の仕上げです。女としてアピールでイースナに負けるわけにはいきません!!」

◇

　クーラーにおやすみタイマーをかけ、ベッドの上に寝転ぶ。
　……椅子の上に何か乗っている気がするが、とりあえず確認するのは明日でいい。
　メールの着信数もえらいことになっていたが、それも申し訳ないが明日の朝に。
　疲れた……。時計を見る。何だかんだで午前二時。丑うし三みつ時どきだ。
　多分に冗談交じりな特訓だった気がするが、それでも慧え理り那なは真剣だったし、トゥアールも慧理那の力になろうと本気なことは伝わった。だから俺も頑張って協力しようとしたが、とにかく、その冗談部分がなかなかにハイレベルで……区切りをつける頃ころには、くたくたになってしまった。
　慧理那は、何かを掴つかめたかな。いや、正直、最近慧理那は思い詰めていたようだし、気晴らしになればそれが一番いい。不調の回復にも繋つながるはずだ。
　そう考えると、トゥアールのやり方は大正解なのかもしれない。やっぱり、そこまで見越してやってくれていたのかな。
「寝よう。明日も何か、慧理那が大切な用事があるって言ってた

し……」
　目を閉じる。一分と待たずに、深い眠りに落ちていけるような気がした。
　……気のせいか、今、階段が僅わずかに軋きしんだような。
　忍者のように気配を殺して歩を進めるはずが、一人が階段の踏み板を軋ませ、もう一人がそれを諫いさめるために立ち止まって結局自分も音を立ててしまったような軋み不協和音、とか。
　なーんて……何を考えてるんだ、寝てしまおう。寝返りを打って、入り口に背を向ける。
　チッ。
　金属が一瞬で寸断されるような奇妙な音が、一瞬だけ聞こえた。例えば、ドアの鍵かぎとか。
　そしてドアが開き、やはり一人がギシッと音を立ててしまい、熟練者のもう一人がそれを窘たしなめるような調音。仕舞いには、床にコロコロローラーを転がすような伴奏まで聞こえる。
　初秋の虫の合唱にしては、風流ではなく不安を感じる。とにかく疲れているんだ、幻聴はここまでにして、早く眠──
　ギッ、と、クローゼットが開く音。もはや、ような、でさえない。
「ふ……む……すふぅうううううううううううううう」
「しゅふーうううう」
　今度の合唱は、吸引音の輪唱だ。後パートの方が、やや吸い込み音が可愛かわいらしい。
　少し寝苦しくなり、寝返りを打つ。生温かいものが頬ほおに垂れる感覚があった。

　いくらなんでも眠りに落ちがけの幻とは思えない。
　ゆっくりと瞼まぶたを開く。

　薄暗がりの中、徐々に像を結び始める二つの影。
　誰だれかが、俺に微笑ほほえみかけてくれているようだ。

（――――天使……）

「「うへへへ…………あっ」」
　……の、ような悪魔の笑顔……ですらない、ただの笑顔の悪魔だった。

「うっぎゃああ!!」

　史上最高のデジャブに一気に意識が引き戻され、タオルケットを撥はね除のけて俺は飛び起きた。
　全身タイツの慧え理り那なとトゥアールが、よだれを垂らしながらベッドの横で目を見開いていた。
　パワーローダーで命からがら宇宙空間に放り投げた地球外生命体が、続編で二体にパワーアップして現れたかのような恐怖だ。
「何してんだ二人とも!?」
　ベッドから転がるように降りてドアまで駆け寄り、電気を点つける。
　ご丁てい寧ねいに色分けされており、トゥアールの白とは別に慧理那のタイツは真っ黄色だ。
　そのツインテールの神々しさをもってしても、中和するのは難しいショッキングカラー。
　眠たいのか、眼を可愛かわいらしくしばたかせている。
「観み束つか君！　あの……イエローのテイルギアの不調を回復するに

は、観束君の、遺伝子のデータが必要で……」



カンペらしきスケッチブックを掲げるトゥアールをチラ見しながら、全身タイツの慧え理り那なが一生懸命訴えてくる。

そういえばこれ、本気で信じそうになったんだよな、俺……。

「さあさ総そう二じ様、特訓の総仕上げです！　私も混ざりますから三人で一緒に頑張――」

瞬間。

部屋のドアに、青い閃せん光こうが幾条も走り抜けた。

切り分けたケーキのようにバラバラになり、ドアの木片が床に落ちる。

その先にいたのは、目が据すわったブルーだった。

俺の部屋のドアは何度壊されればいいんだ。あいつが、一体何をしたというんだ。

「あ、あ、愛あい香かさん!?」

「そっちの修行が終わったみたいだから、あたしも特訓切り上げて、来ちゃった」

来ちゃったは来ちゃったでも、地獄の底から這はい出て来ちゃった、と言わんばかりの猛気をたぎらせながら、手にしたウェイブランスはドア殺しの罪を気負うことなく鳴動している。

「いくらなんでも生身で遅れを取ったからってテイルオンしちゃうのは大人げなさ過ぎませんか愛香さん!?」

そうは言うけど、初犯じゃないよなテイルギア着てトゥアールと喧けん嘩かするの。

「会長。一つだけあたしからもアドバイスさせて。強くなるために必要なこと―それは、非情になることよ」

「あっ、その台詞せりふ、よくヒーローの仲間が言ってますわ!!」

なるほど、教えられるまでもなく知っていたか、慧理那。

でもさ、そのヒーローの仲間も、そうは言いつつも非情になりきれな

い不器用さが魅力だったりするんじゃないかな。
「さあて、特訓も終わったことだし……もういいわよね？　トゥアール」
「や、やめ、あっぎゃあああああああああああああああああああああああああああ!!」

　……俺の仲間、ホントに非情になるんだよ……。

◇

　翌日曜の朝、俺は母さんに、七時という休日らしからぬ早朝に起こされた。
　もっとも、起こされるまでもなかった。あれだけ疲労を重ね、しかも真夜中に怪獣が自室で暴れるというハプニングに見舞われてなお、六時にはもう目が覚めてしまっていたからだ。
　睡眠中枢を直撃する、言い知れぬ予感。かつてない恐怖が、迫っているような気がした。
　部屋から一階に降りてリビングに向かうと、意外にも俺より眠気は強いはずの慧え理り那なが目をこすりもせずに夢中でヒーロー番組を観ている。あの慧理那が挨あい拶さつに生返事なところを見ると、ヒーロー番組を観る時の集中力は格別らしい。
　以前聞いたことだが、リアルタイムで観るこだわりがあるのと、夜更かししても基本的に起床時間は変えないということだ。
　その隣では、一応慧理那と同じ部屋で寝るという約束は果たしたものの、一晩中回復に専念しても追いつかずヒーロー番組の今週の敵怪人と酷こく似じした全身包帯姿のトゥアールがソファにもたれていた。あと一時間もすれば、と言っており、精確な回復体内時計は健在のようだ。

「じゃ、総そうちゃん、朝ご飯食べたらお店に来てね」
　母さんにそう言われていたので、手早く着替えと朝食を済ませて店に向かう。
　しかし、今度は自宅から喫茶店までの連絡通路で、足が鉛のように重くなった。
　仕舞いには、喫茶店へのドアを開けようとした瞬間、手が強力な静電気に弾かれたように、一瞬ドアノブを握ることを拒否した。不安で耳じ閉へい感すら感じつつ、ドアを開け、店内を見渡す。
　愛あい香かの誕生会の時のように、丸テーブルが真ん中で合わせられていた。それ以外、特に何か変わった様子はなく、ほっと胸をなで下ろす。
「何かイベントがあるのか？」
「うふふ、慧理那ちゃんのお願いでね、午前中は貸し切りなの」
　珍しく店は本当に貸し切りで、外にはＣｌｏｓｅｄの札がかかっているのも確認した。
「桜さくら川がわ先生の誕生日か？　でも、まだ先のはずだけど……」
　カウントダウンが七日を切ったら何をするかわからないという言葉を思い出し、身み震ぶるいする。そのカウントダウンのカウントダウンまで、もはや幾いく許ばくの猶ゆう予よもない。俺が感じていた不安は、桜川先生だったのか……？
　不思議に思いながらも、とりあえず簡単な準備を手伝っていく。
　一〇分ほどしたところで、愛香も合流してきた。
「今日、何があるか知ってるか？」
「あー、うん。なんだろね」
　愛香のツインテールが後ろめたそうにしているのは、早朝で気け怠だるそうにしているのと見間違えているわけではないと思うが……。
　包帯の取れたトゥアールと、日曜の儀式を完かん遂すいした慧理那も

合流し、時間は九時一分前。
　特に飾りなどは無いが準備は終わったらしく、皆合わせた丸テーブルに着席していた。
　そして、まるでその時間を待ちわびていたかのように、九時ピッタリでカウベルが鳴った。
「お邪魔します」
　ドアを開けて入ってきたのは、桜川先生だった。
「何だ、やっぱり桜川先生の誕生会だったのか。それなら別に前みたいにお客さん──」
　言い終えることなく、意識だけが深海に放り出されたように周囲が無音になった。

　感覚が研ぎ澄まされる。ただし、叩たたきつけられる信号は危機感一点。
　寝不足と、先ほどまでの恐怖で感覚が鈍っていたのだろう。俺がツインテールの気配を感じ取るのが遅れたことが過ちだった。
　今ならわかる。桜さくら川がわ先生のツインテールと、それを覆い尽くすかのように背後から歩みを進める、巨大なツインテールの気配が。
　そして、俺が何な故ぜに、ここまで潜在的な恐怖を感じていたのか。
　ツインテールな人に恐怖を感じるという、俺にとってタブーであるはずの危機感が、二律背反となって精神を責め苛さいなんでいたのだ。

　桜川先生の背後に立っていたのは──理事長・神しん堂どう慧え夢むその人だった。
「な───」
　刹せつ那なの判断を要求される局面。人は、それまでの生涯で獲得した経験に全てを委ゆだねる。

　何故理事長がここに来たのか、どんな経緯でそうなったのか。振り返れば俺以外の今ここにいる全員が知っていたような気がするが、そんな雑念を紛れ込ませる時間などない。
　理事長の視界を塞ふさぐか、母さんに後ろを向かせるか。
　自位置からの距離と遠慮のいらなさから、母さんの方をを何とかしようとコンマ数秒で俺が決断した瞬間、すでに運命は二人を引き合わせてしまっていた。
「……………………え？」
「……………………あ……」
　母さんと、続き、理事長が声を漏もらしたのが、スロー再生のように聞こえた。
　第三者の俺がどれだけ考えを巡らせようと、過去、固い絆きずなで結ばれていた二人の邂かい逅こうを止めることなど、どだい無理な話だったのだ。
「えむぴー……？」
「ごしゅ、じん、さま……？」
　無力感で膝ひざから崩れ落ちそうになる俺を余よ所そに、すでに二人の魂は数瞬の刻ときだけを縁よすがに運命の再会を果たし、十数年の過去に置き去った互いの呼び名を過あやまたずに口にし合っていた。
　俺はエムピーではなくエイチピーがガリガリこそぎ落とされていっているというのに……。
「ッ……慧え理り那な!!」
　俺は脚を踏ん張り、今度は隣の席に座っていた慧理那に手を伸ばした。
　まだだ、まだ希望は残っている！　とりあえず、この先待っているだろうおそらく普通ではない再会シーンさえ見せなければ！　後で母親同士が知り合いだったんですとだけ教えれば、美談で済む。

慧え理り那なには絶対に見せられない。

母さんには変なとこがあるって子供の頃ころから十二分に承知していた俺でさえ、母さんの中二全開な過去や俺の出生を聞いた時は、口からエクトプラズムが出そうになったんだ。

理事長を非の打ち所のない素晴らしい女性として、そして母として尊敬している慧理那が、彼女の本性と過去を知ってしまったら、心がその衝撃に耐えられないだろう。

俺が慧理那に手を伸ばすよりも先に、俺のすぐ横を轟ごう風ふうが吹き抜けていった。

「ご主人様ァ――――――――――――――――――――――――――ッ!!」

数千という陽よう月げつ学園高等部が憧あこがれる美しき理事長。

俺が目を奪われた高貴なツインテール。

慧理那が、誰だれよりも尊敬する厳しくも優しい母。

その全ての肩書きを着物もろとも宇宙の彼方にブン投げ、下着姿となった理事長はとてつもない速さで母さんの元へ駆け寄っていた。

「うおあああああああああああアクションが速すぎて追いつかねえええええええええええ!!」

俺も特訓すべきだった、周囲のとんでもない言動に対応できる精神を養うために……!!

「嘘うそ、やだ、夢みたい！　ホントにえむぴーなのね!?」

「あ、会いたかった！　会いたかったですわ――――――――――――――っ!!」

南極で主人を待ち続けた犬と、数年の時を経へてそれを迎えに来た主人のように、人の情や愛を超越した深い絆きずなを思わせる熱い抱ほう擁ようを交わす二人。

顔中の穴からエクトプラズムが出そうになった俺だが、救わなければ

いけないツインテールを思い出し、我われに返った。
　事情を知っていたのは、当人たち以外に俺一人。
　桜さくら川がわ先生も、愛あい香かも、トゥアールでさえも、目を丸くして固まっている。
　そして慧理那は――
「おか、あ、さま……？」
　自分の母親が下着姿できゃんきゃん歓喜に詩うたう姿を目の当たりにし、その現実を受け止め、じわじわと身体からだを震ふるえさせ始めていた。
　今さら遅いと思いながらも、俺は夏休みに借りたアイマスクを再び桜川先生に求めた。
「今持ってますか、この間のあれ――って何で桜川先生がつけてるんだよ!!」
　桜川先生は立ち尽くしたまま、アイマスクをして現実逃避していた。
「夢だ……これは夢だ……奥様が……」
　さっきから、夢という言葉のクオリティがどんどん落ちていっている。
「何よもう、慧理那ちゃんってえむぴーの娘さんだったの!?」
「それでは、婿むこ殿はご主人様の……!?　ああ、なんて運命……！　何て日でしょう!!」
　俺の台詞せりふだあああああああああああああああああああああああああ!!
　母さんがコースターをフリスビーのように飛ばし、それをまさしく子犬のような動きで追いかけ、口でキャッチして戻ってくる理事長。この、狭い店の中でだぞ。
「やだわ、お互いおばさんになったのに、身体からだは覚えてるのね！」

「まったくですわ、今や夫のいる身……しかし、細胞の記憶には抗あらがえませんわ!!」
　何でこんな超人アクションを体得してるんだ、この人……母さんのせいか!?
「え、慧え理り那な、一旦外に出よう!!」
「…………………………観み束つか君は……知ってましたの……？」
　心臓を杭くいで貫つらぬかれたような痛みを感じた。責めるでもなく、裏切られたと嘆くでもなく、ただ、どうして、と、その無む垢くなツインテールが俺に訴えかけてくる。
「……ごめん……!!」
「あの時……最初に理事長がお店に来たいって言った時誤ご魔ま化かしたのも、そーじがこれを知ってたからなのね……」
　愛あい香かもようやく口を開く。
「さあ〝ケルベロス〟、二十年の時を経へて、再び私に聖なる契りをなさい!!」
「ああっ、まさか現世で再びその名で呼んでいただけるなんてっ……」
　見る影もなく陶酔していく理事長。
「やめろおおおおおおケルベロスは俺たちが倒した、もうこの世界にケルベロスはいないんだああああああああああああ!!」
　錯乱のあまり俺は、迂う闊かつなことまで口走って二人を止めようとした。だが、ＳとＭを極とした磁界がバリアーのように二人を覆い、どうしても二人の間に立ち入ることができない。
「うふふふふふ、何かしらその邪魔な布きれは!?　契約の儀式は生まれたままの姿でと言ったでしょう！」
「かしこまりましたわご主人様、今こそ再契約を!!」
　普通に、欠伸あくびをするぐらいの気軽さで、理事長は最後の二枚をも脱ぎ捨ててしまった。

「権威が脱衣パージしていく……」
　トゥアールが、ビルを砕き闊かつ歩ぽする怪獣を仰ぎ見る無力感に満ちた一般人のように呟つぶやく。
「愛香さん、昨夜の私への蛮族フェスタ、やり過ぎだったんですよやっぱり……私、脳のリカバリーが追いつかなくて幻覚が見えますもん……」
「悪かったわね……でもあたしもその前にあんたに蹴けりを迎撃されたショックで、ちょっと脳細胞がブッ飛んだみたい……白昼夢が見えるわ」
　囃はやし立てるでもなく、何やってるんだと諫いさめる気力も無く、次世代の少女たちは力無く椅い子すに腰を下ろしたまま、立ち上がることさえできない。
　理事長は、はっとして俺に向き直り、すでに紅潮していた頬ほおをより朱に染めた。
「わたくしったら、娘や婿むこ殿の前でこんなはしたない格好をっ……ち、違いますのよ、昔もこうするのはご主人様の前でだけでしたの……」
「私の息子に三十過ぎの身体からだを晒さらしてどんな気持ちかしら？」
「その前に俺たちの気持ちを考えろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　メフィストフェレスと化した母親に、歯し牙が無き人類として精一杯の抵抗をする。
　愛あい香かたちが現実を見失ってしまった今、俺がくじけたら誰だれが慧え理り那なを救えるというんだ！
　はしたない格好と言っておきながら俊敏に動き回り、理事長は和服と一緒に放った手提げ鞄かばんの中から、首輪のようなものを取り出し

た。
「あ、あの、ご主人様、できればまたこれを……」
　それを恭うやうやしく母さんに差し出す。
「……やだわ。懐かしすぎて素に戻っちゃうじゃない……。いつもこれつけて、登校してたわね……ケルベロス……」
　あははは、うふふふ、と乾いた声が響く。
「すごい理事長、一児の母なのにメッチャ肌綺き麗れい……。染み一つ無い……」
「愛香さんったら、エロゲーの人妻ルートみたいなこと言っちゃって……」
　何て生気に乏しい会話なんだ、とても愛香とトゥアールのものとは思えない。
「理事長……母さん……そろそろ一旦落ち着いてくれ」
　何とか理事長を見ないようにしながら、根気よく説得を試みた。
　そこで二人はようやく、俺の言葉に耳を傾けて……いや、二十年前の過去から現代に戻ってきてくれた。
「ごめんなさい。驚かせてしまいましたわね、慧理那……」
　首輪をつけた理事長は全裸で振り向くと、いつもの慈愛に満ちた母の顔で優しく慧理那に語りかけた。服を着なさい。
「でもね慧理那。以前話しましたわよね……。母も、あなたと同じ年の頃ころ、色々な悩みを抱えていたと。その中には、まだ厳げん粛しゅくであった神しん堂どう家の掟おきてもありましたわ……。重圧に潰されそうだったわたくしを救ってくださったのが、この、婿殿の母上……未み春はる様だったのです……」
「私は苗字変わったけどね……。そっか、慧理那ちゃん、苗字、その神堂だったんだ。ごめんなさい、ずっとケルベロスとか呼んでいて、えむぴーの苗字、覚えていなかったのね……」

　思い出を手た繰ぐるように、大切な記憶を一ページ一ページめくるように、母さんは神堂、と優しく呟つぶやいた。隣の人に服を着せてください。
「暗く辛つらいだけだった学生生活が、ご主人様のおかげで本当に素晴らしいものになったのです……。本来恥じて抑え込むべきこの神堂の女の体質も、ご主人様のおかげで解放できましたわ」
　その一瞬、慧理那がはっと息を呑のんだように見えたが……理事長は続けた。
「あなたには母のこの姿は理想とかけ離れて映ったかもしれません……。ですが、これもまた偽いつわらざる母の姿なのです」
「あの理事長、真ま面じ目めな話ならとりあえず服着てください」
　とうとう俺は口に出して着衣を促うながした。断固として服を着ないので、こっちも本気だ。
「けれど、本当に運命とはあるのですわね……。まさか、こうして親子二代にわたって、縁ができるなんて……。婿むこ殿の影響であなたが変わったことも、ツインテールを受け入れたことも、偶然では無かったのですわね、慧え理り那な」
「服を着ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　他人との繋つながりが薄まったといわれて久しい昨今だが、俺は、叱しからなければいけない時は他人の親であれ大声で叱ることのできる男でありたい。それが、ツインテールでもだ。
「ああっ……何て素敵な命令……っ！　婿殿は婿殿ですから、これからずっとこの叫びにわたくしは──」
「お母様っ!!」
　根限りの声を出して、慧理那は理事長の言葉を遮った。
　しかし、何を言うかまでは思い至っていなかったのだろう。

　慧理那はそのまま、全裸の理事長を前に押し黙ってしまう。
　タイミングがいいのか、悪いのか……その時、トゥアールの胸元が震ふるえ、僅わずかな光を放つ。
　ＰＣなど情報受信端末を持っていない時の携帯探査器――エレメリアン出現の合図だ。
「嘘うそでしょう、こんな時に……!?」
　俺は落ちていた着物を手にして理事長の肩にそっとかけると、
「母さん、理事長を頼む!!」
「え、ええ!!」
　頼むも何もないとは思うが、こっちの秘密だけは理事長に知られるわけにもいかない。
　アイマスクを外した桜さくら川がわ先生も誤ご魔ま化かすのを手伝ってくれたおかげで、理事長に怪しまれることなく俺たちは喫茶店の奥の通路へと駆け込む。エレベーターの中に入ると、緊張から解放されたように俺たち全員にどっと疲れが押し寄せた。
「慧理那、大丈夫か？　疲れてるなら無理するな、俺と愛あい香かだけで行くから」
「いいえ、ちょっと色々ありすぎて混乱してしまって……。不謹慎ですが、何も考えずに戦って、平静を取り戻したいのです」
「そうね。身体からだを動かして一旦綺き麗れいさっぱり忘れた方がいいよ。あたしもそうする」
　その提案を肯定し、愛香は慧理那の隣に並んだ。
「あのさ、会長。最初はちょっと驚いたけど、理事長の意外な面が見られて、逆に親しみが湧わいたかも。あたしたちってほら、傍はたから見ればあんな風に騒いでるのかなって思って」
　ナイスフォローだ愛香。俺は頷うなずいて続けた。
「そうだよ、俺の母さんだってさ、慧え理り那なは会ってすぐに幹部コ

スとかしてるの見たから当たり前に思えてたかも知れないけど、初めてあれ見た時は意外とショックだったぜ？　でも今じゃ愛あい香かの言う通り、逆に親近感が湧わいたっていうかさ。親にそう言うのも変な話だけど」

「……ええ。そうですわよね。すみません、心配していただいて」

　まだぎこちなくだが、慧理那に笑顔が戻った。出撃の直前だというのに、ほっとする。

「観み束つか君は未春さんとお母様の関係を知っていたから、二人を会わせまいとしてくださったのですわね……わたくしがショックを受けないようにと」

　慧理那は弱々しくそう零こぼした。

「それが正しかったのかは、ばれた今でもわからないよ。さすがに俺たちはかなり困惑したけど、再会した母さんたちは、やっぱり嬉うれしそうだったもんな……」

　全裸は駄目だ。ワンちゃんも駄目だが……二人を頑かたくなに会わせまいとしたのは、俺のいらぬ気遣いだったのかもしれない。やるなら、理事長が既知の人であることを事前に母さんに伝え、再会をもっと冷静にできるようにすべきだった。互いの両親が親友同士だったことを知りながら、それを隠し……他に頭が回らなかった、俺の落ち度だ。

「二〇年ぶりに会ったんだ、はしゃぐのは当然さ。学生の頃、親友だったみたいだもんな……」

「確かに、色いろ褪あせない絆きずなを感じましたわ……」

　まだ、ツインテールに陰りが見える。慧理那も、吹っ切れてくれればいいんだが。

　こんな時一番おちゃらけて慧理那を励ましそうなトゥアールが、ずっと無言のままだ。

「とにかく、さっさと戦闘を終わらせて戻らないと。……会長もさ、

そーじみたいに大声で文句言ってやればいいのよ。はしゃぐにしても限度があるんだからさ。ね？」

「ええ……」

　それきり、俺たちは四人とも黙り込んでしまった。

　長い──。

　一〇〇〇メートルもの距離をあっという間に繋つなぐはずの超科学エレベーターが、今日はやけに遅く、時間も長く感じられる。

　何でもいいから話題をと切り出そうとしたのは、俺も愛香もトゥアールも同時だっただろう。

　しかしそれに先んじて沈黙を破ったのは、慧理那のひどく疲れた声音だった。

「……わたくし、脱ぎたくなってしまったり、観束君をご主人様と呼びたくなったり……恥ずかしいことですけれど、それだけはわたくしが自分で手に入れた、大切な宝物だと思っていましたが……それさえも、ツインテールと同じで神しん堂どう家の財産だったのですわね……」

「───慧理那？」

　俺が慧理那を振り帰ると同時、エレベーターが地下基地に到着する。

　コンソールルームに辿たどり着く頃ころには、慧理那は再びぎこちない笑顔になっていた。

「テイルオン……」

　溜ため息いきをつくかのように力無くそう呟つぶやくと、慧え理り那なは何事もなくイエローに変身。

　愛あい香かと俺も続いて変身し、出撃ゲートへと向かう。

　二人から数歩下がって、少しだけ様子を窺うかがわせてもらう。

　……大丈夫だ。愛香はもちろん、慧理那のツインテールも多少の動揺は見られるが、いつもと変わりはない。多少元気がないのは、仕方のないことだ。

「ッ────!?」
　現実逃避をし過ぎて、幻覚の敷居が低くなってしまったとでもいうのか。俺は、見えるはずのないものが見えてしまった。
　慧理那の……イエローのテイルギアから、煙のように、黒い粒子が立ち昇っている。
「待て、慧理那──」
　声を上げて制止しようとした瞬間、二人は転送ゲートの中に消えて行ってしまった。
　言い知れぬ予感に襲われながら、俺は二人の後を追い、ゲートに飛び込んだ。

◇

　ゲートの転送ポイントを抜け、俺とイエローは髪紐属性リボンを発動したブルーの手に摑つかまって飛ひ翔しようしていた。
「富士山……だよな。登山客が狙ねらいか？」
　日本の象徴の一つでもある霊峰富士──その麓ふもとでは、逃げ惑う登山客を戦闘員アルティロイドが追いかけていた。
「モケー!!」
「モッケッケケー!!」
　着地するやいなや一直線に戦闘員アルティロイドたちへと疾駆し、掌しよう打だで空高く打ち上げるブルー。
　その間に、俺とイエローは登山客を避難誘導する。
「おお、テイルレッドじゃ……ありがたや、ありがたや」
「実物はＴＶよりももっとめんこいのう……」
　登山着のおじいさんおばあさんが俺の前に正座し、手を合わせはじめた。

「いや、早く逃げてください!!」
　しかし、麓にいるのは戦闘員アルテイロイドばかり。周囲の戦闘員アルテイロイドをあらかたブッ飛ばし終えたブルーは、そのまま登山道を進んでいった。
「今日は何よ、登山客狙いってことはアウトドア女子目当ての属性力エレメーラでもあるの!?」
　分析を終えたトゥアールが通信してきた。
『山頂付近にかなりの数の学生がまだ残っています。休日なのにおかしいと思いましたが、どうやら修学旅行中の中学生一行のようですね……』
　それはまずい。早く避難させないと、焦って変な方向に逃げでもしたら、遭難しかねないぞ。
『その中学のＨＰを確認しましたが、修学旅行の目玉イベントが……〝富士山頂で告白大会〟だそうです』
「告白!?　……ってことは……」
「恋愛属性ラブのスタッグギルディですわ……!!」
　ブルーとイエローが続けて驚く。どうやら、すぐに出現したエレメリアンに思い至ったようだ。先日の分断戦闘で逃がしたっていう、もう一体のエレメリアンか！

　山頂に到着すると、かなりの数の学生が一固まりに集まっていた。
　その輪から外れ、数組の男女がペアになって所在なさげに立っている。
　彼らを見つめるのは━持参したらしい椅い子すに座る、二体のエレメリアンだった。
「スタッグギルディ……と、もう一体!?」
　クワガタムシのような鋏はさみ状の二本角を持つ細身のエレメリア

ン。もう一体は、マッシブな一本角のエレメリアン。こちらはカブトムシ型だろうか。
「我われらのことは気にせず、告白するがよい!!」
　腕組みをしながら真顔で、学生ノリの野次じみた叱しつ咤たを送るカブトムシ。
　ギャラリーというより本陣で泰たい然ぜん自じ若じやくと戦局を見つめる大将武士のような貫かん禄ろくがあるため、学生たちは一層どうすればいいかわからずにいるのだろう。
　俺は一気に跳躍し、学生の集団とエレメリアンたちの中間に着地する。
「みんな、早く逃げるんだ!!」
　しかし、逃げるどころか学生たちは俺の姿を見るや、我われ先さきにと殺到してきた。
「好きです！」
「私たち、つき合っちゃわない!?」
「結婚してください!!」
　男女区別無く俺に殺到する学生を見て、カブトムシの方が拳こぶしを握り歯は噛がみする。
「むう、何というテイルレッドの魔性の色香！　始まる前に恋が終わってしまうとは!?」
　トゥアールが無念なのか嬉き々きとしているのか判別のつかない声こわ音ねで通信してきた。
『あー、これ、避難した後我にかえって、告白寸前だった男女が気まずくなってその後自然消滅するパターンですね！　男子も女子もレッドに告白ですから……』
「俺のせいじゃないぞ!?」
　業を煮やしたブルーがわざとのっしのっしと足を踏みならして学生た

ちに近付く。
「やべっ、テイルブルーだ！」
「逃げろ!!」
　すでに自分の役割と効能を自覚してしまったブルーのツインテールは、どことなく寂しそうに揺らめいていた。
「属性玉エレメーラオーブ――腋属性アームピット！　皆さん、こちらに従って避難してください！」
　イエローが属性玉変換機構エレメリーションで腋属性アームピットを発動すると、光のトンネルが出現し登山道に避難路を作り出した。確実に避難経路や目的地までのルートを導き出すマーカーの役割も果たすらしい。
　まだ着衣状態ではイエローの方がブルーよりも世間的に信頼度はあるのか、イエローの避難誘導に従って速やかに学生たちが避難していく。
　場所が場所だ、こっそり戻ってきてギャラリーになることもないだろう。
　……そう、場所が問題だ。有名な山だけあって土産みやげ物屋など何棟か建物はあるが、基本的には広大な森林が埋め尽くしている。思いきり戦っても、被害が少ない場所――奴やつらが決戦の地として選んだ可能性が高い。
「大丈夫さ、兄さん。真実の恋に気付いたとも言えるからね」
　告白寸前の男女が気変わりしたことを、スタッグギルディは興味深そうに見守っていた。
「僕の持論だけれど……愛は不変のもの。けれど恋は、時に奪うもの。移ろうのもまた、恋心の魅力さ」
　ブルーは忌いま々いましげに鼻を鳴らし、
「ホンットにくだらない持論ね……！　今日はもう尻しつ尾ぽ巻いて逃げたりはしないでしょう？　決着をつけてやるわ!!」

スタッグギルディに向け、ウェイブランスを構える。
「その前に私も名乗っておこう。私はビートルギルディ……恋愛属性ラブという極美に誘われ、このスタッグギルディと義兄弟の契りを交わした戦士だ!!」
見た目の通りだ。これまで、何度かその名を耳にしたエレメリアン。
「ビートルギルディ……お前が美の四心ビー・テイフル・ハートの隊長か!!」
「いかにも!!」
マントのように揺らめいていた背の翼が、力強く立ち上がる。
闘気を解放したビートルギルディの威圧感は、凄すさまじいものがあった。
それぞれ、美の持論を展開することが多かった美の四心ビー・テイフル・ハートの戦士たちだが……その頂点に立つのは、恋というもっとも愛に近い感情を持つ人間を愛めでるエレメリアン。
「……じゃあ、いくよ、兄さん」
「うむ……!!」
しかし、そのビートルギルディを制するかのように一歩前に進み出たスタッグギルディからは、覇気が感じられず、頼りなささえ覚える。
ブルーに続き俺とイエローもブレイザーブレイド、ヴォルティックブラスターを構え、臨戦態勢を取る。対するスタッグギルディの頭上に、プラズマを練るように光の球体が出現した。
「恋愛断技ドロウ・イン・ラブ――――!!」
スタッグギルディの二本角から、水色の光線が拡散放射される。
想像以上の広範囲に放たれたことで、俺たちは三人とも避けられずに直撃してしまった。
『皆さん、大丈夫ですか!?』
トゥアールの通信に、頭を振りながら頷うなずく。

「……大丈夫、拡散させすぎて威力は大したことないわ……！」
　反撃に転じようと脚を踏み込んだブルーはそのまま体勢を崩し、地面に膝ひざをついてしまった。
「……あ、れ……？」
「どうした、大丈夫かブルー⁉」
　咄とつ嗟さに駆け寄った俺もまた、身体からだから力が抜け、ブルーの手前で崩れ落ちた。
「こ、これは……まさかさっきの技で……⁉」
　ひどく身体がだるい。風か邪ぜで熱が出た時のように、節々が熱くなっていく。まさか、毒か何かか⁉
「はあ、は、ぁ……」
　ブルーの呼吸が荒くなっていく。俺よりさらに深刻そうだ。
　俺は震ふるえながら手を差し出したが――直後、乱暴に手首を摑つかまれた。
「ふ、ふ、ふふふ……」
「……え？」
　ブルーが、目を見開き、口くち端はを釣つり上げ、俺の手首をねじり上げてきた。
「くっ……どうしたんだ⁉」
「もう、我慢、できな……」
　突如ブルーは俺の前で両手を広げると、そのまま全力で俺を抱き締めてきた。
　テイルギア越しに伝わる温ぬくもりに戸惑う。そして、ふわっと眼前に舞うツインテールの美しさに意識が少しだけ回復したのも束の間―ギチギチと、不快な音が身体の裡うちから聞こえ始めた。
「うっ……⁉　ぐああああああああああああああああああっ‼」
　全身を激痛が走り、たまらず声を上げる。

ブルーは、抱き締めるだけではなくそのまま両腕に渾身の力を込めてきたのだ。

両足をばたつかせる。胸を合わせるように持ち上げられているため、地面に足がつかない。

テイルギア装着者同士で条件が互角な以上、生身で愛あい香かの腕力を受け止めているようなものだ。加えて、俺は身体に力が入らず、満足に抵抗もできない。

フォトンアブソーバーが衝撃緩和の限界を超え、身体にダメージが伝わってくる。

ブルーの全力のベアハッグに、全身の骨という骨が軋きしみを上げ始めた。

「あ、あんたが、あんたが悪いのよ、鈍いし、気付いてくれないし、ならもう直接──」

「し、しっかりしろ……！　ぐ、う……」

駄目だ、ブルーの目はもう焦点が合っていない！

『何やってるんです愛あい香かさん、ただでさえ獣なのにもはやケダモノそのものなツラになってますよ!!　……総そう二じ様、気をしっかり持ってください、今攻撃の特性を分析しています!!』

トゥアールの悲痛な通信も、イヤホン越しに僅わずかに聞こえる環境音のように遠い。

痛みで意識が朦もう朧ろうとし始めたせいか、抗あらがいがたい欲望が膨ふくらんでくるのを感じた。

「ブルー……」

無防備なツインテールが目の前にある。

二の腕はベアハッグでホールドされているが、肘ひじから先は動かせる。とうとう、込み上がってくる衝動に屈してしまった。

さわさわと。

　俺は、本能の赴おもむくままにブルーのツインテールを揉もみしだいていた。
　ブルーは何な故ぜか眉み間けんに皺しわを寄せ、
「まどろっこしいのよもっとなんかしろ――――――――――――――――――っ!!」
　ブルーは唇くちびるをとがらせ、ぐっと頭を仰のけ反ぞらせた。
　そして――
「むちゅ――――――――――――――っ!!」
　鎚つちを振り下ろすかのように、引き絞った頭を猛然と俺に撃ちだしてきた。



ベアハッグからの……ヘッドバットか⁉　いかん……これを食らったら、頭ず蓋がい骨こつが割られる‼
　揺れるブルーのツインテールの方へと本能的に頭を逸そらし、迫り来る死のヘッドバットを何とか躱かわした。
「さすがのテイルギアも、恋愛断技ドロウ・イン・ラブまでは防げなかったようだね。単純だからこそ強力。〝ある感情〟を暴走させる、僕の最大の技さ」
「あまり説明をするな、スタッグギルディ。どうやらブルーの思いは相手に知られておらぬようだ、無粋な告げ口になってしまうやもしれぬ。一方通行を見守るもまた、一興――」
　ビートルギルディたちが何か言っているが、相変わらず全身を苛さいなむ痛みと明滅する意識の二重苦で、ヒントを得ようとするどころではない。
「トゥアール……これは、精神攻撃なのか……⁉」
『洗脳や操作の類たぐいでは無いので、テイルギアでも防ぎきれなかったようです……おそらくは、感情を活性化させて本能のままに暴走させる技……！　総そう二じ様と愛あい香かさんで効果に差があるのは、そのためです！』
　おぼろげな意識の中、トゥアールの通信を知覚する。
　だからさっきツインテールを触りたくなったのか……あれは普段からやっていることのような気がするが……。そうなると愛香は、日ひ頃ごろから俺を痛めつけたいと思っていたのか⁉
　いや、最近組み手とか全然してなかったから、そのせいかもしれない……‼
『それよりイエローが膝ひざをついたまま動かないんです！　イエローは大丈夫ですか⁉』
　本能を暴走させる……イエローなら、アンダースーツもろとも脱衣

パージとかしかねないぞ!!
「そうだ、イエローはどうなっ……あっぶねえ!?」
　二度目のヘッドバットを躱す。
　横目で確認したイエローは、膝立ちで俯うつむいたままピクリとも動かない。イエローも、技の影響は薄かったのか？
「――どうやらその思い、正念場のようだな。テイルイエロー」
　イエローを一いち瞥べつすると、何かを悟ったようにビートルギルディは独りごちた。
「スタッグギルディよ。ツインテイルズの無力化は完了した。後は任せたぞ」
「うん、行ってらっしゃい……兄さん」
　ビートルギルディは俺たちに背を向け、ゆっくりと登山道を下っていった。
「お、俺たちをここで足止めするのが目的だったのか……!!」
　分断戦、精神攻撃に囮おとりの足止め……まるで、貴の三葉ノー・ブル・クラブとの戦いの時のようだ……！
　痛みが意識を取り戻し始めたが……腕を封じられているため、ツインテールを結び直せない。ライザーチェインに形態変化チエインカスタムして力任せにブルーを振り解ほどくこともできないのだ。
　俺は、プテラギルディとの戦いでブルーの暴走を止めた方法を思い出した。
「イエロー、俺の声が聞こえるか……！　俺たちに、武装をありったけ打ち込んでくれ!!」
　爆圧のショックで意識を取り戻すんだ。直撃さえ避ければ、何とか耐えられるはずだ。
　果たして声は届いたらしく、イエローは立ち上がってツインテールを地面にアンカーのように打ち込むと、全武装を展開して照準を俺たちへ

と向けた。
「う、撃てっ!!」
　解放された機銃と光線の斉射が、雷の尾を引いて迫る。三度目のヘッドバットをブルーが繰り出してきたので、俺は思いきり上体を逸そらし、バランスを故意に崩した。
　ブルーが俺を抱きかかえたままつんのめり、地面に倒れる。
　標的を見失った爆撃が、四方八方で着弾し始めた。
「ぐっ……う……!!」
　ほとんどが地面に炸さく裂れつし、一発も直撃は受けなかったはずだが……凄すさまじい衝撃が全身を襲う。ブルーも、ようやく手を解ほどき、地面を転がった。
　ショック療法が功を奏し、だいぶ身体からだの不調も回復した。
「あ、あれ、あたし……」
　額ひたいを押さえながら、ブルーも立ち上がる。
「助かったぜイエロー……。そっちは大丈夫か!?」
「……」
　返事がない。心ここにあらずという感じで立ち尽くしているが……それより、完全脱衣形態フルブラストモードで武装を全発射していながら、脱衣パージせずに着込んだままのイエローを不思議に思う。
「くっ……こ、こんなに早く正気に戻るなんて！」
　狼狽うろたえるスタッグギルディ。
「ビートルギルディを呼び戻した方がいいんじゃないのか!?」
　俺は再びブレイザーブレイドを構え、対たい峙じする。もう二度と、技にはかからないぞ！
　ブルーもよろめきながらランスを手にしたが、イエローだけが直立不動を崩さない。
『レッド、ブルー！　やっぱりイエローの様子が変です！』

　トゥアールもイエローの様子をおかしく思ったようで、俺とブルーに確認するよう伝えてきた。まさか……俺たちと違って、まだダメージを受けていないイエローは技を完全に脱しきれていないんじゃないのか!?　俺とブルーは慌ててイエローの元へと駆け寄る。
「な、テイルイエロー……君は……!!」
　驚声に反応し振り返ると、スタッグギルディが戦せん慄りつし身体をわななかせていた。
「そうか、さっきの兄さんの言葉は……そういうことだったのか……！」
　一瞬そちらに気を取られ、再びイエローに向き直った時──俺の眼に、信じられない光景が飛び込んできた。
「────え……!?」
　イエローは、出撃前に幻視した黒い粒子を、再び身体からだ中から立ち昇らせていたのだ。
「……さっきのは、錯覚じゃなかった……!?」
　想像以上に不調が深刻そうなイエローを基地へ連れ帰ろうとすると、トゥアールが制止した。
『待ってください！　こちらでモニターしている、イエローのテイルギアの信号が消失ロストしました!!』
「何言ってるんだ、イエローは変身したままだぞ!?」
　不意に身体を襲う衝撃。気がついたら俺は、ブルーに突き飛ばされ、地面を転がっていた。
「何すんだ──」
　ブルーは、先ほどと違い、焦点の合った目で、俺ではなくイエローを油断なく凝視していた。
　イエローの手に握られた、発射の残光燻くすぶらせるヴォルティックブラスターを。

「まさか……俺に向けて撃ったのか!?」
　ブルーが突き飛ばしてくれなければ、あれを至近距離で食らっていたのだ。ただでは済まなかっただろう。
　瞬間、周囲の音全てが、大気を凍てつかせるような声に塗り込められた。

「――もう、どうでもいいですわ……」

　立ち上がった俺は見た。俄にわかには信じがたい、絶望的な光景を。
　閃ひらめいた雷の如く眩まばゆい光黄に彩られたイエローのテイルギアが、黒に染まっていく。
　いや、テイルギアだけではない。いついかなる時でも、見る者に幸福感と勇気を与えてくれた高貴な輝きを放っていたイエローのツインテールが、漆黒に塗りつぶされていく……!!
「何だ、これはっ!!　イエローに何をした、スタッグギルディ――――――ッ!!」
　ツインテールが暗黒に沈んでいくのを目の当たりにし、腹の底から噴き出すような怒りを感じる。俺は、激情のままにスタッグギルディに叫んでいた。
　しかし、術者にもこの変化は想定外らしく、スタッグギルディは当惑しながら弁明した。
「……これは……僕の技のせいなのか……!?　いや、違う！　テイルイエローの属性力エレメーラが、暗黒に染まっていくのを感じないのかい!?」
　属性力エレメーラそのものがだと……!?
「テイルイエローは、ここに来る前に心を大きく乱していたんじゃないのかい!?　確かに、きっかけは僕の技かもしれないが……彼女は、自分

で自分の心に押し潰されたんだ……!!」

『それだけはわたくしが自分で手に入れた、大切な宝物だと思っていましたが……それさえも、ツインテールと同じで神しん堂どう家の財産だったのですわね……』

　不意に、出撃前に慧え理り那なが切なげに吐と露ろした不安が頭を過よぎった。
「はっ……!?」
　イエローのギアから放たれた黒素は、俺たちをも取り巻いて増大していく。
　俺もブルーも、その眼を疑うような変化を前に、指一本動かせずに立ち尽くしていた。
　見える肌色と、瞳ひとみ以外のほぼ全てが、純黒に染まってしまったイエローを。
　肌を切るような静寂を破ったのは、富士山の山頂に木霊こだまする高らかな笑いだった。

「お————————————————っほっほっほっほ!!」

　イエローが、左手を口に当て、爽快を絵に書いたような笑いを上げている。
「何!?」
「み、見事なお嬢様笑い……この世界にも、これだけ完かん璧ぺきなお嬢様笑いの使い手が!?」
　スタッグギルディがイエローの笑いを賞賛する。
「何よ、今まであんな笑い方、一度も……！」

　イエローはすっと眼を細めると、一歩一歩ゆっくりと俺とブルーの前へと歩みを進めてきた。
　未いまだに右手に武器を構えたまま……彼女が一歩歩くたび、テイルギアの装甲の隙すき間まから黒い粒子が大気に漏もれ出ていた。
「……お手」
「え？」
　俺の数歩前で歩みを止め、吐き捨てるように言ったイエロー。意図を読めずに固まる俺の背中に、凄すさまじい衝撃が襲った。
「うわあああっ‼」
　たまらず倒れ込み、地面に手をつく。
　イエローが眼前で体育座りになり、笑顔で俺の右手を握った。
「そう、お手ですわ……ご主人様の言うことが聞けませんの……？」
　お手……だと⁉
　よく見れば、イエローの右胸のパーツから発射口が展開している。
　ホーミングミサイルを発射して、背後から俺の背中に着弾させたのか⁉
「やめなさい、イエロー！」
　ブルーが割って入るように殴りかかる。踊るように躱かわし、イエローは距離を取った。
「……ブルー。むしろイエローが一番深刻だったみたいだ。悩んでて心が不安定だったところに、あいつの技を食らって暴走してしまったんだ……」
「レッド……三つ編み属性トライブライド出して‼」
『イエローまですっぽんぽんにするつもりですか⁉　育ってるんですよ⁉』
　トゥアールの妙な通信に律儀に答えるブルー。
「違うわよ！　……イエローの武装をレッドが強制的に脱がせられるの

が三つ編み属性トライブライドの強みでしょ！　早く!!」
「強みって言うのかそれ……!?」
　だが、武装を全部取り上げてしまうのと同じなのだから、限りなく無力化はできる。
「属性玉エレメーラオーブ──三つ編み属性トライブライド!!」
　俺は三つ編み属性トライブライドを発動させたが──ブレイザーブレイドとウェイブランスだけが、所在なさげに宙に浮かんでいる。
「────発動しない!?　いや、イエローにだけ作用していないのか!?」
　合体の大元であるイエローの武装が無反応なため、三つ編み属性トライブライドの効果が強制的にキャンセルされてしまった。
「……脱ぎたくありませんわ」
　脱衣拒否だって!?
　むしろお前たちが脱げ、と言わんばかりの傲ごう岸がんな表情で、イエローは薄く笑いを浮かべた。
「ブルー！　俺がイエローを抑えるから、その間にスタッグギルディを倒してくれ!!」
「そうか、あいつを倒せば技の効果も消える……任せて！」
　ブルーは滞空していたランスを引っ摑つかみ、興味深げに成り行きを見守っていたスタッグギルディ目掛けて構えた。
　ブルーがスタッグギルディに向かっていったのを確認し、俺も覚悟を決めた。
　俺の戦いは、ブルーが勝つまでイエローの攻撃に耐えきることだ……!!

◇

　地下基地で戦闘をモニターしていたトゥアール。

　モニター下のサブウィンドウにはツインテイルズのバイタルがそれぞれ表示され、おおよそのダメージなどを計算、表示しているが……テイルイエローの数値だけが全て消失し、変身していないのと同じ状態になってしまっていた。
「まさか、あんな能力のエレメリアンが現れるなんて！　やっぱり、慧え理り那なさんの出撃は止めるべきでした……!!」
　戦うことで平静を取り戻したい、と言う希望を素直に聞いてしまったことが悔やまれる。
「トゥアール！　何だあれは!?　お嬢様のテイルギアが真っ黒になってるぞ!?」
　コンソールルームに駆け込んできた尊みことが、メインモニターの映像を見るなり慌てふためく。
「そ、それより、慧え夢むさんの方は大丈夫ですか？」
「この子が店にやって来て、基地に行きたがっていたんでな。奥様は未み春はるさんが一人で大丈夫だと言うので、私も一緒に降りてきた」
　尊みことの後ろから姿を現したジャージ姿の少女が、不服そうにトゥアールを見る。
「トゥ、トゥアールさんが、基地への生体認証、私を登録してくれないから……」
「基地に出入り自由にしたら私の貞操が危険だからです!!」
　その分、観み束つか家でフリーダムな行動を取って総そう二じの貞操が危険になっているのだが……。
　気を取り直し、イースナは眼め鏡がねのブリッジを持ち上げ、変身した。
「グラスオン……！」
　漆黒の鎧よろいを身に纏まとい、モニターに映るもう一人の黒の戦士を見上げる。

「……言いづらければわらわが言おう、トゥアール……イエローは、自ら暴走したのじゃな」
「何!?　それじゃあ、お嬢様が自分であんな真っ黒になったというのか!?」
　血相を変えて問い詰める尊に、トゥアールは力なく頷うなずいた。
「心を糧かてに起動するテイルギアは、精神への防御も重きを置いた装甲じゃ。それを突破し能力を行使するとは、さすがは恋愛属性ラブのスタッグギルディ……。じゃが、それでも理性を消し去ることまでは到底不可能じゃ。むしろイエローは、何の影響も受けておらぬな？」
　神ゴッド眼め鏡がねで分析するまでもなく、ブラックもまた真相を見抜いていたのだ。
「そうです。イエローは、恋愛断技ドロウ・イン・ラブとやらを受けてもレッドやブルーと違い何も効果が現れなかった……。その事実が、慧理那さんを追い詰めてしまったんです……!!」
　トゥアールに、心配ない、エレメリアンが気づいていないだけで恋心はちゃんとある、と言われ、慧理那はどれだけ救われただろう。そんな希望を得た矢先、恋心に作用する技を受けても平気だという何より雄弁な証拠を突きつけられ、今度こそ自分を見失ってしまった。
　しかも、トゥアールは聞いている。ドＭな自分も、大切な宝物だと。その宝物もまた、親から受け継いだものだったと知り。アイデンティティをことごとく砕かれてしまったのだ。
「とにかく、一刻も早くイエローを止めねば！　お人好しのレッドたちでは、いいようにやられてしまうであろうからな！　わらわたちもゆくぞ、メガ・ネ!!」
「何や、えらいことになってもうたな……！」
　入り口で待機していたメガ・ネが、がしょんがしょよんと硬質の足音を響かせ入室してきた。

「おい、イースナだったか……頼む、お嬢様を傷付けるような真似はしないでくれよ!?」
「……善処はする！」
「待て、善処って何だ、確実に約束しろ！」
　ブラックは尊の二度目の問いには答えず、メガ・ネを引き連れ出撃してしまった。
「お、お嬢様……どうかご無事で……!!」

◇

　放たれる異質な圧力に、思わず後あと退ずさりそうになる。
　同じ黒でも全く違う。信念の黒──闇やみ色でありながら、眩まばゆい輝きを放っていたグラスギアとは対照的だ。
　今のイエローのギアは、慧え理り那なの絶望を象徴するかのように。深く昏くらい負の感情に包まれている。
「ああ、可愛かわいい……可愛いですわ……。こんなにいじめ甲が斐いのある子犬ちゃんが側そばにいるのに、どうして今まで気付かなかったのでしょう……」
　イエローはヴォルティックブラスターを俺に向けると、躊躇ためらいもせず乱射してきた。
「くうっ……!!」
　弾丸がツインテールを掠かすめ、俺は思わずかばうように抱きかかえて身を丸めてしまった。
「うわあっ!!」
　その隙すきを突かれ、何発か弾丸が身体からだに着弾する。
　衝撃と同時に身を焼くような痺しびれ……先ほどのミサイルもそうだが、イエローの攻撃は実弾も光線も全て雷撃を帯びているため、ダメー

ジを二重に受けてしまう。戦って初めてわかる恐ろしさだ。
「こ、こうなったら取り押さえさせてもらうぞ！」
　後手に回っていては狙ねらい撃ちにされるだけだ。俺はイエローを取り押さえようと突進し、右手を首元に突き出した。
「うふふふ」
「っ!?」
　拳こぶしが空気に深くめり込む。直後、列車にでも跳ね飛ばされたような衝撃が全身を襲い、突き出した拳もろとも俺は吹っ飛ばされていた。
「ぐあっ……!!」
　弾性のある防御壁……巨乳属性ラージバストか――！
「ちっちゃなお手手……かわいいですわぁ……」
　倒れた俺の手をまたもそっと持ち上げると、指先にちろりと舌を這はわせてくるイエロー。蠱こ惑わく的な感触に、俺は思わず手を引っ込めてしまった。
　ブルーはというと、こちらが気になるようで、スタッグギルディを攻め切れていない。
「目が普通じゃない……人間の領域を超えてる！　トゥアールとそっくりだわ……!!」
『この地球上であなたにだけは人外と言われたくないですよトップオブ非人類!?　スタッグギルディとの戦いに集中してください!!』
　ブルーとトゥアールのタイトル戦はともかく……今のイエローは剝むき出しの加か虐ぎやく心で向かってきている。かといって、属性玉変換機構エレメリーションを発動できるように理性までは失っていない。
　これは暴走しているというより、むしろ――
　咄とつ嗟さに頭に浮かんだよからぬ考えを振り払い、俺はプログレスバレッターを手にした。

　すでに、完全脱衣形態フルブラストモードとなって全武装を俺にロックしたイエローを目にしていたからだ。
「チェンジ――フォーラー!!」
　地面を爆裂させ飛ひ翔しようした瞬間。尾を引き、光を散らし、暴風と化した機銃爆射が空にいる俺に迫ってきた。
　高速飛行で旋回し、射線をくぐり、誘爆させていく。ブレイザーブレイドツインを抜き、実弾は眼に映った端はしから叩たたき斬きっていった。
「くっ……弾切れ……する気配がない……!?」
　イエローのギアの装弾数はイエローの気力次第だという。つまり、何が何でも俺に命中させるという裂れつ帛ぱくの気合いを込め全武装を撃ち続けているのだ。
「おーっほっほっほっほ！　まだまだいきますわよ……大丈夫ですの？　二二秒しか保もたないのでしょう？」
　俺の弱点を考慮する余裕はあるわけか。だったら、こっちも切り札を出すぞ!!
「飛べ……セイバ――――――――――ッ!!」
　フォーラーチェインの最大武器……俺のツインテールに呼応し飛翔する全方位斬撃装備サテライトソード・ブレイザーセイバーを全刃射出する。
　地上数千メートルの霊峰の空に嘶いななく、フルブラストとブレイザーセイバーの激突。
　大気を焦がし猛然と旋回する灼しやく熱ねつの刃やいばは、迫る弾丸のことごとくを斬り落としていった。
「あはぁっ……素敵ですわぁっ」
　陶然として打ち震ふるえながら、イエローはついに全武装を脱衣パージした。

　形態変化チエインカスタムの持続時間は残り二秒……俺はイエローの眼前へと急降下し、ツインテールを中結びに直すと、露出度がマックスになったイエローを取り押さえにかかった。
「何ッ⁉」
　突き出した手が宙に縫ぬい付けられる。イエローのツインテールが、それぞれ俺の手首を縛り上げていたのだ。イエローの左腕のパーツが残っている……属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンか……！
「うふふ、がっついちゃだめですわ、ワンちゃん」
　何という膂りよ力りよくか──俺の身体からだはツインテールだけで持ち上げられ、両腕を頭の上で固定されてしまった。
「そんなに待ちきれませんの？　悪い子ですわね」
　イエローの指が、今度は俺の身体を丹念になぞっていく。指がお腹なかを撫なでさするように動いた時、
「ひゃっ……！」
　自分でもよくわからない感覚に襲われ、俺は高い声を上げてしまった。
「可愛かわいいですわ……。ご主人様のいうことを聞いたら、ご褒美をあげますからね……」
「何……うわあっ‼」
　両手を縛り上げられたまま、俺は地面に押し倒された。
「うふふ……」
　未いまだにツインテールで俺を拘こう束そくしたまま、イエローが俺の身体からだをまたいでのしかかってくる。この体勢、まるで昨日特訓していた──
『ブルー！　早くそいつを倒してください！　レッドが顔面騎乗位されます───っ‼』
「ええっ……⁉　うわあ、何やってんのよイエロー！　この、すばしっ

こい……!!」
「頭に血が昇った状態では、僕は倒せないよ」
　スタッグギルディは、至し極ごく冷静にブルーの動きを見極めている。
「部下のみんなが僕のタブレットで描かいた君の絵……その線筋が描いた幾百幾千のデッサンは、どんなコンピュータより如実に君の行動パターンを算出してくれた……！　そのデータを頭に叩たたき込んだ僕は、もっとも効率的に身体を動かすだけで君の攻撃を避けられるのさ……!!」
　駄目だ、ブルーもスタッグギルディで手一杯だ！
「さあ、ご主人様に忠誠を誓いなさい……!!」
　イエローがじわじわと腰を下ろしてくる。言い知れぬ恐怖に駆られ、目を瞑つむりそうになった瞬間。
「こおら────っ小ちっちゃい子に何しとんのやそこの露出狂──────ッ!!」
　今やツインテイルズの良心ともいえる甲高い教育的指導が青空に響き、俺とイエローの中間をマシンガンの弾が掠かすめていった。
　咄とつ嗟さに拘束を解き、俺と距離を取るイエロー。
「メガ・ネ！　……ブラック!!」
　空に閃ひらめく銀翼と、それに騎乗する黒衣の少女。二人が間一髪、救援に来てくれたのだ。
　戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネはバルカンを格納すると、空中で人型に変形。ブラックと一緒に地面に降り立った。
「腹を決めよ、レッド！　そやつはもはやテイルイエローではない……！　己が欲望に支配され邪悪に堕おちた戦士、テイルエロじゃ!!」
「もう少しまともな呼び名考えなさいよ!!」

　激闘の最中、ブルーがツッコミだけを無造作に投げ放ってきた。
「あら……素敵ですわね、その名前」
　背筋を、痛みに似た緊張が駆け昇る。
　トゥアールの無茶ぶりに笑顔でついていこうとした、昨夜の慧え理り那なの顔がはっきりと重なった。
「そうか……そういうことだったのか……」
　イエローはやっぱり破壊衝動に支配されたわけじゃない。痴ち女じょに弟子入りしたいと満面の笑顔で言った、昨日の慧え理り那なのままだ……!!
「下がっておれ、レッド。わらわが行動不能にさせる」
　俺の前に進み出ようとしたブラックを、手を突き出して制した。
「レッド……」
「助けてもらったのに悪いな、ブラック。でもこの役目は譲れない……」
　ブルーが攻防の最中、俺に訴えてくる。
「レッド！　あたしと変わって！　あたしだって……暴走した時は止めてくれって、イエローにお願いされてたのよ⁉」
　確かに、スタッグギルディはブルーの動きを見切っている。その方が適材適所なのかもしれない。でも……これは、俺がやらなくちゃいけないことだ。
「その約束のずっと前から言われてたんだ。〝わたくしを叩たたいて欲しい〟、ってな」
「それができるか、お前に⁉」
　ブラックの言葉に、力強く頷うなずく。
「触れ合い方なんて人それぞれだろ。俺は……イエローの心を一発ぶっ叩く！　俺のツインテールの全てを懸かけて!!」
　イエローは俺の全霊の言葉をあざ笑うかのように高笑いをすると、

「そんなにツインテールが好きなら、ご褒ほう美びを差し上げますわっ!!」
　右頬ほほに鋭い痛みが走った。
　イエローが……ツインテールで俺にビンタをしたんだ。
「あら？　嬉うれしくありませんの？」
「ああ、ちっともな」
　心がいい感じにクールダウンしていくのを感じる。
「……何て無機質で……乾いたビンタだ。これが……こんなものがお前のツインテールだと……⁉　違うだろ……!!」
　ブラックは俺に差し出そうとした手を握りしめ……その肩を、メガ・ネが無言で叩いた。
「レッドちゃん。どうしても、無傷で助けるつもりなんか」
「ツインテールでしか人とわかりあえないなんて言わないさ……。けど、俺にとってはそれがまず第一歩なんだ。俺は、イエローのツインテールに訴えかける!!」
「……よかろう」
　ブラックは覚悟を決めたように俺の手を取った。
「ならば言葉通り直接、心の中で叩いてくるがよい」
「何⁉」
「わらわもまだ試したことはないが……カオシックインフィニットの応用で、お前とイエローの二人の精神世界を接続リンクさせる。お前が、イエローの心を揺さぶるのじゃ」
「できるのか、そんなことが⁉」
「わらわはきっかけじゃ。できるできないは全てお前次第、やってみせよ。何、わらわとメガ・ネが乗り越えた合体確率よりは高かろうて」
「……そう言われると成功させるしかねえな」
　その意気じゃ、と不敵に笑うブラック。神ゴツド眼め鏡がねが発光

し、二つの円がそれぞれ俺とイエローの身体からだを取り巻き始めた。
『総そう二じ様！』
　いつになく真剣な声こわ音ねで、トゥアールが呼び止めるように通信をしてきた。
『慧え理り那なさんは、今まで喜んで脱いできた全ての服を拾って、自分が隠れてしまうくらい着込んでしまったんです……。誰かが脱がせてあげなければ！　どうかお願いします!!』
　師匠トウアールの願い、確かに受け取った。俺が、慧理那を脱がせてみせる――!!
「カオシックインフィニット――さあ、属性力こころの深しん淵えんで仲間を救え、レッド!!」
　意識が霧に包まれ―俺の心が、イエローの中に入っていくのを感じた。

◇

　スタッグギルディは攻撃の手を休めたブルーに合わせ、成り行きを見守ると嘆息した。
「無茶をするね……。心と心を接続するなんて、最悪、テイルレッドの心が壊れてしまうかもしれないよ」
　テイルレッドの精神が崩壊すれば、最強のツインテール属性の奪取は夢と消える。
　アルティメギルにとっては一大事だが、どこか冷めた表情で、スタッグギルディはレッドの決死の作戦を座して見過ごしたのだ。
「心を弄もてあそんだあんたに言われたくないわね！」
　攻撃を再開する。それまで空くうを切り続けたブルーのランスが、少しずつスタッグギルディを掠かすめ始めた。

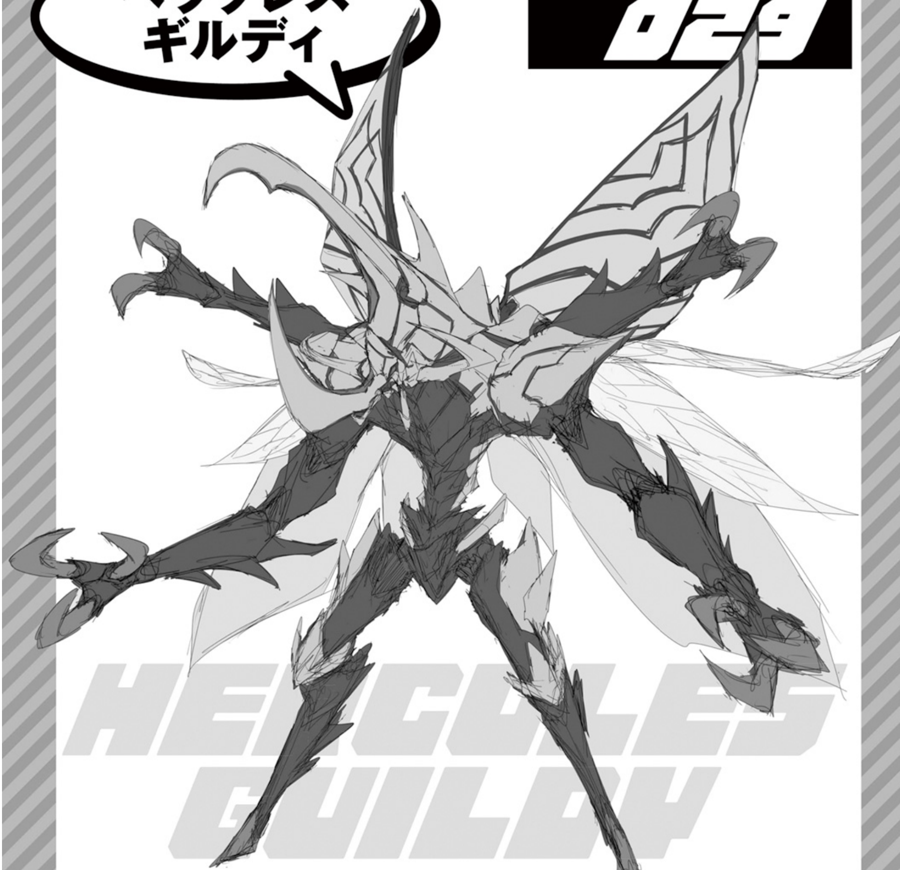
「え……!?」
「……レッドはやるっていったらやるわ。どーせあの熱血馬ば鹿かのことだから、またイエローと特訓でもしに行ったんでしょ!!」
　とうとう決定的にスタッグギルディの身体へヒットし、火花を散らし始めた。
「くっ……槍やりの速度が……計算が追いつかない……!!」
「データだか何だか知らないけど、計算だけであたしをわかった気になってるんじゃないわよ、エセインテリ!!」
　とうとうランスが胴体へクリーンヒットし、スタッグギルディはよろめきながら後ずさる。
「そんな……テイルブルーは、戦えば戦うほど野蛮になっていくというのか……!?」
　愕がく然ぜんとし、たまらず目め眩くらましのように二本角を発光させるスタッグギルディ。
「くっ……！」
　思わず目を伏せたブルーを尻目に、スタッグギルディは飛ひ翔しようし逃げを打っていた。
「退却したの……!?」
「違う、おそらくもう一体と合流しに向かったのじゃ！　レッドとイエローは今戦えぬ、わらわとお前で戦うぞ!!」
「わかった！」
　カオシックインフィニットが安定し手を離れたタイミングで、ブラックはメガ・ネに指示した。完全に意識を失った、レッドとイエローの無防備な身体からだを任せるために。
「メガ・ネ！　二人の身体を頼むぞ！　成功したら基地に送り届け、こちらへ来てくれ!!」
「了解や、気ぃつけてな、イースナちゃん!!」

　すでにビートルギルディが戦線を離脱し、かなりの時間が立っている。
　ブルーは遠慮なくブラックの手を摑つかみ、富士の山頂から飛翔した。

　今、美の四心ビー・テイフル・ハートとの最後の闘いが、幕を開けたのだ。

キャラクター名鑑 029

ヘラクレスギルディ



DATA

身長：15m

体重：推定3900t

属性力：恋愛(ラブ)属性

ビートルギルディとスタッグギルディが合体した姿。力の神を彷彿(ほうふつ)とさせる、大地を砕く四つの豪腕と、いかなる物体をも挟み斬る巨大な角が最大の武器。また、この巨体でありながら飛翔能力も強化されており、ツインテイルズ全員を相手にも引けを取らない。図らずもペガサスギルディが提唱した「同属性の共鳴による強化」を、アルティメギルで初めて単身で成した形になる。まさにその理論どおりの凄まじい進化を遂げたが、その代償は――――。

第五章　銀そ河ら昇るツインテール。

　辿たどり着いたそこはまるで、積乱雲の中のように激しい稲光が轟とどろく世界だった。
「ここが慧え理り那なの深層心理……心の世界か……！」
　俺はカオシックインフィニットの幻惑に囚とらわれた時と同じく、変身前の男の姿に戻っていた。しかし、あの時とは違い初めから意識ははっきりしている。
「うっ!?」
　数歩歩みを進めただけで、シューズが片方弾け飛んだ。
　構わずに前進する。さらに数歩で、今度はシャツの袖そでが桂かつら剝むきのように千ち切ぎれていった。
「慧理那の心の世界だからか！　近付けば近付こうとするほど、服が脱げていく……!!」
　近付くもの全ての服を切り刻む、目に見えぬ茨いばらの結界。
　だが、迷ってはいられない。稲光に身体からだを苛さいなまれ、じわじわと服を削り取られながらも、俺は一歩一歩慧理那のツインテールの気配へと向かい歩いて行った。
　精神世界を繫つないだといっても、俺が慧理那の心に侵入している形なんだ。言わば俺は慧理那の心にとってウィルスのような存在、排除しようとするのが当然だ。
　さきほどまでいたのは富士山頂だったが……まさしく頂を目指し登り続けるような、途方も無い疲労が身体にのし掛かる。
　ここで少しでも意識を薄れさせてしまったら、そのまま慧理那の心の中で俺の精神は霧散してしまうだろう。それは確信に似た予感だったが……恐怖は感じなかった。

　慧理那の心を、ツインテールを救いたい──その一念だけが、俺の歩を進める。

　一体どれだけ歩いただろうか……ようやく嵐のような道を抜けることができた。その先には、スポットライトに照らされるようにぽつんと座る小さな人影があった。
「慧理那あっ!!」
　確信を込めて叫ぶ。やはり、ツインテールが俺を導いてくれた。
「み、観み束つか君!?」
　ところが、振り向いた慧理那は、ツインテールを解ほどいてしまっていた。
　馬ば鹿かな、何な故ぜだ……!?　はっきりとツインテールの気配を感じたというのに。
「……まさか、感じたのはツインテール属性の方だったのか……？」
　心の世界だから、ツインテール属性そのものを俺が感じる事ができたということなのか。
「きゃっ、観束君……全裸ですわ!?」
「気にするな……かろうじて全裸じゃない！　それよりも慧え理り那な、助けに来たぞ！」
　圧力に耐えるように前傾しながら歩いていたのが幸いし、ギリギリトランクスの切れ端だけが腰にまとわりついている状態で事なきを得ていた。
　慧理那は白い薄手のドレスを身にまとっていた。まさに、囚とらわれのお姫様だ。
「助けるも何も……わたくしは自分の意志で、ここにいるのですわ……」
　俺が差し出した手を摑つかむことなく、慧理那は力なく呟つぶやく。

「観み束つか君、わたくしを倒してください……。自分で暴走を受け入れ、あなたに銃を向けたわたくしに、もう仲間の資格はありませんわ!!」
　自分が、言わばシャドウイエローと化して俺に攻撃をしたことを自覚しているようだ。
　仲間の資格はない、か。テイルギアを使いこなせなかった時にも聞いたぜ、慧理那……。
「たった一度暴走したぐらいで何だ、ブルーなんてしょっちゅうだぞ？　昨日トゥアールとした続きで、今度は俺と特訓した──それでいいだろ！　さあ、ツインテールを結ぼう!!」
　地面に落ちていたリボンを拾い、慧理那に差し出す。いやいやをするように頭を振り、慧理那は受け取ろうとしない。
「わたくしはもう、ツインテールは結べませんわ……」
　生気を失った横顔。自分の意志で、理事長に反抗するためツインテールを解ほどいた時はそれでもまだ、意気があったが……今の慧理那からは、何も感じられない。
「理事長のこと……そんなにショックなのか」
　いや、尊敬していた母親の痴ち態たいより、本人の言う通り慧え理り那ながショックなのは……自分自身の意志だと思っていたことさえ、神しん堂どうの血に縛られてのことと感じたからなのだろう。
「慧理那。俺たちは人間だ。親から生まれて、育つ生き物なんだから……持っている多くが、親から受け継いだものなのは当たり前のことだろう？」
「多くではありません、全てですわ！　わたくしが誇れるものは全て、当たり前のようにあったものなのですから！　わたくしは、何のために生まれてきたんですの……!?」
「慧理那……」

「それだけではありません……さっき、わたくしの心が偽りだったとようやくわかりましたわ……。わたくし、もう何もかも無くしてしまいました……」
　俺は、力無く落ちたリボンを一いち瞥べつする。
　リボンが言っている気がする。再び、慧理那をツインテールに結んであげたいと。
「ツインテールがあるじゃないか」
「ツインテールこそ！　神堂家の一番の遺産ではありませんか!!」
「違う！　……ツインテール属性だ」
「ツインテール、属性……」
　俺は、蹲うずくまる慧理那の隣に腰を下ろした。
　慧え理り那なと同じ心の世界の地平を見つめながら、語りかける。
「確かに理事長も素晴らしいツインテールを持っているし、ツインテール属性も芽吹いているだろう……。けど、慧え理り那な。君は、ツインテイルズになるだけの強く強く輝いたツインテール属性を、その胸に宿しているじゃないか」
　慧理那ははっとして顔を上げ……すぐに目を逸そらした。
「本来、世界に一人しかいないはずの、テイルギアをまとえるくらい……エレメリアンと戦えるくらい強大なツインテール属性を持った俺たちが、同じ街で……同じ学校で出会ったんだ。そんな俺たちの友情は……ツインテールは、相続された財産か？」
「そ、それは……」
「どんな大金にも、どんな大きなお屋敷にも代えがたい、最高の宝物……ツインテールで結ばれた俺たちの絆きずなは、慧理那が自分自身で手に入れたものじゃないか!!」
「絆を与えてくれたのは観み束つか君ですわ！　わたくしをツインテイルズに選んでくれたのも……全て……」

「俺が説教できたガラでもないけどな……いい加減、自分を卑ひ下げするのはやめろ、慧理那」
　強い口調で諫いさめると、慧理那は肩を震ふるわせ出した。
「……そういえば、俺がどうしてテイルレッドに変身したか、まだ話してなかったよな」
　慧理那は、強い子だ。ただ、繊せん細さいなだけで。
　自信を取り戻してあげたい。
　俺たちがどれだけ、慧理那を頼りにしているか。どれだけ大切な存在かを、伝えたい。

「初めてエレメリアンが現れたあの日。ツインテールを奪われる君を見たからなんだ」

◇

　ビートルギルディは場所を変えて属性力エレメーラを奪いに行くどころか、富士の中腹で待ち構えていた。合流したスタッグギルディも同様だ。ブルーとブラックが二体と相対する。
「二体二、ちょうどいいじゃない。レッドが帰ってくる前に終わらせてやるわ」
「……いや、どうもそうはいかぬようじゃ」
　美の四心ビー・テイフル・ハートについて理解しているブラックは、いち早く伏兵の気配に気づいたのだろう。
　つられてブラックの視線を辿たどったビートルギルディとスタッグギルディは、次々に転送ゲートから姿を現す部下たちに唖あ然ぜんとした。
「申し訳ありません。先の会議、テイルレッドに思いを馳はせている間

に終わっており……作戦を勘違いしておりました。──美の四心ビー・テイフル・ハート、総力を挙げツインテイルズと戦え、と」
「私は通販で頼んだ商品を受け取りに散歩をしていたら、たまたまここに来ましてな」
　昆虫のエレメリアンたちが、次々前に進み出ては、さもバツが悪そうに言い訳をする。
　ブルーとブラックは、あっという間に十数体のエレメリアンに取り囲まれていた。
　しかもそれは有象無象ではない、全て美の四心ビー・テイフル・ハートの精鋭──。
「……馬ば鹿か者どもが、初めてした命令無視が、我われらへの加勢とは」
　ブラックが耳ざとくビートルギルディの呟つぶやきを聞き拾った。
「部隊長の栄えの出陣に、部下も列を成してついてきたというわけか。本当に、美の四心ビー・テイフル・ハートは結束力は貴の三葉ノー・ブル・クラブに勝るとも劣らぬな」
　ブラックの篤あつい呆あきれ声に、居住まいを正し応こたえるビートルギルディ。
「部下たちには、元ダークグラスパー様とはいえ手心など加えるなと言い含めております。ゆめゆめ、油断めされぬよう」
「フッ……エロゲーの上うわ蓋ぶたに折り目をつけねば開けられぬ未熟者どもが、わらわに手加減などとは笑止千万」
　ブラックは闇やみの鎌かま・ダークネスグレイブを手にし、真正面に立つアリ型のエレメリアン・アントギルディへと刃を向けた。
「遠慮はいらぬ、かかってくるがよい！」
「ブラック……無理しないで、あたしが戦うから」
　アルティメギルを離反したとはいえ、やはりかつての部下たち。情が

あれば全力で戦えまいと、ブルーは気遣ったが……。
「何を勘違いしておる。わらわもあやつらに対し後ろめたさはあったが――愛いとしき嫁のテイルレッドをかように卑劣な手で貶おとしめようとしたのを見て、吹っ切れたわ……!!」
　情があるとするならば、全力で戦うことこそ誠心。ブラックには、何の気負いもない。
「参ります!!」
　一片の曇りも無い全力の拳けん打だ。疾駆し、ボクシンググローブのような球体の拳こぶしをアントギルディはブラックの顔面へと叩たたき込む。迎え撃つブラックも、会心の一いち斬ざんで応えた。
　踏み込み、両者の一撃が交錯した後―アントギルディの身体からだは、斬ざん撃げきの跡が花火のように激しくスパークしていた。
　さらば、と言ったのはどちらだったか。
　アントギルディは悔い無き爆散にて、かつて仕えた不器用な上官に別れを告げた。
「たったこれだけしか残っておらんかったか!?　足りぬぞ小こ童わっぱども、美の四心ビー・テイフル・ハート総力を上げてかかってくるのであろう!!」
　なおも凛り々りしく猛たけるブラック。僅わずか一瞬の攻防に、ブルーは二人のそれまでの思い出が疾はしり抜ける幻視をした。
「……あたしも負けてらんないわね……!!」
　ブルーの背後から飛びかかってきたエレメリアンを、ブラックが一斬する。
　ブルーは苦笑し、ブラックと背中合わせに立ってランスを構えた。
「まさか、あんたに背中を預ける日が来るとはね」
「ふふん、わらわがレッドとちゅーをしたことはもう水に流したか？　あの頃ころは随分荒れておったな。元部下どもが怯おびえておったわ」

絶対流さない、と拗すねたように吐き捨てながらも、
「……そいつらに、今また怯えてもらえばいいでしょ!!」
ブルーが呟つぶやくと同時、大将を残し包囲網は一斉に攻撃へと転じる。
地面が爆裂し、互いの全霊を込めた乱戦が始まった。

◇

トゥアールにテイルブレスを渡されたあの日の記憶を、慧え理り那なに語っていく。
「わたくし、を……助けるため……」
「それまで怪人に人が襲われていても、何が何だかわからなくて狼狽うろたえていた俺が……慧理那のツインテールがなくなるのを見た瞬間、生まれて初めて心の底から怒りが湧わいてきたんだ」
入学式で、壇上で喋しやべる慧理那のツインテールを見て……俺は、これから素晴らしい毎日になるんだろうってわくわくした。全ては、そこから始まったんだ。
「慧理那のツインテールが、きれいだったから……。だから、それを奪われたのを見て初めて、俺は戦う決意をした。ツインテールを守りたいって」
慧理那の肩を抱き、俺の方を向かせる。小さな身体からだがビクリと震ふるえたが、慧理那も戸惑いがちに俺を見つめ返してくれた。
「俺をツインテールの戦士にしてくれたのは慧理那、君だ。そして慧理那も、仲間になってくれた。自衛のためとはいえ、戦いに巻き込んで後悔したけど……同じくらい、嬉うれしかった……。同じ思いを分かち合って、一緒に戦ってくれる慧理那に、どれだけ励まされてきたか！」
「違いますわ観み束つか君……フェニックスギルディの言う通り、わた

くしはただ正義の味方に憧あこがれていただけの、紛まがい物……思いを分かち合えてすらいなかったのです!!」
　見聞きする全てが自信の消失に繋つながる……慧理那の不安は、裏を返せば、自信の源を求めていたとも取れる。
「憧れが始まりで何が悪い！　あいつの語る正義だって、あいつの尺度でしかない！　俺の見てきた慧理那は、紛れもないツインテールの戦士ヒーローだ!!」
　強引な説得だっていい。理路整然となんてしているはずもない。
　俺はただ、思うがままに言葉を慧理那にぶつける。それは、本心からの言葉だ。
「俺も愛あい香かも、慧理那がいなかったらここまで戦ってこれなかった……慧理那がいなかったら、この世界はもうとっくにアルティメギルに侵略されていたかもしれない！　俺たちは、誰だれ一人欠けても駄目だったんだ！」
　だって、ここは慧え理り那なの心の世界──嘘うそなんて、つけないのだから。
「観み束つか君……観束君……！　ごめんなさい、わたくし、こんなに弱くて……！　すぐくじけてしまう、駄目な子で……!!」
　慧理那は堪こらえきれなくなったのか、本心を吐と露ろし始めた。
「本当は、家のこととか、どうでもよかったのです……関係なかったのですわ！　わたくし、怖かったんですの……。どんどん変わっていく自分が!!」
「変わっていく……？」
「自分でも抑えきれない衝動が、変身していない時でも溢あふれてくるようになって……」
　慧理那は自分の手を見つめ、きゅっと握り締めた。
　そして、自じ嘲ちようすらできない歯がゆさに、その小さな身体から

だを自ら抱き締めた。
「はしたないことが頭を過よぎるのです……。どんどん妄想がひどくなっていって……自分でも止められなくて……！　それを、変身の代償だと勝手に言い訳をしていましたわ……!!」
　慧理那は真ま面じ目めすぎるんだ。俺みたいなちっぽけな人間なら笑い話で済ませるようなことでも、真剣にうんうんと頭を悩ませてしまう。
「誰だれだって妄想くらいするだろ。俺だって、頭の中でよく目に映る女の子全員ツインテールにしたりしていたよ」
　それは決して短所なんかじゃない。むしろ、誇っていいことなんだ。誰かが、ただいいんだよと言ってあげるだけでよかった。
「それは女の子に何も実害がない些さ細さいな空想ですわ！　わたくしは、観み束つか君に迷惑をかけてしまう……観束君の後ろで、こっそりスカートを持ち上げたり……津つ辺べさんにもトゥアールさんにも気付かれないように、そんなことをしていました……昨日特訓をしたのも、免罪符を得ようとしただけ……トゥアールさんに合わせる顔がありませんわ!!」
「でもそれ、他の人にやろうとしてみたわけじゃあないんだろ？」
「も、もちろんです！　観束君だけですわ!!」
　だったら、何の問題もないじゃないか。
「それって、俺を仲間として頼ってくれたってことだろ？」
「…………そ、そうですわね、そういうことでいいですわ……」
　一瞬真顔になったが、いつもの慧理那らしさが戻ってきた気がする。
　そうなると、画が竜りよう点てん睛せいを欠くわけにはいかない。
「慧理那、そのリボン貸してくれ」
「ど、どうしてですの……？」
「慧理那が結べないっていうなら、俺が結んでやる」

　リボンを受け取り、慧理那の後ろ髪をそっと手に取る。
「ひゃうっ！」
「何だ、どうした⁉」
「な、なんでもありませんわ……続けてください」
　どの位置で、ツインテールを結んでいたか。記憶だけなら完かん璧ぺきだが……俺の技量で、あの完璧なツインテールにどこまで近づけるか……。
「慧え理り那なが意地でも自分に厳しくするってんなら、俺が優しくしてやる。慧理那が嫌だって言っても、無理矢理な」
「はいっ……おおおお願いしますわっ‼」
　……あれ、俺、何か変なこと言ったか。
「ごめん。やっぱちょっと違うな。下へ手たくそだ」
　自分以外の髪を結んだのは初めてだが、それを差っ引いてもやはり、左右のバランスがちょっと悪い。せっかく、憧あこがれのツインテールなのにな──。
「でもやっぱり、慧理那にはツインテールが似合ってるよ。な？　俺自分勝手だろ？」
　ぽん、と慧理那のツインテールを弾ませる。……これで精一杯だ。約束通り、心を叩たたいた。
「みんな同じさ。辛つらいことも苦しいことも、全部言ってくれよ。俺もこれからは、慧理那にちゃんと言うからさ」
「──ありがとうございます、観み束つか君……」



　こんなにも心を吐と露ろしながらそれでも涙だけは見せなかった慧え理り那なが……俺の結んだツインテールに触れた瞬間、ぽろぽろと涙を零こぼし始めた。
「観み束つか君、わたくし……多分きっとこれからも、悩んだり、落ち込んだりしてしまうと思いますわ。でも、もうこんな風に溜ため込んだりしません」
　純白のドレスをまとったプリンセスは、麗うるわしくツインテールを閃ひらめかせた。
「それでも、どうしても一人では立ち直れないくらい、落ち込んでしまった時は……」
　六〇点のツインテールしか結べなかった、俺の無骨な手をそっと握り締め。

「また、ツインテールを結んでくれますか……？」

　慧理那は、やっと笑顔になってくれた。
「あなたが、ツインテールを愛する限り」
　姫に礼を尽くすように、俺は気取って手を胸の前に添えた。
「……これも、慧理那に一番最初に言ったんだ。今じゃ、俺の信念の一つなんだけどな」
　慧理那に「ツインテールみたいだ」と指差して見せた、地平に嘶いななく稲いな妻づまが次々と消え、世界に光が降り注いでいく。心の接続が途切れ、俺たちはそれぞれ目覚めようとしているんだ。
　意識が現実に引き戻されていく。
「最後に……勇気をください。今日だけは、ツインテールを結んでもらう以外にもう一つ、立ち上がるためのご褒ほう美びがほしいですわ……。だって、落ち込んだ一番の理由は、観束君には話せませんも

の……。それは必ず、わたくし自身で乗り越えてみせますから」
　楚そ々そと立ち上がった慧理那のドレスが、糸状に解ほどけ始めた。
　露あらわになってゆく裸身と引き替えに、胸の前に重ねて添えた手の平の上に、眩まばゆい光輪へと紡がれていった。
「……これは、首輪……」
　慧理那の裸身が光で覆われるほどに、強く烈はげしく自おのずから光り輝く首輪。
　己の全てを受け入れ、一歩踏み出した今の慧理那を象徴する光だった。
「指輪の代わりにこの首輪で契約エンゲージを……ご主人様。絶対にくじけない、強い心ツインテールのために」
　受け取ろうと触れ合った両手が、火のように熱い。
　脱ぎたい。見せたい。叩たたかれたい。踏まれたい。蔑さげすまれたい。放置されたい……。
　ドＭのアカシックレコードが、俺の心の中に止めどなく流れ込んでくる。
「慧理那に全部見せろって言ったのは、外ほかならぬ俺だ。俺も、焦ったり、びっくりしたりは、これからもすると思うけど……受け入れるよ、慧理那。首を出して……」
　口付けを待つように、目を瞑つむって上向く慧理那。
　ツインテールを結ぶよりもさらに不器用に、首輪を巻いた瞬間。
　ワン、と……可愛かわいらしい決意の遠とお吠ぼえが響く。

　世界が白滅する瞬間――慧え理り那なが爪つま先さき立ちになり。俺の頬ほおに、優しく両手を添えたような気がした。

◇

現実に戻った時、イエローは変身を解除して気を失ってしまっていた。
『総そう二じ様、慧理那さんを連れて一度基地に戻ってください！』
「わかった！」

メガ・ネと共に基地へ慧理那を送り届け、ブルーとブラックの元へと駆けつける。
「待たせたな……もうイエローは大丈夫だ！」
「待たせたなってあんた……ヘトヘトじゃない!?」
確かに、かなり足に来ている。ここに来るまでに一度つんのめって山を転がり落ちそうになり、メガ・ネに助けられていた。
「当然じゃ、お前にも経験があろう、ブルー……精神世界では急激に体力を消耗する！　だからイエローと休んでおれと言うたのじゃ！　ぜい、ぜい」
肩で息をしながらメガ・ネに介抱されているブラック。こっちもなかなかヘトヘトではないだろうか。トゥアールが通信で簡単に説明をしてくれたが、威勢よく美の四心ビー・テイフル・ハートの兵たちを焚きつけたはいいが、八体ほど撃破したところで膝ひざが笑い出してしまったらしい。
「あんた強いくせに持久力なさすぎ!!」
ブルーの非難に、メガ・ネが申し訳なさそうに謝る。
「すまんなあ、基本的に引きこもりやから、体力ないんや……。だから変身せぇへんとライブとかもできひんしなあ。フェニックスギルディと戦った時もこれで苦労して……」
「ええい、勝手に謝るな、おかんか貴様!!」
攻撃防御共に完かん璧ぺきな戦士と思われたテイルブラックの唯一の

弱点は、引きこもりエロゲー環境がふんだんに育はぐくんだ、圧倒的な虚弱体質だった。
　長期戦になれば、元の体力が足を引っ張り、どんどん地力が落ちていく。
　それは逆に、数に恃たのみを置く敵にとっては、願ってもないチャンスだ。
「ホントに大丈夫なの、レッド!?」
「ああ、もう出しゃばらねえよ……お前らの取りこぼし拾うだけにしとくぜ」
「ならいいわ……一体も出さなきゃいい話なんだから。貴の三葉ノー・ブル・クラブと戦った時に比べたら、こんな数、なんてことないわ！」
　ブルーは強がっているが、数では劣りこそすれ、戦士一体一体の練度がまるで違う。
　そして貴の三葉ノー・ブル・クラブと共通するのは、組織忠誠を超えた信義。隊長を守ろうとする強い意志だ。
「……ブルー、これを使え」
　ブラックが、敵を牽けん制せいしながらブルーに菱ひし形がたの宝石を手渡す。
「……これは、プテラギルディの母属性マザーの属性玉エレメーラオーブ……!?」
「グラスギアに属性玉変換機構エレメリーションはない。我わが部下の形見じゃが――お前たちに託す。露払いは任せたぞブルー。わらわは一気に大将首じゃ!!」
　ブラックは二本指を揃そろえ、神ゴツド眼め鏡がねのアンダーリムをなぞった。
「ゆくぞメガ・ネ！　インフィニットコンバインじゃ!!」
「りょーかい！」

一直線にビートルギルディ目掛け跳躍するブラック。部下たちがそれを阻はばもうと飛び出すが、分割されブラックの周囲を旋回するメガ・ネのパーツがそれを弾き飛ばした。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
空中でインフィニットチェインへと合体完了したブラックは、間髪容れずにダークネスグレイブメビウスを変形させ、背の両翼を装着。
「受けよ、ビートルギルディ！　これがわらわの手た向むけじゃ!!」
必殺の巨大弓でビートルギルディへと狙ねらいを定めた。
「インフィニットバニッ……」
「きゃ――――――――――――――――――――っ!?」
眼前に全身全霊を傾けていたブラックは、後ろから猛然と突っ込んできたブルーの人間魚雷を察知できるはずもなく。背中に頭突きをくらい、発射の瞬間射軸が横にずれてしまった。
必殺の光こう矢しは、真正面に見据えていたビートルギルディを大きくそれて飛ひ翔しようする。
「何をするか貴様、よりによって連発できぬ必殺技を邪魔するとは!!」
「違っ……母属性マザー使ったら思うように動けな……あ――――――――――――っ!!」
ブルーがスーパーボールのように空に地にと跳ねる。
母属性マザーは高速移動を可能とする効果らしいが、戦闘センスがピカ一のブルーでも手に余すほどの暴れ馬だったようだ。
「……あ」
外れただけなら、まだよかった。
「スタッグギルディ!!」
「に、兄さん……!!」
だが中途半端に発射されたインフィニットバニッシャーは、ビートルギルディの横にいるスタッグギルディを掠かすめ、十分な致命傷を与え

てしまっていた。
「………………」
　バツが悪そうに立ち尽くすブラック。ある意味命中だが、実際には性た質ちの悪い大外れだ。
　ビートルギルディたちから見れば、サッカーのＰＫ戦のようにシュートする直前でフェイントをかけコースを外したようなもの。スポーツなら駆け引きで済むが、命を懸けた戦いの場でそれは度し難き不誠実となる。
　放電するスタッグギルディを抱き起こすビートルギルディ。
「何な故ぜだ、何故お前なのだ……!!」
「駄目だよ、兄さん……。真剣に恋をする彼女たちツインテイルズを見て……彼女たちになら、倒されてもいいって思ったでしょう……。兄さんを信じてついてきた僕たちのためにも、勝って……」
　今いま際わの際の掠かすれ声のためか、ここからではスタッグギルディの言葉は聞き取れない。しかし、意志を託しているのだけは伝わった。
　二本角がスパークと共に折れ砕け、全身から火花が噴き散る。
「恋に燃える戦士を倒してこそ、僕たち恋愛属性ラブの戦士の本懐……そうだよね……？」
　ビートルギルディは、爆散するスタッグギルディを最後まで抱きかかえたままだった。
　爆炎そのものを身体からだ中で呑のみ込み、その赤銅の身体を赤熱化させながら静かに立ち上がる。
「……これがあなたの答えというわけですか、テイルブラック……！　スワンギルディへのテイルブルーの狼ろう藉ぜきに続き……！　今、残っていた私の最後の迷いも木こっ端ぱに砕けた!!」
「待て！　わらわではない！　全てはそこで跳ねているエロゲーのアン

ケートハガキみたいな胸した奴の狼ろう藉ぜきじゃ!!」
〈……背中を預けるとか言うてたらしいやん、ブルーちゃん……〉
　皮肉にも背中を任せた仲間に背中を討たれるという憂うき目に遭ったブラックだが、ビートルギルディにとって下げ手しゅ人にんが誰だれであるかなどもはや関係のない話。
「おお、あれは……!!」
　美の四心ビー・テイフル・ハートの部下たちが畏敬の念を込め見守る中、徐々に、徐々にビートルギルディはそのフォルムを変遷させていった。
「最終闘体か……！」
　俺は猛烈な闘気に戦せん慄りつするが、このただならない変化はそれどころではない。
　上半身の甲角筋がさらに逞たくましく盛り上がる。巨大化した二本の剛腕とは別に、さらなる双腕が重ねて新生する。四つの腕を交差させ裂れつ帛ぱくの気合いと共に振り抜いた先に、竜の顎あぎとを想起させる双角が飛び出した。首元から伸びた鉤かぎ爪づめのように屹きつ立りつしたさらなる双角とで十字を描く。
　そして、猛たける鋭刃が階きざはしと連なり、背を彩っていった。
「このビートルギルディ、隊長の座にありながら未いまだ進化の途中にあった……！　今、我わが兄弟スタッグギルディの魂を共にし、私は頂へと辿たどり着いたのだ!!」
　猛気ほとばしる黄金に光り輝く巨大な翼を広げ、変身は完了した。
　ユグドラシルギルディのような規格外の怪獣ではないにしろ、ビートルギルディも繁しげる生木を眼下に見下ろす巨きょ軀くと化し、俺たちはただ呆ぼう然ぜんとそれを見上げる。
「聞け！　ツインテイルズ！　私はヘラクレスギルディ……我われらが見み惚とれたその恋心こころとツインテール、美の四心ビー・テイフ

ル・ハートへと捧げてもらおう!!」

　錬磨された闘気が伝える。避けえぬ絶体絶命の局面を。

　　　◇

　救護室で寝ていたはずの慧え理り那なが、足早にコンソールルームへと入室してきた。
　脇目も振らずメインモニターの映像を確認する。戦いは終わるどころか、遥はるかに激化していた。
「お嬢様！　無茶です、休んでいてください！　あとは観み束つかたちが何とかしてくれます!!」
「……いいえ、観束君はもう立っているのもやっとのはずですわ……。わたくしを助けるために、心身共に限界まで酷使したのですから」
　血相を変えて制止する尊みことを安心させるように、慧理那は晴れやかに告げた。
「次は、わたくしが観束君を助ける番ですわ」
　一歩を踏み出した慧理那の歩みを縫い止めたのは、音無く開いた入り口に立つ意外な人物の、驚きよう愕がくの表情だった──。
「……お母様……!!」
　着物を着て居住まいを整えた母、慧え夢むの。
「慧理那、ここは……婿むこ殿の家の地下に、何な故ぜこんなものが……!?」
　誰だれもが秘密基地を連想するであろう、一般人の家屋地下には不ふ釣つり合あいな設備の山。気丈な慧夢をして慌ただしく天地前後に視線を移ろわせるに十分な、まさに夢の国だ。
　横に立つ未み春はるを見て、慧理那は全てを悟った。

そして、今自分が伝えなければならないことも。

「ご主人様、この場所は一体……」

主従関係を抜きにしても本心から不安そうに縋すがる慧夢を一いち瞥べつして放置プレイすると、未春は無言で慧理那を見つめた。自分から語ることは何もない。

あなたが打ち明けるべきだ、と。

どちらからともなく歩み寄り、親おや娘こは手を伸ばせば触れられる距離にまで近付く。

慧理那は一度深呼吸すると、眦まなじりを決して母を見つめた。

心に最後の決着をつけるべく、切々と語り始める慧理那。

「……お母様。わたくし、ツインテールが嫌いでした」

真横のモニターでは、星の瞬またたきのように命が煌きらめいている。

ニュース映像では到底ありえない、あまりにもライブな戦闘を横目に、しかし慧え夢むは慧え理り那なから片時も目を離すことができずにいた。

「けれど、それが偽りだと、〝わたくしのご主人様〟と……友達が、教えてくれました」

モニターに映った、炎の剣を構える少女を振り仰ぎ、慧理那は晴れ晴れしく微笑ほほえんだ。

「今は胸を張って言えますわ。わたくし、ツインテールが大好きだって」

「……そうですか」

慧夢にとって、これ以上の親孝行があろうか。至高の婿むこを見つけることができたことよりも。青春を与えてくれた恩人と再会できたこと

よりも。
　最愛の娘が、笑顔でツインテールを好きだと言ってくれた。
　それに勝る幸せなど、他には何もない。母として、万感が満たされた瞬間だった。
「お母様はご存じなかったかもしれませんが……先ほどのお母様と同じような思いに目覚め、それをわたくしは観み束つか君にぶつけてしまったのですわ」
「慧理那……ごめんなさい……神しん堂どうの女の血に、あなたも悩んで……」
「ええ。悩みました……けれど、これも変わらず、わたくしの大切な宝物ですわ。だって、観束君に受け止めてもらえたのですから……。本当のわたくしを」
　だが、その後の娘の行動が、夢の世界に今いるという現実を、改めて、そして否応なく慧夢に突きつける。
「ですから、お母様にお見せしますわ。わたくしが観束君から……ご主人様からいただいた心の力を。ツインテールを……！」
　慧理那はブレスを胸の前にかざし、ツインテールを凜り々りしく翻ひるがえして叫んだ。

「テイルオン――‼」

　果たして母は、その刹せつ那なを知覚できただろうか。
　自分の娘が光の繭まゆに包まれ、シルエットを大きく変化させ―優しき心に見合わぬ、無数の兵器をその身にまとう瞬間を。
　黄色の光が爆裂し、テイルイエローが慧夢の眼前に立った。
「あなたが……ツインテイルズ――」
　幾千の夢を重ねれば、そんな大それた御お伽とぎ噺ばなしに到達した

だろうか。
　問いかけに応こたえず、無言のまま背を向けたのなら、慧夢はこれでもまだ、目の前の大人びた少女を我わが娘のもう一つの姿などとは思わなかっただろう。
「はい。わたくしはツインテイルズの一人、テイルイエローです」
　しかし、慧え理り那なは……テイルイエローは、現実の埒らち外がいで惑う母に、はっきりと宣言した。
　世間で爪つま弾はじきに合う、張りぼてのヒーロー。テイルレッドのおまけ。不審者。
　そんな辛しん辣らつな評価をも堂々と受け止められるほど、彼女は逞たくましく成長したのだ。
「お母様。わたくし、行きますわ。仲間が……大切なご主人様が、戦っていますの」
「慧理那！」
　母の呼びかけに振り返らず、少女は走る。
　止まるはずはない。彼女は今、テイルイエローなのだから。
「……あれは……!!」
　そして、閉まる扉が二人を分かつ瞬間、母は確かに幻視した。
　猛たけ々だけしい鎧よろいの只ただ中なかにあり、高潔なまでに気け高だかく娘の首に巻かれた、不可視の聖なる首輪を。
　慧え夢むは導かれるように、モニターに視線を移す。ツインテールの子供たちが、屈強な怪物たち相手に一歩も退ひかず戦っている。
　その中の一人。娘が助けられ、憧あこがれ、今大切な仲間だと断じた、幼い少女。
「……それでは、まさか……テイルレッドは――」
　全てが符合したように、慧夢もやっと、安らかな笑顔を浮かべる。
　未み春はるがそっと肩に手を置くと、慧夢は自分の手を重ねた。

　息苦しい束縛を嫌った自分に、陽気な先輩が人生の楽しさを教えてくれた。
　ヒーローだ、悪の幹部だ、犬だ、眷けん属ぞくだと、子供のような設定で遊び回った高校時代。
　他た愛わいのない日常プレイが、自分のかけがえのない青春だった。

　その子供たちが今──本当に地球を守るヒーローとなったのだ。

◇

　振り下ろされた巨大な豪腕が富士の大地をえぐり、山道に土砂の滝を振らせる。
「遠慮なく暴れやがって、世界遺産だぞ……!!」
　だがヘラクレスギルディを止められなければ、この山一つですら済まないかもしれない。この戦いは、自然を気遣って乗り越えられるほど甘くはないだろう。
〈一旦合体解除やイースナちゃん、他の戦士こぉらに対処しきれへん!!〉
「やむを得ぬ!!」
　静観していたビートルギルディを一撃で倒し損ねたばかりか、進化し轟ごう猛もうと暴れ始めた今、周囲の兵士たちを抑えながら戦うのは至難の業わざ。少しでも頭数が必要だと、ブラックとメガ・ネは合体を解除した。
　俺とブルー、ブラック、メガ・ネ。
　イエローがいないとはいえ、十分頼もしい戦力が揃そろっているはずなのに、戦いに全く終わりが見えない。

「ちまちま体力を削ってこうなんて、こいつららしくもない……」
　いつになく疲ひ弊へいし、ランスを杖つえのようについて身体からだを支えているブルー。
　途中から奴やつらもフォーメーションを展開し、ただ闇やみ雲くもに突っ込むのではなく、こちらの体力を削そぎにかかるように展開し始めたのだ。
「その通り。部隊合流という特殊なケース故ゆえ、前任部隊に敬意を払い足並みを乱さぬよう努めていたが……本来我われら美の四心ビー・テイフル・ハート、美しく創つ作くられた連携こそ得意とする。手て強ごわい戦士の守る世界の追撃侵攻を任される直属部隊は、完勝こそ求められるのだからな」
　カマキリ型のエレメリアン・マンティスギルディが勝ち誇ったように両の鎌かまを構える。
　やはり、俺たちを疲弊させるために統率された動きで戦っていたようだ。
　ブルーはぬぬぬと唸うなり、ブラックを糾弾する。
「あんた、あいつらの上司だったんなら知ってたんじゃないの⁉」
「たわけ、教えてどうなる。付け焼き刃の連携で対抗したところでかえってつけ込まれる。わらわたちは先の先を取り撃破することこそ最善手だったのじゃ」
　そうだ。聞かされていたところでどうにもならない。
　残った兵士たちが再び攻撃をしかけてきた。今進化したばかりだというのに、ヘラクレスギルディは抜群の後方援護でそれをサポートする。
　あれほどの力を手に入れながら突出せず、冷静に戦局を見極める部隊の頭脳ブレイン……強部隊の隊長とは、ここまでの素質を擁ようする戦士なのか。

蝿はえ型のエレメリアン、ダンゴムシのようなエレメリアン……昆虫のオンパレードだ。
明確に「削り」に徹し始めてからは、俺たちの体力の低下もあって数が全く減っていない。
前方に意識を集中させていた俺は虚を突かれ、背後から巨大な爪つめに摑つかまれてしまった。
「うわああっ!!」
ヘラクレスギルディの右主腕が、ガッチリと俺を取り押さえている。
腕も封じて形態変化チエインカスタムの隙すきも与えない拘束……さっきの俺とシャドウイエローとの戦いを見て、スタッグギルディが抜かりなく俺の弱点を分析していたんだ……！
「テイルレッド……美しいツインテールだ。その美び蜜みつに惹ひかれ、多くの人々が恋をし、心育はぐくんだことだろう……」
「ぐううっ……!!」
俺に、イエローのようにツインテールを動かすことができれば……！
「レッド！　どきなさいよ、このっ……!!」
ブルーたちを執しつ拗ように足止めするエレメリアンたち。執念の連携を、三人は突破できずにいる。
大の人間が潜くぐれる大きさの属性力エレメーラ奪取のリングを、輪ゴムでもつまむかのように左手に持つヘラクレスギルディ。
「多くの恋に幕を下ろすのは心苦しいが……それが我われらの生きた証だ!!」
金魚すくいでもするかのような気軽さで、そのリングを右手で握り締めた俺に潜らせようとしてきた。最後の最後まで油断していない、脱出する術が──!!

その時──迫り来るリングとは別の風切り音が耳じ朶だを叩たたいた。

「何っ⁉」
　ヘラクレスギルディの身体からだに、光線やミサイルが次々と着弾していく。
　振り向くと、合身巨大砲ユナイトウエポンが武装を発射しながら唸うなりを上げげて突っ込んでくるところだった。
　最後には、合身巨大砲ユナイトウエポンそのものが鋼はがねの肉弾となり、ヘラクレスギルディの顔面に直撃した。
「うおおおおおおおおっ⁉」
　たまらず俺を取り落とすヘラクレスギルディ。
「うぐぅ……おのれっ‼」
　上下に雄々しく展開された二本角で、ヘラクレスギルディは合身巨大砲ユナイトウエポンを挟み斬きる。
　大爆発を起こし、木こっ端ぱ微み塵じんになる合身巨大砲ユナイトウエポン。
　尻しり餅もちをついた俺は、山道を悠然と歩いてくるツインテールに笑いかけた。
「……またタイミングでも計ってたのか？」
「いえ、意外と本当に必要な時は、何も考えなくてもこうなってしまうようですわ」
　富士山の中腹で御来光というのも不思議だが──立ち昇る朝日のように優しくも力強い輝きを放ちながら、その場の全ての戦士の意識を虚空に縫ぬい止め、近づいてくるシルエット。
　不思議とは思わなかった。
　仲間の絶体絶命の危機に颯さつ爽そうと駆けつける……計ったと誤解されるほどの絶妙のタイミングをその手にする戦士こそ、彼女が憧れた、正義のヒーローの特権なのだから。

「お待たせしましたわご主人様。わたくしは、もう大丈夫です！」

　屈託無く微笑ほほえむのは――漆黒の呪じゅ縛ばくを自ら打ち砕き、高貴なる黄金色のツインテールをたなびかせ復活したテイルイエローだった。
「さあ、わたくしのご主人様と仲間を傷つけた罪―贖あがなっていただきますわ！」
　見上げる巨きよ軀くを目の前に、勇ましく立ちはだかるイエロー。
「―やはりな……。復か活えってくると思っていたぞ……。そして早くも脱ぐとは……まさに渾こん身しん！　武器を捨ててまでレッドを救ったその意気やよし!!」
　ヘラクレスギルディも、後先を考えぬ渾こん身しんを讃たたえはしたものの……
「だがどうする、テイルイエローよ……まさか生身で私に挑むつもりか!?」
　その通りだ。ブルーたちは兵士たちに足止めされ、俺も体力が尽きてこのザマだ。
　そしてイエローは、今の特攻で全ての武装を失った。仮に左腕のパーツだけ残していたとしても、すでにシャドウイエローの時に一日一度しか使えない属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを使ってしまっている以上、切り札さえも失った状態だ。
「たとえ全ての武装を失っても……ツインテールある限り、わたくしは戦います」
　かつてない窮地に立ちながらイエローは、聖王姫プリンセスのドレスの如くそのツインテールを神々しくたなびかせ、凜りんと宣言した。
「そして今は、ご主人様からいただいた、新たなるご褒美ちからがありますわ!!」

「それは……!?」
　精神世界で俺が巻いた、光の首輪。
　それが今、現実世界で具現化し、全ての武装を失ったイエローの首を照らしている。
　ヘラクレスギルディがダメージを受けた顔面から紫煙を立ち昇らせながら驚嘆した。
「自分自身に呑のみ込まれたかと思っていたが……違う、今までのテイルイエローとは何かが……！　剝むき身の刃やいばにも似た危うさと、静せい謐ひつな鞘さやの如き悠はるかとが同居しているようだ……!!」
　俺は見た。
　脱衣していながら凜り々りしく表情を引き締めたイエローの代わりに、ツインテールが震ふるえ、羞はじらっているのを。
　そうか、それが答えなんだな、イエロー。
　ついに、君はツインテールと心をも共有したんだ!!
「イエロー！　首輪に心とツインテールを集中させろ！　心に思い描くんだ!!」
　俺自身の経験から裏打ちされた確かな予感に突き動かされ、イエローに向かい叫ぶ。
　イエローは頷うなずくと、光る首輪に手を添え――森羅万象全てと自らのツインテールを重ねるように、強く祈り始めた。
「……むう、もはや戦力を失い露出狂にしか見えぬテイルイエローに、ただならぬ畏い怖ふを感じる……！　皆の者、ヘラクレスギルディ様をお守りせよ!!」
「今さらそんなのが通ると思ってんの!?」
　バッタ型のエレメリアン―ホッパーギルディと名乗ったエレメリアンは、憂心でフォーメーションを乱し、そこを逆にブルーたちに食い止められてしまっていた。

　首輪を取り巻く光そのものが、かさぶたのように砕け落ち──その中から現れたのは、プログレスバレッターのように新たなる力の脈動で彩られた、神々しい黄金の首輪だった。

「───これが……誓いの証！　絶対服従首輪アブソリュートリングですわ!!」

　またもや俺の困った癖というか、いま慧え理り那なの言葉に変な元漢字が見えた気がするが……。
『……イエローも、自分自身の力で進化装備エヴオルブアームズを……!!』
　必死にブルーたちに指示を通信していたトゥアールが、歓喜の声を上げる。
　痴ち女じよの特訓をも余さず含め、彼女の経験と思い出の全てが、神の首輪へと結実したのだ。
「……装備が一つ増えただけで何だというのだ！　服を着るがいい!!」
　豪腕を振り上げようとしたヘラクレスギルディは、イエローの全身から放たれた燐りん光こうにその巨体をたじろがせた。
「皆さん、ご主人様！　見ていてください！　わたくしは今、あえてもう一度着ます!!」
　アブソリュートリングが最大の光を放ち。
　イエローの全壊したアーマーが、さらに輝きを増して再生を始めた。
　もはや脱がせぬ。いいや、脱ぐ。
　アーマーそのものがせめぎ合ったことで、再生を超越し──遥はるかなる進化を遂げたのだ。
　展開された状態が基本デフオルトに過ぎないと猛たけるアーマー。

一門でさえイエローの身長と類比するまでに巨大となった二つの巨砲。
勇壮なる王冠クラウンにも似た、壮麗な背の多重翼ウイングパーツ。
迷いを捨てたイエローの心そのままに、テイルギアは最強の力を手に入れた。

黄金の怪物と相対する、黄金のツインテール。
万感の思いをこめ、イエローは信念を解き放った。

「わたくしのツインテールは……絶対ですわ!!」

ツインテールという名の、大いなる誓いを心に宿して──。
『すごい……こんなことが……！　イエローは今、テイルギアそのものが完全解放ブレイクレリーズされています!!』
開発者である自分の想定を遥かに超えた超パワーアップに、トゥアールの声が弾む。
『絶対なる誓いが結晶したテイルイエローの最強形態！　アブソリュートチェインです!!』
「アブソリュートチェイン……!!」
血脈として全身に巡らせるかのように、トゥアールの言葉を噛かみしめるイエロー。
ホッパーギルディが腕を振り、フォーメーションを組み替えた。
「山のように武装を着こんで、自ら鈍重になるとは愚かな！　良い的ではないか！　者ども、撃て撃てーい!!」
打撃ではなく爆撃に技を絞り、遠距離からイエロー目掛け無数の光弾を発射する。
もはや体力の限界に達していた俺たちは、腕一本動かせずにその死の

旋風を見過ごすしかできない──はずだった。
「こ……これは!?」
　ホッパーギルディも、撃った兵士たちも、爆撃に負けず劣らぬ激震を胸中に受けただろう。
　灼しやく熱ねつと爆裂と轟ごう風ふうと──。
　地表が吹き飛び、空が焼ける。
　己が身に降りかかる極爆を意にも介さず、その中を悠然と歩を進めるイエロー。
　心とツインテールが渾然一体となった今の彼女に、信念なき烈火など涼風にも等しかった。
「み、微み塵じんも揺るがぬ……まさに要よう塞さいか……!!」
　手をこまねいて見ているわけにはいかないと、ブルーとブラックの相手をしていたエレメリアンまでもが危機感に後押しされ飛びかかっていく。
　敵に初手を先んじられて尚なお動じぬ泰たい然ぜん自じ若じやくさ。もはや、今までのイエローとは全く違う。
　アーマーが硬質の駆動音を響かせ展開する。四方八方から飛びかかってくる敵を前に、パワーアップしたイエローの武装が火を噴いた。
　ミサイルが。バルカンが。レーザーが。
　単騎武器庫を誇るイエローの爆射が、鉄壁のフォーメーションをも打ち崩していく。



　やがてひとしきり撃ち終え、肩のパーツから順に脱衣パージし始めた瞬間。
　ここぞとばかりに、三体のエレメリアンが飛びかかる。
「今だ！　脱いで武装を失った死角を攻めろ!!」
　イエローの弱点、脱いだ瞬間を狙ねらった攻撃だ。
「……そうでもありませんわよ？」
　エレメリアンたちは見た。
　アーマーを脱衣パージし、柔やわ肌はだの見えるはずだった肩に──再びアーマーが着衣されているのを。
「馬ば鹿かな!?　脱いだと思ったら脱いでいない!?」
「フェイント脱衣パージだと!?」
「どこまで進化するのだ、テイルイエローよ……！　うわ──────っ!!」
　肩のバルカンで全身を強したたかに撃たれた後、無造作に放った巨砲の一発で、エレメリアンを爆砕したばかりか大地を抉えぐり砕いていく。
『きっとあれが慧え理り那なさんの答えなんです……！　数々の全裸を見てなお、あえて全て見せるという安易な追従を許さず！　極限を攻める姿勢！　免許皆伝です、慧理那さん!!』
　師匠からお墨付きをもらった成長は、凄すさまじい破壊力を彼女に与えた。
　自分だけでは飽き足らず、もはやこの地球そのものをも脱衣パージさせかねない諸もろ刃はの剣つるぎ。
　その威力に驚きながらも、イエローはすぐにツインテールで手綱を握った。
「うふふ……ご主人様、見てくださっていますか……？」
「目を逸そらせるわけないだろ。思いっきりやっちまえ、イエロー!!」

「かしこまりましたわ!!」
　ヘラクレスギルディは四本腕のクロスガードで地をえぐり迫ってきた巨砲の一いつ閃せんを凌しのぎきると、慄りつ然ぜんとする部下たちへ向け気丈に指示を飛ばした。
「怯ひるむな……空から撃て！　テイルイエローの武装は空では用を為さぬ!!」
　飛行虫タイプのエレメリアンが数体集まって編隊を組み、空から襲いかかろうとする。
「今のわたくしは、放置されるだけではありませんわよ――!!」
　決して俊敏ではない跳躍で、空を旋回するエレメリアンたちを追いかけるイエロー。
　しかし、逃げ場のない空中では攻撃を避けきれない。先ほどの防御力を恃たのみ攻撃に転じるつもりか。そう思った瞬間、イエローの身体からだは張り付いたように空中に固定された。
　そして、全ての武装が一斉発射のための展開を始める。
「絶対脱衣形態アブソリュートブラストモード!!」
　さらに威力と精度を増した必殺の斉射が、空に爆光の連鎖を描く。一体どうやってあの超砲撃の圧力を固定ロツクしているんだ!?
「はっ……!?」
　真一文字になっているツインテールに、俺はイエローの神髄を見た。
「まさか、空そら……空間そのものにツインテールを打ち込んだのか、イエロー!?」
　己のツインテールに絶対の信頼を置いたイエローは、空間そのものにツインテールを穿うがつという条理を超えた絶技をその手にした。砲撃圧力から身体からだを支えるためにツインテールを大地に打ち込む必要があるという、完全脱衣形態フルブラストモードの弱点は払ふつ拭しよくされたのだ。

　今、イエローは天より裁きを降らす雷神となり、昆虫エレメリアンの全てを爆砕していった。
「ツインテイルズ一番のお荷物と軽んじていたテイルイエローに、我われら美の四心ビー・テイフル・ハートが壊滅させられるとは……！」
　悔恨の呟つぶやきを噛かみしめ、最後までヘラクレスギルディを守るように立ちはだかったホッパーギルディだったが──
「ヘラクレスギルディ様！　どうか、我らの分まで───!!」
　ついに、絶対殲せん滅めつを体現した砲雨の前に力尽きた。
「うむ、先に行って待っていろ、皆の者……！　弟スタッグギルディの魂！　我わが部下たちの信念！　全てこの角つのに宿し、ヘラクレスギルディ、死戦を罷まかり通る!!」
　大山を震撼させ、巨きよ軀くが疾はしる。一方、着地したイエローは全武装を脱衣パージし、ヴォルティックブラスターを手にしている以外ほぼ丸腰同然になってしまった。
　──というか、脱衣パージ状態の胴体の肌色がアブソリュートになってしまっていた。
「うおああああああああああ露出度がもう限界だああああああああああああああ!!」
　俺の叫びを聞いて、むしろ嬉うれしそうにするイエロー。いや、もう、あれイースナの全裸隠し三点セットに匹敵する露出度だろ、イエローのプロポーションだともうＴＶに出れないぞ!!
「イエロー、武装をもう一度着衣せよ！　銃一挺ちようではヘラクレスギルディには通用せぬぞ！」
　露出三点セットの先輩・ブラックが肩で息をしながらもあえて着ろとアドバイスをする。
「ご心配なく！　もうわたくしは、独りよがりな脱衣はいたしません！」

「……そうか、誰かを守るために脱ぐ……それがお前の正義なのじゃな、イエロー!!」
　脱ぐも着るも、己が正義と共に。開眼したイエローを、頼もしげに見つめるブラック。
　ヘラクレスギルディは頭上で腕を組み、ハンマーのように振り下ろす。
　地割れが起きる大地を、イエローは身軽になった身体で危なげなく回避した。
　アブソリュートチェインはテイルギアそのものが完全解放ブレイクレリーズされているらしいが、それは始めから渾身の全力で戦っているも同然。あれだけの超砲撃を放って、武装を再着衣リバースできるのか!?
　イエローはこちらに視線を送り、アブソリュートリングに手を添えた。
「ご主人様！　お力を!!」
「えっ……わかった!!」
　今の自分になにかできることがあるのか──思わず応こたえてから疑念を抱いた俺の元へ、黄金の首輪紐リードが伸長してきた。
「ご主人様、それを握ってくださいまし！　そして遠慮なく引っ張ってくださいまし!!」
「こうか!?」
「……あふんっ……」
　条件反射でリードを握ると、イエローは四よつん這ばいになり、びくびくと身体からだを震ふるわせ始めた。
　……俺はイエローの全てを受け止めると誓ったんだ。
　死闘の真まっ直ただ中なかでワンちゃんスタイルになったところで、俺たちの絆きずなは揺るがない!!
『そうか、アブソリュートリングはご主人様からのエネルギー供給……

チャージデバイスでもあったんですね！　これならば、レッドがいる限り残弾数は無限も同然です!!』
「それじゃレッドが絞られ尽くすでしょうがああああああああああああああああああ!!」
　へたり込んだブルーが悲痛な叫びを上げる。
　原理はわからないが凄すさまじい疲労感だ。残弾数無限とブチ上げたが、このチャージを二回も三回もやられたらマジで干物になってしまうかもしれない。
　チャージを完了したリードを手元の長さまで縮めると、イエローはヴォルティックブラスターのグリップにリードをドッキングした。
　首輪アブソリュートリングと雷銃ヴオルテイツクブラスターが、リードという名のエネルギーパイパスで繋つながった。
「名付けてヴォルティックブラスター・フォートレス!!」
　要よう塞さいの主砲を思わせる巨大な球体状の弾丸が放たれ、ガードしたヘラクレスギルディの四本腕の爪つめをことごとく砕いた。
　だが、その代償も少なくはない。イエローはまじまじとブラスターを見つめ、
「一発で全エネルギーを使いきってしまいましたわ！　ご主人様、もう一度チャージを!!」
「無理だ死ぬ――――――――――――――――っ!!」
　拒否したのにリードが無む理り矢や理り俺の腕に巻き付いてきた。ホラーだ。
　せめて何でツインテールに触れてチャージするシステムにならなかったんだ……。
「ぬううおおおおおお!!」
　角で地面を抉えぐり上げるように突き立てたヘラクレスギルディ。
　俺を絞り滓かすにして武装を再着衣リバースしたイエローは、牽けん

制せい射しやをしながら距離を取る。そして、目の前の敵の惨状に気がついた。

「身体が、赤く……!?」

　黄金の身体にはヒビが入り始め、中から赤銅色の熱気が漏もれ出始めている。

『……ヘラクレスギルディの体熱が異常上昇を始めています……！　中心部からの同心円状の温度頒布……もはや、小型の恒星に近付き始めています!!』

「なんだって!?」

　トゥアールの分析は想像以上に恐るべき内容だった。限界以上の力を取り込んだ反動だろう。

「お前、そうなるのがわかっていてスタッグギルディを受け入れたのか!?」

　ヘラクレスギルディへの変身は自滅一歩手前の急激な進化。聡そう明めいなこいつが事前に危険性を想像できなかったとは思えない。

「誰だれが自滅を受け入れたと……？　邪魔をしてくれるなよテイルレッド！　私は今、生まれて初めて自らの恋愛こころを熱く燃やしているのだからな……!!」

　イエローの攻撃を受け身体からだが砕け始めているのか。

　内側からの爆熱で崩壊が進んでいるのか。

　ヘラクレスギルディが生きる太陽と化した要因がどちらなのかは定かではない。

　ブラックはメガ・ネに肩を借りながら、最悪の結末を口にする。

「だが、そやつの恋愛属性ラブにかける信念だけはいささかも砕けておらぬ……！　このまま最後まで攻防を続ければ、崩壊の爆発に巻き込まれてしまうぞ!!」

「空にブッ飛ばして爆発させればいいの!?」

「いや、相当高空じゃなきゃ周囲の街にも超高熱の体片が隕いん石せきの雨になって降り注ぐで!?」

　今や戦いを見守るしかできないブルーとメガ・ネも、頭をフル回転させている。

　ごく小型とはいえ、恒星そのもののヘラクレスギルディ。

　それが地上で爆発すれば、富士山どころか日本そのものすらが危うい。

「わたくし、あなたたちに見抜かれなかった通り、この気持ちが恋かどうかはわかりませんが……あなたたちも決して、恋のプロフェッショナルとは呼べませんわね」

「何……!?」

「恋の形は変わりゆくもの……決して一つだけではありませんわ!!」

　一振りでフレアを巻き起こす豪腕をかい潜くぐり、俺たちからヘラクレスギルディを遠ざけていくイエロー。まさか、イエローの狙ねらいは……!!

「やああああああああああああああああっ!!」

　背中の二門の巨砲を前面に展開。ホールドグリップを側面から屹きつ立りつさせ、逆手でガッチリと摑つかむ。レーザーを恒常発射することでヘラクレスギルディの身体を持ち上げ──そのまま、腕を振り上げて射軸を上空へと強引に逸そらし。あの巨きよ軀くを、宙空へ投げ放ってしまった。

「うおおおっ……!!」

　だがあれではメガ・ネの言った通り高さが足りない。せいぜいが二〇ｍほど、落下時間は数秒にも満たないだろう。

　イエローはその数秒の滞空に賭かける。再び首輪を黄金に輝かせ、全武装を勢いよく脱衣パージした。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

　武装は落下してくるヘラクレスギルディの真下でさらなる攻撃的なフォルムに進化した超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンへと合体し、主砲以外の全ての武装を放ってヘラクレスギルディを拘束バインドした。
「テイルイエロー、貴様、まさか……!!」
「さあ、恋の初心者同士！　銀河の果てまでランデブーと参りましょうか!!」
　跳躍したテイルイエローは超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンの主砲の前へと身を躍らせ──
「コズミックウウウウウウウッ！」
　自翔する超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンと共に、極大の雷弾となってヘラクレスギルディへと蹴撃を放った。
「ジャッジメント──────────────────ッ!!」

「イエロ────────────ッ!!」
　銀河を一直線に突き抜るかのような、一筋の流星。
　日本で一番空に近い高山を飛び出し、ツインテールが宇宙へと飛の翔ぼってゆく。
　俺たちの叫びも虚むなしく、両者は空の彼方へとその姿を消した──。

◇

　摩ま擦さつ熱ねつの深しん紅くをも弾く黄金の雷が、地球の大気を焦がして翔かけ抜ける。
　ヘラクレスギルディは空を臨のぞみながら、満足そうに呟つぶやいた。
「……私が恋の初心者……フッ、それを言われると痛いな……」

　恋する人間を愛めでながらその実、属性力エレメーラとしての恋と本当の恋の狭はざ間まとで葛かつ藤とうし続けた戦士。
　恋心を愛でるためには、自ら恋をできない──そんな矛む盾じゅんに満ちた生が、ようやく報むくわれたのかもしれない。
「だが最後に、今まで見てきた中で一番美しい恋の発芽を見られてよかった……。スタッグギルディたちも、私を責めまい」
「え……」
　もはや大気の焦げる音さえ消え始めた宇宙の入り口で、イエローはヘラクレスギルディの言葉を確かに聞き取っていた。
「再び私の前に姿を現した時、お前は明らかにテイルレッドに恋をしていた……。ほんの数十分前には感じなかったのにだぞ。……まさに流星のごとく孵ふ化かした初恋……今まで、しっかりと温め続けていたのだな……」
「ヘラクレスギルディ……」
　イエローの恋は無かったのではなく、孵う化かの時を待っていただけ。そうはっきりと看かん破ぱした。
「いつ死ぬか、消えるかなど問題ではない。私たちは好きなものをそれぞれ見守り、愛で、そして戦ったのだ。これに満足せずして、他にどう満たされろというのだ」
　眼下に空を臨む高度に到達し、それでも上昇の速度は緩まない。
「それと、異形の怪物エレメリアンにこんなことを言われても困るであろうが……私はやはり、貴様に心奪われていたようだ。属性力エレメーラではなく、貴様自身にな……」
　不器用な恋の告白。嫌悪も、嘲ちよう笑しようもなく。清すが々すがしい笑顔で、イエローは返事をした。
「ごめんなさい。わたくし、好きな人がいますの」
「うむ！　だからこそ私は惹ひかれた……。数々の恋を見守ってきた極

めつきが、自分自身の恋だったとは、痛快なことだ!!」
　ついには無数の星々が、上昇を続ける二人を迎え入れようと煌きらめき始めた。
「テイルイエローよ、ここで燃え尽きてはならぬ！　その恋こ愛いを燃やし尽くすまではな!!」
「えっ……!?」
　好敵手の恋に激励を送り、ヘラクレスギルディは最後の力を振り絞ってイエローを振り払う。
　反動でイエローから離れると、ヘラクレスギルディは自壊を促進するかのように体熱を集束させ始めた。
「さらばだ！　美しき恋の姫よ！」
　恋心を愛めでるという、属性力エレメーラの中でも秘中の秘をその身に燃やし続けた戦士。
　その最期もまた、恋のように儚はかなく、そして銀河の星々のように鮮やかなものだった。
　まるで、丹たん精せい込めた一枚の絵画イラストのように――。
「――――ッ!!」
　視界を灼やく閃せん光こうに続き到来した強烈な爆圧が、姿勢制御もできずに宇宙を突き抜けていくはずだったイエローを、ギリギリ縫ぬい止めた。
　ヘラクレスギルディは、イエローを宇宙の塵ちりにさせまいと自ら爆発を選んだのだろう。
　導かれるように飛来した二つの恋の石エレメーラオーブを、そっと手に取るイエロー。
　宇宙服の姿勢制御ブースターのようにツインテールを操作し、何とか大の字でたゆたうまでには快方に向かったが……ここが限界だ。
「これでは、帰れませんわ……」

エネルギーも底を尽き、チャージもできぬ遥はるか空では、もう地上に戻るための推進力は何もない。最後にはツインテールさえ動かす力もなくなり、イエローはそっと目を閉じた。
「けれど、誉めてくれますわよね、ご主人様……。わたくし、ようやく──あふんっ」
予告なく首がぎゅっと絞しまる背徳的な心ここ地ちよさに、イエローが甘い声を上げる。
見れば黄金のリードが、宇宙から遥か眼下の地上にまで長く長く伸びていた。
地ほ球しを離れてなお感じる温ぬくもりに、イエローの涙が玉たま雫しずくとなって舞い上がっていく。
「これは……レッドの……ご主人様のツインテール……」
小指と小指を結ぶロマンチックな糸でなくてもいい。
運命の糸は金色で、ご主人様のツインテールへと繫つながったのだから──。

◇

ツインテールに手て応ごたえがある。そして、リードを経へて、ツインテールとツインテールが繫がった確かな感触。
ほっと安あん堵どの溜ため息いきを漏もらす。これが本当の、間一髪で間に合った、ってやつか。
「ようやく俺も、自力でツインテールを動かせたよ……」
イエローが空に消える刹せつ那な。飛行機雲のように垂れ下がるリードに手が届かず万事休すと思われたその瞬間、俺のツインテールがリードに巻き付いていた。
『総そう二じ様！　イエローの上昇が静止しました！　慧え理り那なさ

んは無事です！』
　トゥアールの通信で皆安あん堵どし、全員地面に腰を下ろす。
「体力つけなあかんで、イースナちゃん」
「ならばわらわもレッドからチャージする追加装備を作る！」
　ツインテールの瑞みずみずしさを守るために他の全ての体力をチャージに費やして干ひ涸からびる寸前の俺を見て、何な故ぜそんな恐ろしい提案ができるのか……。
「そうね。あたしも特訓しなきゃ。属性玉エレメーラオーブに振り回されるようじゃ、また今回みたいないいとこなしになっちゃうし」
　敵の攻撃と自滅でダメージ半々といったブルーも、左腕を見つめて苦笑し、溜息をつく。
『さすがに今回は戦いっぱなしというわけにはいきませんね。完全修復は無理ですが、自然環境のリカバリーも視野に入れて修復装置を開発してみようと思います』
　富士山も惨さん々さんたる状況だ。山道もほぼ消えてなくなってしまった。
　トゥアールの申し出は、願ってもないことだ。
　全員で、遥はるか空を見上げた。リードをたぐり寄せ、イエローの帰還を待つ。
「俺のツインテールは、道みち標しるべだ……。宇宙の果てまで行っても捕まえてやる！　帰ってこい、イエロー!!」

『でも、変ですね。今し方こちらに迫ってくる新たなエレメリアンの反応をキャッチしたのですが……すぐにロストしました』
「え……？」
『いえすみません、気のせいかと………………あ』
　トゥアールの通信と、飛行機の離陸時のような風切音が重なり──もは

や、助言を受けても回避不能なことを悟った。
「ご主人様あああああああああああああああああああああああああああああああん!!」
　意識を失う前、俺が見たのは、イエローの尻だった。

　生まれて初めて、顔面騎乗位とやらを体験してしまった。
　でもそれは、成層圏から落下してきて顔面に尻が着弾するという、イースナのエロゲーそのままの状況での出来事で。
　全てを受け止めるという俺の誓いが、脳と共に大きく揺らいだ体験だった──。

エピローグ　古代の強者たち。

　空で胡座あぐらをかくように浮かび、眼下のレッドたちを見下ろす炎の翼。
　フェニックスギルディが、世界で一番ダイナミックな顔面騎乗位をかました少女に向かって笑いかける。
「つまんねえこと言っちまった借りは返したぜ。ヒーロー！」
　一瞬でロストしたエレメリアンの探知信号。
　それは、美の四心ビー・テイフル・ハートの最後の戦いを偵察していた死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの斥せつ候こうだった。
　ヘラクレスギルディが空に消え、満まん身しん創そう痍いのレッドたちだけが地上に残ってから動き出したことから、斥候を装っていても何が目的だったかは明白だ。戦果優先、漁夫の利を手にすることも厭いとわなかったのだろう。
　その不心得者を横からとっ捕まえ、一撃で倒したのは、ツインテイルズの戦いを見守っていたフェニックスギルディだったのだ。
　本人の言の通り、借りを返すため。そして、自身の正義のために。
　清すが々すがしい笑顔は、ごっこ遊びを卒業して本物のヒーローになり始めたイエローへのエール。
「あいつらはまだまだ強くなりそうだ。ツインテールももちろんだが……テイルギアってのはすげえもんだな。是非、作った奴やつをこの目で見てみてえもんだ!!」

　トゥアールの装置で存在を探知できないフェニックスギルディが、この世界で動き始めた。それは、どんな助力を受けてもなお看かん過かできない、紛まぎれもない脅威だった。

◇

　美の四心ビー・テイフル・ハートが消え、数か月前と同じ残存部隊へと戻ってしまった、総そう二じたちの世界のアルティメギルの侵攻部隊。その基地を目指し、新たな移動戦艦が異空間を移動していた。
「――首領様の許可は得た。死の二菱ダー・イノ・ランヴアス、美の四心ビー・テイフル・ハート倒れし世界へと向かう!!」
　敗れた美の四心ビー・テイフル・ハートをページが一枚一枚破られていく古文書になぞらえた高難易度のたとえ話を、数時間ぶっ続けで聞いたおかげで、念願の正式な出征許可を得た。首領の間から帰還した巨漢のエレメリアンが半ば呆あきれ交じりに勢いよく玉座に座ると、戦艦そのものが震動した。
　最期までは観測できなかったが、黄色の戦士にビートルギルディが倒されたことはわかる。
　戦艦の操縦室でメインモニターに映る華々しく雄々しき戦いを、しかし、鼻で笑うようにーいち瞥べつし、巨漢のエレメリアンは頬ほお杖づえをついた。
「恋愛などとおぼろげな属性を持つがゆえ、貴様は惑まどうのだ」
　同じ部隊長でありながら無様に倒れた、ビートルギルディへの侮ぶ蔑べつ。
「完成された絶対なる不動の意志は、完成された属性に宿る!!」
　竜の如き鱗うろこに錬れん磨まされた牙きばと爪つめ、見る者全てを竦すくみ上がらせる鋭い眼光。極限まで攻撃に特化し完成された肉体は、古代の覇者・ティラノサウルスを想起させるに充分だった。
　まさしく彼こそはティラノギルディ。
　直属部隊・死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長であり。ビートル

ギルディとも、既知の仲であるはずの戦士だった。
「恋愛という始まりを超越し、美を完成させた神の領域！　我わが百合属性ガールズラブこそが、この地上で最も気け高だかく美しい、帝王の属性なのだ!!」
　ついに死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが本隊を引き連れ、総二たちの世界へと進路を取ったのだ。
「先行して属性力エレメーラ奪取に向かわせた二兵は、続けて倒されたようだ。そしてやはり、ダークグラスパー様がツインテイルズなる者どもの仲間となったのも、事実であった」
　メガネウラギルディと、フェニックスギルディに倒された二体のことだろう。報告を受けた将は、構わぬ、と大笑。
「ダークグラスパーが裏切ったと聞いて臓はら腑わたの煮えくりかえる思いであったが……百ゆ合りに転生したとあらば話は別!!　裏切り大いに結構!!」
「……いいのか、ティラノギルディ殿よ。ビートルギルディ殿は、友人であったのであろう？」
　のっそりと上体を起こし、ティラノギルディが格好をつけて切ったモニターを躊ちゆう躇ちよなく再びＯＮにした、額から三本角づのを生やした灰色のエレメリアン。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの左牙・トリケラトップギルディが、狭い部屋で高笑いを続ける上司にちくりと進言する。
「フッ……漢おとこととの友情など、百合属性ガールズラブを持つ者にとっては汚濁も同然！　仲間など不要！　孤高こそ帝王の覇道よ!!」
　両腕を広げ、虚空へと高笑いを響かせる。
　アルティメギル最凶の処刑部隊と名高い死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長は、孤高に殉じる帝王だったのだ。
「では何な故ぜ、涙されるのだ……」

トリケラトップギルディが操作するモニターに映った最後の映像は、テイルイエローのキックを食らい、満足げに微笑ほほえむ赤熱化したヘラクレスギルディだった。
「汚ゴ濁ミを……洗い流しているのよ……!!」
決別の熱き涙と共に、ティラノギルディは間近に迫った異世界を見据える。
一度として侵攻作戦に携たずさわったことのない、武闘派部隊。
その魔の手が、総そう二じたちの世界に迫ろうとしていた――――。

YUNO IWABANE+TAILGEAR TYPE-P

武器：フォースフェニックスラッシューター
必殺技：バーニングフォースフィニッシュ
ミラージュリバイブ　その他多数



テイルギア設定資料 07

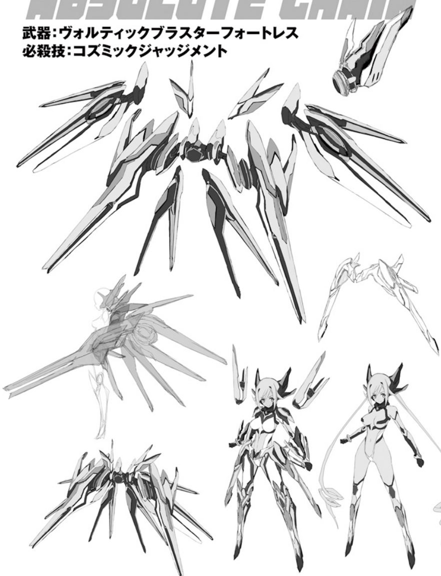
結翼唯乃＋テイルギア TYPE-P



ペガサスギルディがトゥアールのテイルギアを見て急遽作り上げ遺したレリーフ、テイルレインフォーサー。それを自身の武器に装着し変身デバイスとしたことで、フェニックスギルディ人間体・結翼唯乃が変身した姿。変身デバイスとしては不完全の状態で保管されていた、未完成の試作品である。試作品ゆえ不安定な部分が多々あるものの、フェニックスギルディは気合いと根性で変身にこぎつけた。素の状態でもギア装着者と互角以上の力を持つ唯乃が変身しているため、次元の違う戦闘力を誇る。たった一人で組織に反逆した戦士の到達点である。

TAILYELLOW ABSOLUTE CHAIN

武器：ヴォルティックブラスターフォートレス
必殺技：コズミックジャッジメント



テイルギア設定資料 08

テイルイエロー アブソリュートチェイン



迷い続けた末に殻を破った慧理那(えりな)が生み出した絶対服従首輪(アブソリュートリング)によって、テイルイエローがテイルギアそのものを完全解放(ブレイクレリーズ)させた姿。全身武装の破壊力が大幅に強化されているが、反面これまで気力次第だった装弾数も制限が付いた。激しいエネルギー消費をご主人様であるレッドからのエネルギー供給で補うなど、より総二(そうじ)との繋がりが深まっている。脱衣(パージ)時の際どさまで強化されているが、自分で進化した姿なので、希望どおりなのだろう。拒否してもリードを無理矢理レッドに握らせるなど、積極的なドMとしての道を歩み始めてしまった。

あとツインテールがき

　もはや半ページがデフォルトになってきたあとツインテールがきですが、僕の日常なんて書き綴つづって面白いことなど何もないのでこれだけあれば十分だと思っています。

　最近東京に遠征することが多く、自宅と同じぐらいの大きさのディスプレイで原稿執筆したいなあとキャリーバッグにＰＣモニタ（21インチ）を搭載して新幹線に乗ったわけですね。

　移動時にめっちゃ重いけどやっぱ画面大きいといいわ～と執筆テンションも上がっていたところ、僅わずか二度目の電源投入時に画面にヒビが入っていてあえなく使用不可になりました。

　やっぱり旅は身軽が一番です。ここで挫ざ折せつしなければ原稿印刷用にプリンタを携行する野望すらありましたが。ちなみに硬い椅い子すで尻が痛くなった経験からクッション携行してます。

　制作現場やアフレコ現場でも気がついたらいるので「お前本当は東京に住んでんじゃないのか」と疑われる北国在住原作者ですが、アニメもいよいよスタートします！　僕の超絶新幹線ライフは全く貢献していませんが、多くの方の魂の結晶であるアニメを、どうぞよろしく！

　謝辞です。イラストの春かす日がさん。今回もド迫力のカラー口絵ありがとうございます！　戦闘員がＴＶ画面を埋め尽くす日が本当に来てしまいましたね……。そうそうモケーの語源は──

　今回も、完成と出版に携たずさわってくださった全ての皆様に、感謝とツインテールを!!

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。夢だけにね☆というのは１巻の頃冗談半分で書いたことですが、今、夢だったことが確かに叶っていく実感があり、幸せです。しかし、著者コメントに真面目なことを書くとそわそわするのは今も変わりません。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。７

２０１４年９月26日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　丸澤　滋

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１‐８００１

東京都千代田区一ツ橋２‐３‐１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１４年９月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451508-4